
乱世を駆ける牙と傍らに遊ぶ蝶と

界軌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

乱世を駆ける牙と傍らに遊ぶ蝶と

【Nコード】

N0555P

【作者名】

界軌

【あらすじ】

かなり口の悪い女子高生、橘蝶夏。彼女が凡そ五百年の時を越えて訪れたのは、かの有名な戦国武将・織田信長の元だった。

しかしこの世界は蝶夏が知っている戦国の世とはちょっと違い、妖魔や物の怪が人と共存して暮らしている。織田家の当主である信長にも秘密があつて……。

知識としてしか知らない時代の荒波に翻弄されつつもしなやかに生きる少女と、戦国時代の嵐の目とも言える男の生き様を絡めて描く戦国ファンタジー。

戦国時代を勉強しつつ進めるので、もう一方の作品と違って
投
稿
ペ
ー
ス
は
遅
い
と
思
い
ま
す。

一、出会いとしては最悪の部類だ（前書き）

新シリーズを開始しました。

唐突に書きたくなつた戦国時代ものです。

宜しく願います。

一、出会いとしては最悪の部類だ

時は戦国、天文二十一年。西暦に直せば一五五二年。

場所は尾張の国、那古野城。明治以降は愛知県名古屋と名を改めた地に建つ城だ。

城とは言っても、周囲に堀を巡らせ、土塁の上に木塀を建てた簡素な集落と言った風情だ。建物と言うと平屋が並び、高い建物は要所に置かれた高井楼（二階建てほどの高さの見張り台）があるばかり。しかしこの時代、尾張国の守護代織田本家の一分家でもなかった弾正忠織田家（信長の父の出身家）にとっては分不相応とも言える規模の城であった。

その城の、城主が起居する建物にほど近い裏庭へと駆け込んだきた少女がいた。

彼女の名前は橘蝶夏。白いシャツに赤いチェックのネクタイをし、お揃いのチェックのスカートは、制服としての規定の長さを無視して超ミニにしている。足元はニーハイソックスと、いつでもどこでも履いていく高機能スニーカーで運動性を確保。背中の半ばまである髪は一回も染めたことの無い黒髪だが、緩いパーマをかけて風に揺らしている。

格好から察することができるように、彼女は20世紀生まれの女子高生だ。

なぜ彼女が五百年も前の那古野城にいるかというと、いわゆるタイムスリップをしてきたからだ。

そして、なぜか真っ先に出会ったこの城の主、織田上総介信長にとっつかまった。出会った瞬間に体を抱えあげられて、はっと我に返ったときには那古野城の廊下の風景を信長の肩の上から眺めていた。

綺麗に磨かれた床ねー、と足をぶらぶらさせかけて、「待て。待て待て、自分」と現実逃避しかけた頭を切り替えた。

「それは独り言か？」

どうやら口に出ていたようだった。男性にしては高めだが、女性よりは明らかに低い声の問いが耳に届く。触れ合った体を伝わるようにしても響いた。さらに、その声は背中がぞくぞくするような色気まで秘めている。

「ひええっ」

蝶夏はおもわず奇妙な声を口から漏らして両手で耳を覆ってしまった。そのせいで障子を開けるスパンツと小気味いい音を聞きそびれた。

蝶夏を抱えていた男、信長は、自分の問いに答えない少女を気にとめることもなく、部屋の奥に進み、彼女を畳の上におろした。

「へっ？」

耳を塞いでいた両手を下ろして蝶夏が見上げると信長は先ほど開いた障子をスパンツと、また小気味いい音をたてて閉めていた。

それから信長が振り向いた後の展開がいけなかった。

その展開の後、彼が僅かに席を外した隙に、蝶夏は、……逃げた。

というわけで、彼女は今那古野城内を絶賛逃亡中というお話だ。

二、逃げ切るには土地勘ならぬ城勘が足りない

逃亡すること小一時間。

未だに彼女は現状を知らない。5W1Hのうち、分かっていることは……一つもなかった。

そう広くもない（はずだった）城内をこそそと歩き回り、ようやくこの裏庭へと辿り着いたが、裏庭なだけあって特に何も無い。期待していた裏口も、資材やらゴミやらの山もなし。ちなみにこの山はよじ登る為の足場として期待していた。

「やっぱり、あの木か……」

裏庭を囲む木の塀がある。木塀には屋根の様なものが乗っており、蝶夏の背丈よりも高い。その手前に一本の木があった。幹の太さは充分だが、いかせん、枝振りが貧弱だ。

「いや、あれしかないしなあ」

ぼやきながら蝶夏はその木に歩み寄り、背伸びをして枝を掴んだ。スニーカーの靴底をざらざらとした幹に押しつけると両腕に力を込めて体を持ち上げる。

意外と上りやすい間隔で枝が生えていて、あっという間に蝶夏は目的の枝まで上りあがっていた。

「びば。高機能スニーカー！ 高かっただけあるねっ」

あとは、塀に届くあたりまで枝の先に進めればいい。にじりにじりと枝を進む。

これ以上進むとやばそうかな、という辺りで蝶夏は止まった。

さて、問題はここからだ。

腕を組んで蝶夏は考える。

いち、飛び移る。……失敗すると塀のこっちかあつちで、どかんと派手な音をたてる羽目になる。

に、手が届くぎりぎりまで進んで、枝が折れる前に塀に掴まる。

……いくら蝶夏が痩せ型とは言えさすがに枝が折れるだろう。

「うっん。逃げきるためには勢いをつけてあっち側にどかん、かな」

どちらを選んでもかなり危険な賭けに違いない。「逃亡か、死か」交通安全の標語みたいなことを考えていると足下から声が掛けられた。

「なにをしている」

聞き覚えのある美声だ。思わず体が震えて枝の上で蝶夏はバランスを崩した。

「ひえっ……ぎゃあああああ」

最後の「あっ」の部分で何とか堪えた。

両手両足を駆使して枝にしがみついたまま下を見下ろせば、すぐ脇に腕組みをした信長が立っていた。

薄暗いあの部屋ではよく見えなかったが、細面な顔立ちは彫りが深く、現代ならハーフかクウォーターと呼ばれる程だ。長い黒髪は頭の高い位置で括られ、癖毛なのかあちらこちらに跳ねている。長い前髪の隙間から覗く黒瞳は意外と涼やかだ。だが、今は面白いものを見つけた子供のような好奇心が揺れていた。

「急に声かけないでよ！危ないじゃない！」

今にも飛び出しそうな程激しく脈打つ心臓と、荒れた呼吸を押さえながら蝶夏は眼下の男に叫んでいた。

彼はしれっとした顔で「逃げるほうが悪い」とのたまう。

さらに、反論しようと枝の上で伸び上がった蝶夏に構わず、堀のほうを指さす。

「この先は堀だ。城壁を越えたところでずぶぬれになるのがオチだ」目を剥く蝶夏に、にやりと人の悪そうな笑みを返す。

その笑みに、反骨精神がむくむくと沸き上がってきた蝶夏は、叫んでいた。

「堀がなんだ！ クロール25メートルは必修な女子高生なめるなよ！」

「ほう、泳げるか。ところでクロールなんとかってなんだ。あと、じょしこうせいとはなんだ」

「クロール25メートルは実は小学生のノルマだなあ。女子高生は……改めて聞かれるとなあ。何て言えばいいんだろう。あ、高校に通う女の子！」

「こうこうとはなんだ」

「高校は、高等教育を教える学校」

「……学校」

「え」。学問を教えるところ……」

「ほう、女に学問を教えるところがあるのか。興味深いな」

「高校はお金と試験に受かる根性があれば誰でもいけるよ」

顎に手をかけ考え込んだ男に半ば呆れて蝶夏は適当なことを言った。

すっかり逃げるタイミングを逃していた。

しばらく思案するように視線を落としていた男は、おもむろに蝶夏を仰ぎ見ていった。

「とりあえず、降りてこい」

片手を蝶夏へと伸ばす。

しかし彼女はそう言われて「はい」と素直に降りていくほど乙女でもなければ、先ほどの（ある意味）貴重な体験を忘れられるほどおめでたい性格もしていなかった。

とりあえず、着物を着た長髪の男に盛大に舌を出して顔をしかめてやった。

「そう言われて誰が降りるかっ」

そう言った瞬間、やたらと大きな声が裏庭に響きわたった。

「殿！娘が見つかりましたか！」

あまりの大声に身を竦ませた蝶夏は今度こそバランスを崩し、落ちた。

叫ぶ間も無く、つるりと体が右に傾き「あ、落ちる」と思った瞬間、蝶夏の全身は浮遊感に包まれていた。地面に叩きつけられるの

を想像して目を強く瞑る。

どさり、と音がしてすぐに至近距離から声が聞こえた。

「見つかった上に捕まえられたな。でかしたぞ、新助」

例の美声が、向こうにいる男を誉めたらしい。

蝶夏が恐る恐る目を開けると、見覚えのある色の着物が見えた。

顔を上げると綺麗に髭をそった形の良い顎が見えた。

どうやら眼下にいた男に受け止められて、現状は乙女の憧れお姫様抱っこ中らしい。

「え。拙者の手柄ですか？お褒め頂き、有り難き幸せ！」

先ほどの大声が嬉しそうに言った言葉に、状況を忘れて蝶夏は腹を立てた。

「ちよつと！手柄って何よ！ あたし、落ちて頭打って死ぬところだったんだからね。反省しろ反省！！」

猛抗議を廊下にたたずむ髭面の男に向けると、返答は傍らの男から返ってきた。

「俺が受け止めたのだからいいだろう」

まだ燃え盛っている怒りのままに蝶夏は自分を抱き上げている男を、ぎつと睨みつける。

「そう言うのは結果論っていうの！ あんたがいなかったらあたしはこの地面でぐちゃぐちゃになってるところだったのは変わらないでしょ！」

「一理あるな」

男が軽く頷くその背後では小さな騒ぎが起きていた。

蝶夏を転落死させたかけた髭面の大声で人が集まってきたのだ。

侍女とおぼしき二十歳前後の女性が廊下の端に一人と、その反対端に五、六人の少年たちがいた。

少年たちはいずれも同じ色の着物と袴を身につけている。彼らは那

古野城に勤める小姓たちだ。

「あ、あの娘、お館様にあのような口を利いて……！」

「お手打ちだ、殺されるぞ」

「……………」

皆青褪めて、不安気に言葉を交わしている。

信長はそこに蝶夏の見張りを命じた者がいることに目ざとく気がついた。

「方輔、お前は娘一人まともに見張れんのか？」

声を掛けられ、びくりと肩を揺らしたのは少年たちの中でも一番大柄だった。しかしその顔は真っ白で、主の勘気に触れた事を察し、これから言い渡される処分に完全怯えていた。

ぶるぶると震え、弁解さえ出来ない様子の彼を見て、蝶夏は思わず言っていた。

「ていうか、むしろここは上手く逃げたあたしを褒めるところじゃない……？」

小姓たちのいる廊下に向いていた信長の顔が蝶夏を見下ろす。

「お前は悉く俺の言うことに逆らうな」

そう言うのと、「くっ」と吐息をもらした。

「くっくっくっくっくっ……………」

低い笑い声が裏庭に響く。

小姓たちはあんぐりと口を開け、廊下を降りようとしていた髭男は意外とつぶらな目を大きく見開き、侍女らしき女性は口元を抑えて、それぞれ驚きの様相を隠そうともしていなかった。

そこへ、また新しい人物が現れる。

「信長様！政務が滞っておりますぞ。何を遊んでおいでかつ」

三、真実はどんな味かと考えたくなる

「信長様！ 政務が滞っておりますぞ。何を遊んでおいでかつ」

背は低めだが体格のいい五十代後半か六十代といった男が廊下の角から現れ、既に居た女性を追い越して進んでくる。

「五郎佐か」

舌打ちの後、信長が言う。

蝶夏にしてみればそっちの名前はかなりどうでも良かった。

聞き覚えのある名前に耳を疑い、そう叫んだ男の視線の先を追ってみる。自分を通り越していることは確かだ。

ならば自分を抱き上げているこの男の後ろかと体を伸ばして背後を見やる。……誰もいない。

「信長あ？」

語尾を上げて呟くと、「なんだ」と頭の上から声がする。

見上げれば、至近距離に端正な顔がある。

「誰が？」

眉根を寄せて聞けば、「俺だ」と返事が返る。

「織田上総介信長だ」

ご丁寧なフルネームで自己紹介された。

「うそお」

てんで気ままに動く蝶夏の口はそう呟いていた。

むっと気分を害したように信長の眉根が寄る。

自分の言ったことが疑われた、と彼が勘違いしたのに気付いた蝶夏はすぐに否定する。

「違う！ あんたが言ったことを疑ったんじゃないくて、そうじゃないくて、あたしが混乱してるから思わず言っただけ！ それだけ！」

かなり大雑把な言い分けだったが、目の前の男はある程度納得したようだ。眉間の皺がすぐに消えた。

「うつうつうつ。待つてよ。ちょっと待つてよ。あんたは織田信長？　じゃあ、ここどこ？」

信長と自分の足元を交互に指して聞く。

「知らなかったのか？　俺の居城である那古野城だ」

「な、名古屋？　じゃあ、愛知県？！」

「愛知、県？　いや、愛知郡だ。尾張国おわりのくに愛知郡那古野だ」

愛知郡。郡がつかなんて聞いたこともない。まして、尾張？　…

… 信長、尾張。

蝶夏はそこでようやく彼らの格好、この場所の様子に思いが至った。
「まるで、。。。時代村だよ……」某テーマパークの名称をぼそりと呟く。

「じゃあ、今つて、何年？」

気を取り直して再び聞けば、丁寧な答えが返る。

「天文二十一年だ。てんぶん見れば分かるが季節は夏」

「て、天文？　西暦何年？」

「西暦だと？　なんだ、それも暦しよめか？」

「西暦なし！」

蝶夏は頭を抱えた。

「あたしは、歴女じゃないつてのに！」

ようやく彼女は自分の現状をなんとなく把握した。

「ひより、ひよりがいれば良かったのに。むしろこんな目にあうのはひよりの方が相応しいのに。あいつなら一千万出したってこの状況を買い取ってくれるはずなのに……」

思わず呪文のように、親友である小金井ひよりの名を出した。

彼女は今話題の『歴女』というやつで、専門は戦国史だ。三英傑（織田信長、豊臣秀吉、徳川家康）のみならず、北は伊達政宗、南は島津義久までを愛してやまない少女だ。

これまで散々留まることを知らない彼女の歴女トークを聞いてきた（殆ど聞き流していたが）蝶夏としては、今すぐにでもこの立場を変わって欲しかった。

信長はというと、腕の中の少女の嘆きを意味が分からないなりに黙って聞いていた。

しかし僅かもしないうちに飽きたらしい。

「まあ、いい」

そう言うのと、ぐるんと、蝶夏の上半身を回した。彼女が目を瞬く間に、再び信長に担がれる格好が出来上がった。

当人は蝶夏の重さなど感じないようにすたすたと裏庭を進む。廊下上がったところで五郎佐に声を掛ける。

「これを置いたらすぐ戻る。向こうで待っている」

「……………わかり、申した」

かなり長い溜息の後、五郎佐はそれだけ言って一礼の後にその場を立ち去った。

その間にも蝶夏を抱えた男は廊下を進む。

かと思えば、いきなりぴたりと足を止めた。

「そう言えば、名を聞いていなかったな」

僅かに蝶夏の体を自分から離して、目を見ながら尋ねてきた。

一度はへの字に唇を曲げた蝶夏だったが、聞いてきた当人は既に名を名乗っている。ここで名乗らないのは、橘家の家訓に反する。

「橘蝶夏。右近の橘、左近の桜の『橘』に、ひらひら飛んでる『蝶』と、春夏秋冬の『夏』、で、橘蝶夏！」

高らかに名乗りあげると、目の前の男の眉が少しだけ動いた。

「家名が橘で、名が蝶夏か？」

「そう。どっちも気に入ってるんだから！」

「良い名だ」

それだけ言うとまた蝶夏を抱え直して歩みを再開した。

「はっ待て待て待て」

またしても状況に流されかけていた蝶夏は我に返った。男の肩に両手を突っ張り、もがく。

「どこ行くのっ」

「先ほどの部屋に戻す」

その返答に蝶夏はその部屋で行われた行為を思い出した。

羞恥と怒りで顔が真っ赤になっていくのが自分でも良くわかった。

「そ、そうだ、あんたさっき、あんな、あんなことしたんじゃない！」

首を巡らせた信長が、にやりと笑う。

怒りが増した蝶夏はぽかぽかと目の前の体を叩いた。

「この、変態つつつ！　よくもあんなことして、そんな、しれっと………！！！」

顔を真っ赤にして叫ぶ蝶夏を見て何を想像したのか、小姓たちまで顔を赤く染める。なぜか新助と呼ばれた髭面は耳まで赤かった。

その姿を見た蝶夏は咄嗟に思いついた。

「あんた、その、さっきあたしを殺しかけた髭！」
身も蓋もない言い方をして新助を指差す。

「あんたはあたしに借りがあるはずよ！それをいますぐ返してよ。つまり、こいつ止めて！」

「は、はあ？！」

髭面と呼ばれたことと命じられた内容に戸惑って、新助は目を極限まで開いて両手をわたわたと動かす。

信長はそんな彼に視線を送り、言う。

「ついてくるなよ、新助」

そして新助の背後まで駆け寄ってきた女性にも言う。

「茅乃は、呼んだら来い」

茅乃と呼ばれた女性は足を止め、軽く礼をした。

用は済んだとばかりに信長は足を速める。

蝶夏は役に立たない髭面に齒軋りしながらもまだ諦めていなかった。

「降ろせ！　離せ！　おろろせ！！！」

足をバタつかせて叫ぶ。

信長の腕が足を押さえつけようと太腿を掴む。

「ぎゃあつ。どこ触ってんの、変態！」

「触られるような格好をしているのだから仕方無いだろう」

「そもそも触るような状態にしたのはあんたじゃない！　だから、降ろせー！」

渾身の力で暴れるが、どうしてかあつさりと抑えられる。

一人で大騒ぎする蝶夏の声に時折近くの部屋から人が顔を出す、誰もが信長の姿を認めて「何も見なかった」と言わんばかりに引込んでしまう。

「か弱い乙女を助けようってやつは居ないのか、ここには！」

蝶夏の切実な悲鳴は那古野城内において黙殺された。

ついさっきも聞いた小気味のいい音をもう一度聞く段に来て、蝶夏は、最後のチャンスは信長が障子を閉めるために自分に背中を向ける瞬間しかないと思った。

すると信長はそのまま障子を閉めた。蝶夏を降ろしたりはしない。

「え」

予想外の展開に啞然となる蝶夏を抱いたまま奥まで進むと、壁の前に歩みを止めた。壁を背にさせて蝶夏を自分の前に立たせる。

彼女が信長の顔に目をやった時にはその細い両手を自分の両手で壁に縫い付けていた。

「なななななななななな、この姿勢！」

動揺する少女に嬉しそうに言う。

「お前、あれだけ奪ったのに随分元気だな」

奪われたのが何かを知っている蝶夏は目の前の男を睨み付ける。

「体力測定は年々下がる一方だけど、遊ぶことと逃げることに関しては女子高生の底力なめるなよ！」

反論されたというのに信長はまだ笑っている。

「よくわからんが、普通の女よりは丈夫そうだな。ならば、夜まで眠っている」

「よ、夜っ？」

上擦った声で問いかけるがもはや信長は返事をしなかった。

蝶夏の首筋に顔を寄せる。いや、唇を開き、伸びた犬歯を彼女の首筋に突き立てた。

溢れる血潮を飲み下す。

壁に押し付けられた蝶夏の腕から力が抜ける。

「へ、へんたいい……」

力を振り絞って罵倒するが、そこから先を蝶夏は覚えていられなかった。

失血による貧血を起こして、

ブラックアウト。

四、織田家当主の正体見たり

りりりりり、りりりり、と虫の音が蝶夏の耳に届いた。

身じろぎをすると、ことん、と頭が落ちる。どうやら布団の上に寝かされていたようだ。

目を開くと、暗い室内にぼんやりとした明かりが伸びているのが見えた。

体を振り身を起こすと、体に掛かっていた布地が落ちた。さらさらとした素材の、薄手の着物のようだった。上掛けが落ちたことで、自分の着ているものにも気がついた。白い、こちらも薄手の浴衣のようなものだ。袖は短く、肘が隠れるくらいの長さだ。全く自分で着た覚えは無い。

「起きたか」

その声を聞くと、寒くもないのに肩が少し震えた。

視線を上げると、蝶夏の足元の障子が開いていて、柱に寄りかかるようにして信長が座っていた。蝶夏と同じような袖の短い白い浴衣を纏い、左膝を立てた胡坐のような格好をしている。不思議と裾が乱れていない。右手には朱色の杯を持ち、右の膝の辺りに置いている。

しかしこの男、声を掛けておきながら、こちらを見てもいない。

むむ。と口を尖らせた蝶夏はさっと立ち上がり、男に文句を言うとした。立ち上がった瞬間にくらりと視界が揺れる。ぺたんと布団の上にしゃがみ込んだ。

「血が足りていないのだ。無理に起きるな」

ようやくこちらを向いて言う男に、蝶夏は恨みがましい視線を投げる。

「誰のせいよ。誰の」

ふっと笑うと、「俺だな」自嘲気味にそう言う。

その笑みをみて、蝶夏は彼がこれ以上あの行為を自分に強いるこ

とはないと確信した。少なくとも、今は。

相変わらず、夏の虫がりんりと鳴いている。

体調の関係もあってどうも調子が出ない蝶夏は、気になっていたことを聞いてみることにした。

「ねえ、あれ、あの、血を飲むのって、……………体質？」

蝶夏の方を向いたまま杯を口に運んでいた信長の動きが止まった。杯を元の位置に戻すと、彼女をまじまじと見つめてくる。

「体質か、だと？」

怒りでは無く、戸惑いに近い感情で眉間に皺を作る信長に、蝶夏はこくんと頷いた。

こちらに来る前、蝶夏の間感では二日前の晩に、彼女はテレビで『世界の難病スペシャル』という番組を見ていた。そこには、生き物の血肉にあるビタミンを生そのまま摂取しなくてはいけない病気というか、そういう体質の人がモザイクを掛けられて紹介されていたのだ。その番組の印象が強すぎて、信長もそういう体質なのかと聞いたのだ。病気と言わなかったのは彼女にしてみれば珍しく氣を使った結果だ。

真剣な顔でこちらを見つめる少女を眺めているうちに、信長の腹の中にはとてつもなく強烈な笑いがこみ上げてきていた。

「くっ、くくく……………」

堪えていられた時間は短く、すぐさま大口を開けて笑っていた。

「昼間といい、あんた笑い過ぎ！」

何が男の笑いのツボを押したかは分からなくとも、自分の発言が原因であることは明白で、蝶夏は頬を赤くして苦情を言った。

未だ腹を抱えながら信長が蝶夏を見て言う。

「お前、妖魔の類だとは思わんのか？」

妖魔……………。

「そっちか！」

別に蝶夏は、現実主義者で妖怪だの幽霊だのを一切信じない、という考え方の持ち主ではない。『リ。グ』も『バイ。ザード』も

観て、夜一人でトイレに行けなくなったりもした。だが今回は『世界難病スペシャル』が頭の大部分を占めていた為、全く思い至りもなかった。

信長を指差して、はっと気付いたように言う蝶夏を見て、彼は余計大きな笑い声を上げてしまった。さすがにバツの悪くなった蝶夏は彼を指していた指先を反対の手で隠して、彼の笑いが収まるのを居心地悪く待っていた。

「はあ……………」

額を片手で押さえるようにしながら長く吐息を押し出して、ようやく笑いは収まったらしい。

その姿勢のままポツリと話し始めた。

「織田家の祖は、大陸からの渡来人だったらしい」

蝶夏は首を傾げた。

「渡来人？」

「ああ。とは言っても朝鮮からではない。もつと大陸の西の方だ」

古来より日本と朝鮮半島、その先の現在の中国との間では、物と人の行き来が盛んだった。聖徳太子の時代には遣唐使が向こうへ渡り、渤海という国からは複数回渤海使が日本に渡ってきている。平安時代に栄えた国風文化の根底には向こうから齎もたらされた仏教や漢字がある。さらに室町時代には、国土を広げた元げんという国との間に戦いくさも起こっている。

元は、最終的に黒海まで国土を広げ、今のウクライナ辺りまで支配した。一国が支配できたとはいえ、飛行機や列車といった確実な移動手段が無い時代にそれだけの距離を越えて日本まで辿り着くにはどれほどの時間と労力が必要なことか……。

「容貌は大和人やまとびととは大分違ったらしい。黒髪黒目は同じでも、彫が深く、体格もかなり大柄だったらしいしな」

なるほど信長にハーフやクウォーターと言った印象を抱いたのは間違いはなかったらしい。身長も160cmくらいの蝶夏よりも頭一つ大きく、髭面の新介よりも大きかった気がする。

「そして、織田家の人間にもその容貌が受け継がれている。彫が深かったり、夜目が効いたり、八重歯が以上に長かったり、な」

「うん？ …… ちよつと。夜目が効いたり、八重歯が長いとか、何？ どゆこと？」

「先程言っただろう。妖魔だとは思わなかったのか、と」

「うん」

蝶夏が首肯すれば、信長も頷いてみせる。相変わらず顔の上半分は左手で覆ったままだ。

「言葉通りだ。その渡来人の祖は妖魔だったらしい。そして俺はその特徴の殆どを受け継いだ、先祖帰りだ」

そう言っただけ顔を覆っていた手をとれば、黒い両眼の虹彩の部分が淡く金色に光っていた。

「ここ数十年はいなかったと親父が言っていた。曾々爺ひひひひひひがそうだったとか、な」

蝶夏は魅入られたようにその瞳を見つめていた。そうして、思いついた単語を口にする。

「ヴァンパイア……」

「ばん……？」

聞き返す信長に、「吸血鬼」と言い直す。

「血を吸う鬼って書くの。よく物語に出てくる魔物だよ。女の子に大人気なの」

「魔物なのに人気があるのか？」

「うん。なんか、ロマンがあるのかなんとか」

ロマンの意味など分からなかっただろうに、何も聞かずに信長は光を放つ瞳を細めた。

「お前の国は、こことは随分と価値観が違うようだな」

「そうかもね。でも、きつと、根っこのあるところにあるのは変わらないと思うよ。おんなじ人間だしね」

自分に言い聞かせるように、蝶夏は言っていた。

信長はそんな彼女を静かな表情で眺めていたが、おもむろに立ち

あがった。左手には脇に置いてあつた刀が鞘ごと掴まれている。

「もういい時間だ。寝るぞ」

「はあ。お休み」

しかし、彼は杯を戻した盆を足で廊下に押し出すと、障子を閉めて、ひらひらと手を振る蝶夏の方へ歩いてくる。

障子越しに月明かりがぼんやりとしたシルエットを作る。

空いている右手でぞんざいに手を振って、「寄れ」と蝶夏に場所を空けるように言ってくる。

「ここで寝るの!？」

仰天する蝶夏に全く平静そのものの声が返る。

「当たり前だろう」

「なんで? …… そうだ! 正室さんとか側室さんとかいるでしょ! そっち行け!」

薄暗いのは何故か信長が不愉快そうに眉を上げたのがわかった。

「側室は城に住まわせてはおらん。正室もここにはいない」

「えっ、だって、のう…… そう、濃姫^{のうひめ}つて正室いたでしょ?!」

「濃……? ああ、美濃^{みの}の出身だからか。お前は事情に通じているのかいないのかわからん奴だな」

だってかなり有名な史実です!。と蝶夏は心の中で呟く。

「あの胡蝶^{まむし}だか帰蝶^{まむし}だかいう螻^{まむし}の娘なら、随分前に国に帰ったぞ」

「はあ?」

そんなの知らない。

「うつけの妻は嫌だとさ。螻の怒りを買ったようで、今は別宅に幽閉中だそうだ」

「ゆ、幽閉……。奥さんでしょ? ほつといていいの?」

「あんな女はいらん。親父に押しつけられたただだ。俺の傍らに立つ価値もない」

「サイテー……………」

「だったらお前は自分の夫が衣装や食い物にしか興味のない利益性の低い男でもいいのか?」

「あ。それならいい」

蝶夏の即答に面白そうに笑う。

「そういうことだ。寝るぞ」

「いやいやいや。自分の部屋行けよ！」

「ここが俺の部屋だ」

つまり蝶夏のほうが彼の部屋を占領していたということだ。

「じゃあ、あたし別の部屋用意してもらう！」

「ほう。こんな時間にか？ 皆いい迷惑だろうな」

「ぐぬう……………」

意地の悪い言い方だが、確かな正論に唸り声が漏れる。

それを実に楽しげに見ながら、信長は布団を挟んで蝶夏のへたり込んでいるのとは反対側、部屋の奥側に膝を着いた。

揺れない足下に思い出す。こいつはさつき酒を呑んでいたと。

「お酒！ さつき呑んでたでしょ！ 酒臭い人と一緒に寝る気はないよ」

「酒を呑んでいなければいいのか？」

今さつき自分が言った言葉はそういう意味だったなと気づく。

「あ、えと、それは」

「ならば問題無い」

ばさりと蝶夏に上掛けを被せると、ごろりと布団に横になる。

「大有り！」

頭を覆った布地をかきわけながら言うと、欠伸混じりの声が言う。

「あれは酒ではない」

「お酒じゃないの？ 何？」

「水だ」

「……………みずうつ！？」

お酒を入れるためのとつくりから朱色の杯に注いでいた、あれが、水？

「俺は酒は呑まん」

「へえ。呑めないんだ」

意外な言葉に蝶夏は感心したような声を上げた。

戦国武将は皆大酒呑みだと（酷い偏見だが）思っていた。

だが、半眼の信長は否定する。

「呑めないのではなく、呑まないのだ」

「何が違うのさ……」

「もう寝ろ」

返事をするのが面倒だったのか、眠かったのか、彼は蝶夏の上半身を覆う布を引いて器用に彼女を布団の上に転がした。

二人の間には腕一本分くらいの隙間がある。思ったより大きな敷布だった。

その距離に安心すると、眠気が蝶夏を襲ってきた。この時間まで眠っていたのは単純に失血による昏倒であって、休息ではなかったらしい。

ころりと寝返りを打って信長に背中を向ける。

薄れていく意識の中で、そう言えば彼に上掛けが無いのではないかと思った。自分がくるまっているものを返そうと、再び寝返りを打ったところですとんと眠りに落ちた。

五、眠る少女に思う……

信長は、上掛けに覆われて、ふてくされたように障子の方を向いた少女の背中を見つめていた。呼吸の様子から彼女が今すぐにでも夢の中へ行ってしまうだろうと予想がつく。

ところが彼女は再びこちらを向いた。正確に言うと、寝返りを打つ途中でぱたりと動きを止めた。上半身は天井の方を向き、下半身はまだ障子側を向いて腰を捻った状態だ。何故か左手が上掛けの端を掴んでこちらに向けられている。

蝶夏が気付いた通り、彼は何も掛けずに敷布の上に転がっていた。「なんだ、俺に掛けようとしたのか……？」

問いかけるが、瞼を閉じた少女は当然答えない。静かな寝息が聞こえるばかりだ。

信長は身を起こすと蝶夏の膝下に腕を入れて体勢を整えてやった。体を伸ばして眠れるようになった蝶夏はふう、と満足げな吐息を漏らした。

その横に再び転がった信長は肘をついて、起きている時よりあどけなさの目立つ少女の寝顔を眺めた。そうしながら、蝶夏を昏倒させて茅乃に世話を任せた後のことを思い返していた。

執務室に戻ると、五郎佐が正面に座って待っていた。人払いをしたのか、他に人はいない。

彼は姓名を平手正秀ひらてまさひでといい、信長の父・織田信秀おだ のぶひでの家臣であった。信秀の嫡男である信長の傳役もりやくとして幼い頃から共にある存在だ。

初めて会った時、彼は五郎佐衛門ごろうさゑもんを名乗っており、当時の信長は彼を『五郎佐』と呼ぶことにした。だから彼は今も信長にとって『五郎佐』なのだ。

彼の特徴と言えば、顔の洪さと性格の堅物さが著しく比例した

人物であるということが第一にあげられる。今もその顔は渋い。

そして、信長が腰を落ち着かせるや話し掛けてきた。

「信長様。あのような下女けしよをお側に置かれる気ですか」

書類に伸ばそうとした手を止めて信長は中年の傳役を見やる。
鬢びんに目立ってきた白いものが目に付く。

「口も悪い、態度も悪い。あれは御当主に対する態度がどうかいう問題ではありませんぞ。一体どこで拾われたのですか」

「あれは、最初から俺の腕の中に居たようなものだぞ」

蝶夏に初めて会ったときのことを思い出して信長は喉を鳴らして笑う。

僅かに目を見張った五郎佐は複雑そうな顔をする。

「随分と、楽しそうですね」

言われた当人はきょとんと目を瞬いた後、自分の頬をさらりと撫でる。

「そんなに楽しそうか？」

「ええ。『うつけ』と呼ばれていた頃に戻ってしまったようですよ」

前織田家当主であり父親である織田信秀が死に、まだ十八歳だった信長が織田家当主の座を継いで一年。気を張りつめ通しだったとは言え、楽しそうにすることさえ無かったのかと思ひ返す。そして「うつけに戻ったようだ」と言った瞬間の五郎佐の苦々しげな様子に苦笑が零れる。

「あの娘、蝶夏については今しばらく手元に置くぞ。……あれは、俺が欲しかったものを持っているかもしれんからな」

その言葉に五郎佐が首を傾げる。

外に用事を思い出した信長はその旨を五郎佐に告げて立ち上がった。

傳役は先ほどの発言に特に疑問を差し挟まなかった。

部屋を出る際、信長は問うた。

「うつけに戻ることは、そんなに悪いことか？」

五郎佐は、答えなかった。

五郎佐が答えなかった理由など信長には嫌と言うほど分かった。

彼は、『織田上総介信長』とは、今の織田家当主然とした自分が相応しいと考えているのだ。『尾張の大うつけ』と呼ばれた、あのカブキ者などではないと。

「蝶夏、お前はと思う？」

眠る少女に話し掛けて、自分の言葉に自分で笑った。

「この俺が、他者に意見を求めるか……」

六、最初の朝とは騒動の幕開けと読む

話し声が聞こえた。

「――、起きたら、……………」

視界が白く、夜ではないことははっきりしている。

蝶夏が目を開くと、廊下の手前に男が立っている。誰かと話しているようだ。

「む、う……………」

どこかで見覚えのある跳ねた髪だとぼんやり思うが、如何せん、頭の中に真っ白い靄が揺らめいている。もそもと起き上がり正座する。

蝶夏のうなり声が聞こえたのだらう、立っている男、信長が振り向いた。

「起きたか」

「……………」

沈黙する蝶夏を怪訝そうに眺めた後、近寄って来て顔を覗き込む。

「どうした。寝ぼけているのか？」

ことん、と少女の頭が横に傾く。

「……おはようございます」

妙なイントネーションで朝の挨拶をすると、なんとそのまま土下座した。土下座というより、上半身を折り曲げて、床にぴったりと額が着く。両手はどということもなく投げ出されている。

「……………」

「……………」

目の前でその奇妙な行動を見た信長と、彼と話していた為に廊下でそれを見る羽目になった茅乃は沈黙した。

その間に、蝶夏の脳に血が巡りだした。

「うつうつうつ。今日は腰が変」

何故か折り曲げられている自分の体に疑問を抱きながら体を起こ

すと、意外な至近距離に信長がいる。

「えっうわっ、何?!」

目の前の男は軽く首を捻る。^{ひね}

「覚えていないのか?」

これまでの人生で何度も似たようなことを聞かれている蝶夏は、すぐに自分の奇行がここでも現れたことを知った。

「えと。何したの? あたし」

ちらりと、信長の視線が茅乃に向く。そこで初めて廊下にいる彼女に蝶夏は気付いた。茅乃は、さつとあらぬ方向を向いた。

不安に思い、信長を見つめていると、「普通の挨拶をした」と言う。

「ふ、普通のとて……、どのくらい普通の?」

「敬語を使った普通の挨拶だ。なぜ朝の挨拶には敬語を使う?」

今度は蝶夏が目を逸らす。

「知らない。寝ぼけてるんだもん。記憶無いし」

ほう、だか、ふうん、だかわからない返事が返ってきた。

居た堪れない。

そうするうちに信長が立ち上がる。

「朝飯にするぞ。茅乃が着替えを用意している。付いて行け」

廊下を顎で指された蝶夏は立ち上がる。

今度はちゃんとこちらを向いている茅乃はにつこりと蝶夏に微笑んだ。蝶夏よりも背が低く、少し丸めのその顔は可愛い系、小動物系に属するが、静かな佇まいが大人の女といった雰囲気醸し出している。

「よろしくおねがいします」

ぺこりと頭を下げると背後で障子が力任せに閉められた。

「まあ。信長様つたら」

口元に手を添えて茅乃が目を開く。それからふふっと笑う。

「拗ねてしまつて」

「あれ、拗ねてんの?」

指さして聞く蝶夏に「ええ」と茅乃が頷く。

「まあ、拗ねてしまったものは仕方ありません。放っておきましょう」

割とドライに大人の女は割り切った。

そして、蝶夏に向き合うと軽く頭を下げる。

「このようなところでご挨拶して申し訳ありません。私は信長様の乳兄弟で茅乃ちのと申します。これより蝶夏様の身の回りのお世話をさせて頂きます。どうぞ宜しくお願い致します」

蝶夏にしてみれば、教科書のお手本か？と思うほど丁寧な挨拶をされる。

「あ。こちらこそよろしくおねがいます。あ。名前は呼び捨てで全然いいよ、……ですよ」

なれない敬語に突っかかりながら蝶夏は言う。

様付けが違和感一杯で断りを入れるが、茅乃はやりわりと首を振る。

「いけません。私は信長様より蝶夏様のお世話を仰せつかっております。お仕える方を呼び捨てるなどともありません」

「でも、そんな風に呼ばれるの慣れてないし……」

「是非とも慣れてください。さあ、お着替えしましょう」

蝶夏の腕を取り、数室離れた部屋へとつれていった。

蝶夏が茅乃に着せられたのは華やかな大柄の花を描いた着物だった。

茅乃もそうやって着ているのだが、蝶夏の知っている着物の着方とは少し違う。腰のあたりをベルトほどの細い帯で締めるのだ。

親戚の結婚式で振り袖を着たときは苦しくて苦しくて窒息死するかと思ったが、この着方は其れほど苦しくない。問題があるとすれば、帯の上でたるみを作るために少し太って見えることが……。

着物を着せてくれている間、茅乃は何度となく溜息をついた。

曰く、「お腰がとても細うございますね」だ。

動き回る茅乃の腰をちらちら見ていた蝶夏は予想をつけた。茅乃の腰はどうやら胸の下辺りから腰までほぼストレートラインを描いている。

食生活と生活習慣の違いの賜物だ。

それにしても、茅乃のこの腰に関する溜息がどうも良い意味のものに聞こえない。この謎についてはもう少し先の夜に信長から明かされることになるとは当然今の蝶夏も茅乃も考えてはいなかった。

七、空腹の先にはあるものってそんなもの

着替えを終え、再び蝶夏の手を取った茅乃に連れられて別の部屋へ向かうと、やはり着替えを終えた信長が胡座をかいて座っていた。着ているのは小袖こでに袴はかまを履いた簡素な衣装だ。

彼の前に一つと、その奥にも高足の膳が用意されている。上に乗った皿や椀からはほこほこと湯気が出ている。

蝶夏を見上げた信長は軽く眉をあげ、「座れ」と自分の正面を示す。

柔らかな食事の香りに惹かれるように蝶夏は示された席に着いた。口に滲む唾液をごくりと飲み込む。はつきりと空腹を意識した。

「打掛うちかけはどうした」

食事に目が釘付けの蝶夏を置いて、信長は茅乃に声を掛ける。米櫃こめびつを開けて茶碗を手にとっていた彼女は顔を上げて微笑む。

「どうも所作に慣れていらっしやらないようなので、食事の後に着て頂こうと思っております」

「ならいい」

軽く頷いて話を終わらせる。

それからじつと黙っている蝶夏の方を向く。

「どうした。やたらに大人しいな」

家訓を守り、思い出した途端襲ってきた強烈な空腹を必死で我慢していたのだ。正座した膝の上に拳を作って置いてある腕が小刻みに震える。

「……………たのよ」

小さな声が漏れる。

「なんだと？」

聞き取れなかった信長が聞いてくる。

ぐうつうつうつうつ

部屋に響いた音に被さるように蝶夏は叫んだ。

「お腹が空いたって言うてるのよ!」

赤くなった頬で、低い視点から信長を睨み付けると、信長は仰け反って笑いだした。

腹を抱えながら手の甲をこちらに見せてひらひらと振る。

「いいぞ、食べる」

それを聞いて、蝶夏の目が輝く。

「ほんと？ 食べていいのね？」

「構わん」

蝶夏が箸を取ると、先に信長の膳に茶碗を置いていた茅乃が、今度は蝶夏の膳に茶碗を乗せてくれる。茶碗には所々茶色い粒の混じったご飯が装われている。昨今の健康ブームで蝶夏も知っている玄米の混じったご飯だ。少し香ばしく、食欲をそそる香りがする。

「いただきます!」

手を合わせて、まず汁物の入った椀を手にとる。まだ熱い中身は味噌汁だ。半透明の薄切りの具はよくわからない。椀を傾けて啜ると、少し薄めの味の汁が喉を流れていく。胃に入る温かな感覚がする。空きつ腹に沁みていく。具は、冬瓜に似た食感だ。

「んんんんん……………、おいし」

思わず身震いをしていた。

その時、蝶夏は幸せそうに微笑んでいた。

それを見て茅乃は柔らかに微笑した。

信長は、初めて見た少女の笑顔に目を細めた。

「わわ。これ、茄子？ 茄子？」

小鉢には煮びたしのような物が盛られている。口に入れると、ほろりと崩れる身は確かに茄子だ。

隣の皿には白い魚の焼き物がある。淡泊な味の身に塩が振ってあって、脂との相性がよかった。

次、次、と平らげていく蝶夏の膳に腕が伸びてくる。

「好むのならやろう」

茄子の入った小鉢が乗せられる。

礼を言おうと信長を見上げると、彼は何杯目かしれない玄米ご飯を茅乃について貰っているところだ。なぜか蝶夏は気付いた。

「むむ。これ、嫌いでしょ」

真っ直ぐ見つめてやると、相手も視線を逸らさない。

「やる」

「だーめー！ 嫌いなものは克服する為にちゃんと食べるもんでしょ！」

そう言つて、小鉢を信長の膳に戻す。

「それに、出されたものは全部食べるのが基本よ」

箸で指すと（行儀悪い）、信長はちつと舌打ちした後、きちんと手にとって食べ始めた。

おや、意外と素直。

驚いて目を見開いている蝶夏と、無然とした顔で茄子を食べる信長とを見比べながら茅乃は笑いを堪えていた。

薄味メインだが、中々美味しい食事を満喫すると、蝶夏はもう一つの欲求を思い出した。

茶を啜る信長を尻目に茅乃の耳に顔を近づけると、囁いた。

「あの、おトイレって……どこかな？」

茅乃はきょとんとした顔で首を傾げる。

あ。わかんないんだ。

顔を顰めた蝶夏は、考えた。『トイレ』以外に言い様があっただろうか。

「……………あ。お便所？」

思いついたままに口にすれば、茅乃は少しびくりした顔をする。それから、「御不浄ですね」と言い直してくれる。

そんな言い方もした気がする、と思つた蝶夏はこくこくと首を縦

に振る。

「こちらへ」

茅乃が促すままについて行く。

視界の端で、信長がまた笑っていた。

蝶夏が茅乃と立ち去って少ししてから、信長は呼びつけていた者を部屋に通した。

昨日、蝶夏の見張りを命じられていた方輔ほうすけという小姓だ。

彼は、一夜明けた後の城主からの呼び出しにすっかり身を小さくしていた。

額ぬかづく少年は十三歳ほどだったかと信長は思い起こす。蝶夏の年は知らないが、まあそのくらいだろう、とも考える。

「お前にはこれより別の仕事をしてもらう」

もはや小姓を解任かと肩を大きく震わせる方輔に構わず、信長は続ける。

「あれの、蝶夏のお守りもだ」

驚いて顔を上げた方輔は主の顔を見て我に返り、再び床に着くほど頭を下げる。

「ふん。思ったことを言えばいいだろう」

あまり聞かない信長のぞんざいな物言いに疑問を抱きつつも、言われた通りに思いを口にする。しない方が恐ろしいと言つのもあった。

「恐れながら、昨日失敗をした私に、何故その様なお役目を下さるのでしょうか」

蝶夏の立場が分からない方輔としては、精一杯考えた台詞だった。一緒に食事をとった事から、決して下に置くような扱いを考えている訳ではないようだ、二人の雰囲気はどう考えても男女のそれではない。側室にするならばそれなりの敬意を払う必要があるが、それも信長本人が公言している訳ではないから所詮は邪推じゃすいの類たぐいになっ

てしまう。

少し曖昧な方輔の言い方を混ぜっ返すように信長は言った。

「失敗を挽回するには、『その様なお役目』こそが相応しかろう」
口元にはにやりとした笑いが浮かんでいた。

その時、微かに悲鳴が聞こえた。

信長は即座に立ち上がると廊下に出て行く。左手には傍らから離す事のない刀が握られている。

慌てて方輔が腰を上げた時には既にどこかかと乱暴な足音が廊下に響いていた。

八、変態に縁があるなんて真っ平御免被りたい

声の元へと迷い無く進む信長の背中を方輔は必死で追った。足が長い為なのか走っている訳でもないのに中々追いつけない。

女性の喚き声わめが聞こえる。

聞き覚えがあるな、と方輔が思っていると、突然目の前の背中が歩みを止めた。

方輔はぶつかる前に何とか立ち止まるが、広い背中は何故か脇にどける。

と、何かを振りかぶった姿勢の蝶夏が視線の先に居た。袖を揺らして投げられたものが真っ直ぐ方輔の顔に直撃した。

「うぐ」

痛くはない。軽いもののようにだ。

ぼろりと顔から落ちていくものを見れば、便所に常備してある紙の束だ。ばらばらと足元に広がっている。回りを見渡せば同じような紙の束が二箇所ほどに広がっている。

明らかに紙束の発射地点とわかる位置に蝶夏が仁王立ちしている。彼女が立っているのは、廊下を降りた先にある厠の前だ。少し離れたところでは茅乃が困惑した顔で「ちょ、蝶夏様」と呼び掛けている。

蝶夏の顔は、赤い。肩で息をして、興奮しているのが良く分かった。そして、茅乃の事は全く認識していない。

「この変態！」

聞き覚えのある罵りがその口から発せられる。

昨日、彼女が信長に叫んでいた台詞だ。せりふ

しかし今日はその対象が違った。蝶夏と方輔を直線距離で結んだ真ん中の辺りに老人がしゃがみこんでいた。

どうやら、彼に向かって投げられた紙の束がしゃがんで避けた老人と横にずれて避けた信長を通り過ぎて方輔に当たったらしい。

「乙女がトイレに入っているところとお風呂入っているところと着替えているところを覗くなんて最低の最低なんだからね！ 変態どころかど変態なんだから！」

少し裾の乱れた着物のまま地団駄を踏む。

「あいつは、あたしにとつて危険人物第一号だけど、」

そう言つて信長を指差す。その場に居た全員（茅乃と方輔と老人）が信長を見上げる。

「あんたは危険人物第二号認定よ！」

今度は老人を指差す。そうして全員（茅乃と方輔と信長）が老人を見る。

白髪と白い髭で目と鼻以外が覆われた老人は、長い袖で持ち上げた杖を左右に振った後、「儂か？」と自分を指す。

蝶夏は「そうよ！」と肯定した後、老人を指差したまま深呼吸をする。

「いーい？！ おじいちゃんだから、この辺で止めとくけど、今度やったら承知しないんだからね！」

老人は蝶夏の言葉に目をぱちくりと瞬いた。意外と円らな瞳だ。

「ほうほう。なんとも、……良い響きじゃのう。『おじいちゃん』」
今度は目を細めてうつとりとした声を出す。

蝶夏はそれを気持ち悪いものを見たと言いたげな目で見る。

しばしそうしていた老人はにこにこと笑いながら蝶夏に向けて言う。

「よかる。よかる。儂はそなたが気に入った。気にいったぞ。名を教えると良いぞ」

茅乃がぎよつとした顔をする。段々と老人の正体が掴めて来た方輔も驚いた。

しかし、蝶夏はというと、「何言つてんのこの爺」と声に出さずに口だけで呟いた。それから、ぐいと、顔を上げる。

「人に名前を聞くときは自分から名乗るものでしょ！ 信長だつてそうしたわよ」

引き合いに出された信長は老人の視線を受けて、ひよいと肩を竦める。

「ほう。ほう。吉法師きちほうしがそうしたのか。ほう。ほう」

目がしょぼついた時の様に瞬きを繰り返す。

「よかる。よかる。わが名は『千那木せんなき』じゃ」

老人がそう名乗った瞬間、蝶夏の額の辺りで熱い風が吹いた。彼女の前髪を揺らして、渦を巻く様にすると消えた。

違和感に額を擦ると、老人が微笑みながら蝶夏を見ている。まさしく、溺愛する孫を見る祖父の視線だ。

妙な現象に戸惑いながらも、家訓に忠実に蝶夏は名乗った。

「あたしは、蝶夏よ。橘蝶夏」

「蝶夏。いと可愛き名じゃのう」

うむうむと千那木と名乗った老人は頷く。それから楽しそうに蝶夏に言う。

「暇な時や困った時は儂の名を呼びなされ。疾くと疾く来てやろう」
疾く疾くな。そう言って、千那木の姿が掻き消えた。

「あれ？」

目の前の人物が消失し、蝶夏は首を捻る。

老人の居た辺りで手を振る。すかすかと空を切る手応えに周囲を見渡すが、やはり誰もいない。

「蝶夏、様？ あ、つまり、どういうことでしょうか？」

きよろきよろとする蝶夏に、同じくらい困惑している茅乃が声を掛ける。

「トイレをあのおじいちゃんに覗のぞかれたの！用足して、振り向いたら居たの！でも、消えちゃった。なんでえ？イリュージョン？マジック？」

興奮した先の混乱に、蝶夏の眦まなじりには涙がちらりと滲んでいる。

「そ、そうだ。あれって、あれって、どっからどこまで見られちゃったんだろう？！」

しがみつかれた茅乃は、「そんな。仮にも神様ですものたぶん、

そんなには見てないと思いますよ」と宥めにかかる。

その騒動の脇で、信長は、左手の刀に右手を添えていた。ある一点を見据えて言う。

「一度死ぬか……？」

そう呟いたのをすっかり聞いてしまった方輔はその場に居たことを思い切り後悔していた。信長が見つめる辺りの空気が激しく揺らいだのも、気のせいではないだろう。

九、老人の正体より刺激が強すぎる

どうにか平静を取り戻した蝶夏は、食事を取った部屋に戻った。膳は既に片付けられている。

茅乃が淹れてくれたお茶を一口啜り、同じ様にしている信長に聞いた。

「あれは、誰？ きちほうし 吉法師って信長のことだね。知り合い？」

「知り合いと言つか、この城に住まう神だな」

「……かみ？」

信長の言った『かみ』と蝶夏の言った『かみ』ではイントネーションが違った。

「便所神だ」

「さつき、あたしが投げたやつ？」

蝶夏の勘違いは長くは続かない。

「いや、神仏のほうだ。便所の守り神だな」
かわや

廁を守護する神といった方が聞こえが良いだろう。この神は女神であつたり男神であつたりと諸説あるが、あの千那木は土地神に近いだろうと信長は言う。

「俺が物心ついた頃にはこの城にもう居た。恐らくそれ以前から居たのだろう。怒らせなければ気の良い方だ」

怒っている姿がさっぱり想像できないが、そうか、神様だから七福神みたいな姿だったのか。妙なところで蝶夏は納得した。

「はあ。かみさま。初めて見たよ。っていうか、初めて会った話した」

「初めて、ねえ。それにしても随分なやり方で名を貰ったな」
くつくつく、と信長が笑う。

よく笑う奴、と蝶夏は苦々しく思う。

「名を貰うって？」

「神に名を名乗らせるとは、本来支配権、使役権を得る為にする行

為だ」

「つまり、あたしは、あのおじいちゃんを支配できるってこと？」

「お前の場合は少し違っただろうな。その後で自分も名乗ったろう。」

本来は必要な手順を踏んで己の名を『与える』ものだ。その手順を飛ばして名乗ったお前の場合は、恐らく対等な関係になるだろうな」

「いいじゃん。それが普通でしょ」

そう言った蝶夏を、その場にいた三人は三様の反応で見つめた。

「お前は、それでいいのだな」

確認するように信長は言う。

首を傾げつつも蝶夏はこくこくと頷いた。

「お前は、優越に浸ろうとは思わんのか」

口元を緩めながら信長は茶を啜る。

「何よ。そのくらいあるわよ。多分、あんたを出し抜けたときとかにね」

「ほう」

茶碗を置いた信長の笑みが少し変わる。

蝶夏は嫌な空気にひくつと頬が引きつった。

「俺を出し抜くと？」

ひとまた

一跨ぎで蝶夏の目の前に来ると、彼女の顎を指で摘みあげた。

切れ長の瞳が蝶夏を射抜く。

「それもいいだろう。だが、今日は止めろ」

「な、なんでよ」

手の中の茶碗から少し飛び出た茶が手の甲にかかる。

「俺は今日忙しい。お前の相手をしている暇が無いくらいにはな」

口を開く蝶夏を制する様に信長は先を続ける。

「世話は茅乃に任せている。何かあればそちらに言え。それから、こいつをお前の小姓として置く」

そう言って蝶夏の顎から手を放すと、廊下側に座らせていた方輔を示す。

先ほどから見た顔だと思っていた蝶夏は気付いた。

「あ。昨日の……」

名前は、そうだ、「……方輔ほうすけだっけ」聞いてみれば、床に拳を着けて一礼する。

「長尾方輔ながおと申します。本日より蝶夏様に誠心誠意仕えさせて頂きます」

返事をする前に頭を下げられて、一瞬間いかけが無視されたのかと蝶夏は思ったが、信長が何も言わないところを見るとそういう作法のようだ。所謂土下座などドラマでしか見たことのないから変な気分だ。

名乗られたのだから名乗り返そうと思うが、既に向こうは自分を知っている。どうしたものと悩んでいると目の前の男が少し声を低くして言った。

「再び逃げれば、目付けを兼ねているこやつますの立場は拙い事になるうな」

蝶夏は目を剥く。

「なに、それ。脅し!？」

「そう聞こえるならそう取れば良い」

「そんな事、しなくなつていいでしょ!？ あたしは、家に帰るだけよ!」

「どこに帰る」

「どこって……」

冷静な問いに、どこと答えたものかと蝶夏は言いよどむ。

間隙を突くように鋭い信長の言葉が続く。

「どこに、というより、どうやって、だな」

それはまるで、「どうやって時を越える気だ?」と聞いているよな、確信を持った言葉だった。

驚きに声を出せないでいる蝶夏の頬をさらりと撫ぜると、信長は立ち上がった。

我に返った蝶夏は聞いていた。

「ど、どこ行くの?」

「仕事だ」

信長の返事は簡潔だった。

何故か焦りを感じた蝶夏は立ち上がる。

「あ、あたしは……………」

言葉が続かない。

すると、方輔の開けた障子の横を抜けようとしていた信長は振り返って呼んだ。

「蝶夏」

大分慣れてきたと言うのに、その声は話している時の数倍艶やかだった。

ぞくり、と蝶夏の背中が震える。

「いいな。大人しくしているよ」

へたり込みそうな足を叱咤して、蝶夏は負け惜しみのように言う。

「今日、一日だけだからねっ」

「上等だ」

艶治な笑みを残して信長は廊下の先に消えた。

十、敗北の後やっぱり敗北

くたりと、蝶夏は頹^{くた}れる。

それから、手の平でべしべしと畳を叩きだす。

「くーやーしーいー！ 何あれ、何あれ！ 反則でしょ。あの色気は反則だあー！」

突っ伏して悔しがる蝶夏に方輔は同情した。信長の放ったものの威力は凄まじかった。ターゲットが完全に蝶夏だった為、方輔は当てられる程度で済んだが、自分に直接向けられた場合（その可能性は無きに等しいと考えたい）、蝶夏のように立っていられる自信は無かった。一体、何だあれは。

蝶夏の背後で直撃を食らったはずの茅乃は素知らぬ顔で考えていた。蝶夏に対する信長の態度についてだ。彼女が関わると彼は本当に良く反応を返す。主に、良く笑う。そして、あまり使うことを好まない先祖返りと言われる力を良く使う。今回は強烈な色気がそれに当たるだろう。

それを持って彼女はこう判断した。「これは本気だ」と。

力強く頷くと、いざ、蝶夏の世話をせんと立ち上がる。

ちなみに、彼女は幼い時から信長の乳母であった母について彼の世話をしてきた。その為か、今蝶夏を困らせている信長の色気に屈することは滅多にない。免疫がついている状態だ。四六時中一緒に遊んでいた弟の勝三郎などは全く意識したことが無いという次第だ。「蝶夏様、元氣をお出しになって。打掛を用意しております。そちらをお召しになってください」

茅乃の優しい物言いに蝶夏は顔を上げる。

「打掛？ でも、もう着物着てるけど……」

「それは略装に当たります。打掛を羽織^はって頂くのが正式な御衣装となります」

「でも、あたしこれで十分だよ？ これ以上着たら動きにくいし、

暑そう……」

「腰に巻くのでそんなに暑くは感じません。それに、とても美しい意匠のものを用意させて頂きました。是非ご覧になつてください」

美しい着物……。蝶夏だつて女の子だ。綺麗なものは大好きだし、見ているだけで無く、触れるのはとても嬉しい。まして着る事が出来るなんて！

で、連れて行かれたのは朝着替えた部屋だつた。何も言わずに付いてきた方輔は部屋の前の廊下に座り込み、茅乃は障子を閉めてしまった。

衣文えもん掛けに掛かつているのは、鮮やかな朱色の地の着物に鮮やかな刺繍が施された一品だ。流れる川の兩岸に百合が咲き乱れ、白い首の長い鳥が優雅に佇んでいる。成人式などに着る振袖のように金糸銀糸がこれでもかと使われている訳ではない。むしろかなり控えめだ。なのに、色のコントラストの関係なのか、それは華やかに仕上がっている。

思わず蝶夏は息を呑んだ。

「すごく、綺麗」

茅乃が嬉しそうにはしゃいだ声を上げる。

「喜んで頂けて嬉しいです。ささ。早速羽織つてみてください」

着物を衣文掛けから外すと、佇む蝶夏の背後に回り、着易いように広げてくれる。

蝶夏が袖を通すと肩のラインを整えてくれる。

「よくお似合いです」

手の平を合わせて口元に置き、茅乃は微笑む。

「でも、暑い………」

やはりそこは夏のこと。既に蝶夏の首にはじわりと汗が出てきていた。

「では、お袖を抜いて、腰に回しましょう」

すいすいと蝶夏の袖から打掛を抜くと、くるりと腰を覆うようにして細帯でまとめてしまった。

「ああ。これなら暑くない、かも」

と、蝶夏はその場で一回転しようと足を踏み出す。

突っかかる。足元が重い。

「動きにくいよ」

茅乃に訴えると、困った顔をする。

「そんなに、大股で動き回らないほうがよろしいかと思います。こう、静かに動かれれば大丈夫ですよ」

楚々とした仕草で茅乃が畳の上を滑るように歩く。お手本は素晴らしい。が、蝶夏は三秒で諦めた。

「無理。苛々しちゃう！」

暫し悩んだ後、茅乃は妥協案を持ち出した。

「わかりました。本日はお召しにならなくて結構です。この後のことは信長様と話し合ってください」

その方が蝶夏を丸め込める確率が高い。

「ですが、信長様は恐らく着られるようにおっしゃると思います」
もちろん釘を刺すのも忘れない。

「ぐうっ」

蝶夏の口から呻き声が飛び出した。

その日は、蝶夏にとって、とてもゆっくりと時間の流れる日だった。

茅乃は暇を明かす蝶夏に紐で閉じた本を持ってきてくれた。御伽草子という婦女子向けで読み易い物語と言われて、わくわくしながら開くと、……読めなかった。

くねくねと波打つような字がひたすら続いている。挿絵は無しだ。えっと。何語？ ハングル？

ハングルがなんだったかとも思い出せなかったが、とりあえず聞いてみた。

茅乃は大変申し訳なさそうな表情を浮かべて「かな文字です」と

言った。

ひらがな、らしい。

ひらがなも読めない、と落ち込む蝶夏に茅乃はもう一冊差し出した。

中を開くとまっさらだ。何も書いていない。

「文字の練習に日記を書かれたりしてはいかがでしょうか？お手本は後ほどお持ちします。私や方輔殿が教えても良いのでしたら、そう致しますよ」

蝶夏には是非も無い。

「今すぐとっても教えて欲しい！」

考える前にすぐ行動派の少女には、一室に閉じこもる生活はあまりにも暇過ぎた……。

十一、白と黒にはまる

茅乃に教えてもらった文字の練習をしている内に、気付けば昼も過ぎていた。

こうなると昼食の時間が気になってくる。

しかし、茅乃に聞くのも催促しているようで言い難い。とりあえず、危険人物一号を引き合いに出してみる。

「茅乃、信長は昼に戻ってきたりしないの？」

蝶夏が書く文字を時折覗き込みながら、茅乃は着物の裾を降ろしていた。茅乃よりも上背のある蝶夏には少し短いらしい。羽織って見たが、何が悪いのか蝶夏には良く分からなかった。

「ええ。たぶん、夕食にも戻られないと思いますよ」

本当に忙しいらしい。

「昼食も夕食も仕事場で食べるの？」

その言葉に茅乃は瞬く。

「まあ。蝶夏様のお国では昼食もとられるのですか？」

聞けば、食事は朝夕の二回らしい。「すぐに用意させます」という茅乃を「iiiiiiiiiiii！ いらないよ！ 申し訳ないもん！」と蝶夏は必死で止めた。本気で満漢全席でも用意しそうな剣幕だったからだ。

そうして空腹の昼が過ぎていく。

すぐ傍に座っている茅乃に腹の虫が鳴く声が聞こえなくて本当に、本当に良かった。

午後は茅乃に用事があるそうで、先生は方輔にバトンタッチされた。

しかし方輔は傍らに置いてあった玩具の山を指した。

「あちらはいかがです？」

茅乃は一体蝶夏が何歳だと思っているのか、カルタだの双六っぽいものだのを積んで行ったのだ。

蝶夏が子ども扱いかと少しむくれている間に、方輔は玩具の山を崩して、一番下にあった木の台を引っ張り出していた。上に蓋付きの木のボウルのようなものを二つ乗せている。

「あ。碁盤！」

大分前に流行った漫画の影響で蝶夏もこれは知っていた。

「やったことがありませんか？」

方輔が台を準備しながら聞く。

「うん。PCゲームで少しね」

「びいしい？」

「ああ。気にしないで。こつちの話」

ふるふる首を振りながら誤魔化す蝶夏をひと時眺めた方輔は、すぐに視線を戻した。

「では、やり方はわかりですか？」

「うーん。あんまり自信ないなあ」

「では、最初は詰め碁を少しずつ進めて行きましょうか」

そう言つと、黒い石と白い石を碁盤の隅に並べ始める。

出来上がったのは、黒の石で白の石を囲むような状況だ。

「要するに、囲碁は自分の陣地を作っていく模擬戦です。この、白の陣地を黒に奪われないように固めていくことになります」

そう言つて白の石を置く。次に黒い石をそれを抑えるような位置に置く。

「もちろん敵はそうはさせまいと追いつがるし、繋がりを分断しようとして攻めてきます」

「それも防がなきゃいけない訳だ」

「その通りです」

白の石が乗せられる。黒い石は置き場がない。

「これで、白の陣地の完成です。これ以上黒は攻め手が無い」

蝶夏はすっかり感心して腕組みをした。

「そつか。でも、守り過ぎちゃったら自分の陣地が狭くって困っちゃうんだ」

うわー。難しい。

「そうです。最小の最高の手で己の陣地を守り、広げなくてはいけません」

その後いくつか方輔は詰め碁を並べてくれた。

十数手も見たとこで、方輔が出したものを蝶夏が説くようになった。

茅乃が持ってきた本の中には囲碁の本も混ざっていて、これは説明書きこそ読めないが、碁盤の目と碁石の配置がイラストで載っている。蝶夏は時間を忘れてのめり込んでいた。

十二、食事とお風呂と茅乃

まだ日も高い頃、夕食が用意された。

蝶夏の感覚と日の傾き具合から言ってまだ三時くらいだ。

夕食は玄米ご飯に汁物と煮魚に野菜のお浸しがついてきた。これまた薄味で食材の風味豊かな食事だった。

のんびりと時間を掛けて食べ終わると、「落ち着きましたらお風呂に入られませんか？」と茅乃が言う。昨日はいつていないことに気づいた蝶夏は一も二もなくその提案に飛びついた。

茅乃に付き添われて湯殿に行くと、裾と袖を捲り上げた格好の女性たちが数人いた。風呂の準備をしていてくれたらしい。

茅乃と蝶夏に気付いた彼女たちは端に寄り平伏する。

「さあ、蝶夏様、お風呂ですよ」

にこにこ笑う茅乃に蝶夏は聞いた。

「ねえ、あの人たちって、お風呂の準備してくれたんだよね？」

「ええ。風呂番の者たちです。何かありましたか？」

「え。ううん。お礼いっところと思って」

そう言って蝶夏は彼女たちの前に膝をついた。

「準備してくれてありがとう。えーと、使わせてもらう、います」

丁寧な言っておこうと思うが、やっぱり敬語の語尾でつかかった。がつくりだ。

それに対する風呂番の女たちの反応は驚きの一言に尽きた。目がしこたま大きくなって、固まってしまったのだ。

うおう。あたし、なんか、まずった!?

焦る蝶夏に、茅乃は「お礼は済みましたね。さつ、参りましょう」とてきぱき対処する。

お風呂は、気持ちよかったんだか何なんだか……。

同じ女性とは言え茅乃に素っ裸をみられるのはずかしー。なんて蝶夏が思っていたら、脱がされたのは白い襦袢という下着までだった。なんと着衣のまま入るというのだ。

「濡れるじゃん」

蝶夏の高速突っ込みに茅乃は動じもせず「まあまあ、こう言うものです」の一点張りで入浴が済まされた。

あれ、段々茅乃の説明が省かれていくぞ？適当に済まされていくぞ？

蝶夏は首を捻るが、そこは熟練侍女の茅乃に軍配が上がり、気付けば濡れ髪ぬれかみの蝶夏が脱衣所に座っていた。

あれー……？

座らされた蝶夏の後ろで、茅乃はほとんど叩くように髪を乾かしていく。

「蝶夏様の御髪はとても艶やかでお綺麗ですね。波打つ様子が可愛らしい」

二ヶ月に一回は美容室に行ってトリートメントしてるもんっ

蝶夏は心の中で腰に手を当ててふんぞり返る。

もうちよつとしたらバイトも始めて、そしたらヘッドスパだって出来るようになるかもしれない……。

そこまで考えて、蝶夏は続きを考えるのを止めた。

止めないと……。

ぶんぶんと首を振って、内にこも籠り始めた思考を分散させる。

「まあ。どうしました。痛かったですか」

茅乃が驚いて声をあげる。

我に返った蝶夏は、振り返って謝った。

「あ。ご、ごめん。ちよつと、えと、おでこにかかった髪が痒くて」

拙い嘘つたなで誤魔化す。

「あら。今避けて差し上げますから、じつとしてください」

茅乃の暖かくてふつくらした指が蝶夏の額を優しく撫でて、髪を

払い除けてくれた。

十三、氣遣いの有り方とは

随分ゆつくり風呂場にいたようで、外はすっかり夕暮れの空だ。木と白壁で出来た建物の合間を赤い輝きが抜けている。反対の空からは鈍色の闇^{にひいろ}が追いかけてくるようだった。

湯冷めしてはいけないと茅乃に寝巻きの上から一枚小袖を着せられた蝶夏が連れて行かれたのは、今朝目覚めたのと同じ部屋だった。要するに、信長の部屋だ。

「しかも、また布団一枚だし……」

蝶夏は頭を抱えた。

その脇でちやくちやくと寝支度を整えていく茅乃に蝶夏は訴えた。「ねえ。お願いだから別の部屋用意して！ あんな危険人物とじゃ安眠できないよ！」

それを聞いた茅乃は作業を中断。

頬に手を添えて暫し考え込んでいたが、やがて小さく息を吐き出すと、蝶夏に座るように促した。自身はその前に正座する。

「蝶夏様。これは恐らく信長様なりの氣遣いなのです」

「キツカイ……」

思わぬ言葉を聞いた蝶夏は思わず片言になる。

そつと頷くと、茅乃は続ける。

「昨年、信長様のお父上、信秀様が亡くなられ、信長様は弾正忠織田家の家督^{かどく}を継がれました。けれど、若輩である信長様を侮^{たが}られる方は多く……。四月に一度戦がございました。つい先日、清洲城、この那古野城より西に離れたところにあります。その清洲の城から兵が出て、戦になりました。皆、戦続きで気が立っているのです」

「いくさ……」

蝶夏の様子を見るように、茅乃は一度言葉を止める。

聞き慣れない言葉に戸惑いを感じるが、争い事があれば人の気が立つ、というのは何となくわかった蝶夏は、頷いて見せた。

「もちろん、信長様に従う者たちが蝶夏様に危害を加えるようなことはありません。ですが、皆が皆事情に通じている訳ではありませんし。万が一の事があつては大変です。信長様はそれを警戒なさっている、私は思います」

「うーんと、つまり、……………信長の傍が一番安全、ってことお？」
嫌そうに、というより不可解が過ぎて、蝶夏は口をへの字に曲げる。危険人物一号の傍が一番安全とは、全く分からない理屈だ。

微笑んだ茅乃は首肯する。

「その通りです。それに、同室で休まれているとなれば、信長様のお手がついたと思われます。それは尚のこと宜しいでしょう」

「お手がつく……………??」

明らかに意味のわかっていない蝶夏に、茅乃はご機嫌な笑みを深める。

蝶夏は考えた。

考えて、わかったのは、茅乃が嘘をつきつこないってことだ。

この一日で蝶夏はすっかり茅乃が好きになっていた。ほんわか癒し系なのに、実はドライでクールなところがある。しかも、なんとも言えず大人の女だ。そんなところがとても好ましかった。姉がいるならこういう人がいい。

「……………わかった。ここで、寝る」

かなりの葛藤の後、蝶夏はそう答えた。

茅乃は、おつとりと微笑んだ。

そうして立ち上がり部屋を出て行くとする。

「あつ待つて」

その背中に蝶夏は声を掛ける。

「どうかなさいましたか？」

「上に掛けるものをもう一つ持ってきて欲しいの。あいつ、多分何も掛けないで寝てるから」

「すぐにお持ちします」

十四、こころが零れ落ちる夜

上掛けを持って来てくれた後、茅乃は「おやすみなさいませ」と去っていった。

一人になった蝶夏は日記を書こうと思い、部屋の端にある小さな机に向かう。

今日、茅乃にもらったノートっぽいものを広げる。こわこわとした紙の感触はなんとも新鮮だ。

やはり茅乃が用意してくれた明かりは炎独特の揺らいだ輝きを放っている。

その下でしばらく筆と格闘していた蝶夏は、そのうちに投げ出した。もちろんこの筆は信長の自室にあるのだから、彼のだらう。構うものか。

ごろん、と畳に仰向けに転がる。
逆様の屏風が目に入る。真っ白い地に薄墨で山水画が描かれている。太い筆で豪快に。

ああ、お父さんが見たら喜びそうだな、と蝶夏は思った。

蝶夏の父は高校の美術教師をやっている。熊のように顔中に髭を生やしていて、蝶夏は絶対に生徒からは「熊」と呼ばれているに違いないと常日頃考えていた。

本人は陶芸を趣味としていて、時折個展も開いている。いつもは人の窯を借りて作品を焼いていたが、最近最新式の電気窯を買った。蝶夏と一緒に茶碗を焼く約束をしていた。

母親は、しっかり者のキャリアウーマンだ。蝶夏の学費ローンを組んだのも、父の電気窯資金を貯金していたのも母だ。風来坊気質の父の手綱をしっかりと握っている。厳しいことも言うが、真っ直ぐで誠意のある人だ。

二人を思い出して、胸にぽっかりと穴が空いたような心地だった。

いや、既に空いていた穴を夜の闇が暴き出したのだ。

ぼろりと、蝶夏の目の端から暖かいものが零れ落ちた。

驚いて彼女は飛び起きる。

でも、涙は止まらない。頬を伝い、顎から畳に落ちて小さな染みを作る。

手の甲で頬を拭う。次から次と流れ落ちるものの歯止めにもなりはしない。

だめだ。ここじゃだめだ。ここで泣いちゃ、だめだ。

膝立ちになつてすぐ傍の障子に手を掛ける。

しかしここで茅乃の言葉がよみがえる。

手が止まった。

小刻みに震えが走る。

ここにいればいずれ信長が戻ってくる。そうすれば泣き顔を見られてしまう。そんなのは真つ平だ。だが、この部屋から出て行くのは無謀だと、もう、思ってしまったている。

二つ並んで置かれている上掛けの一枚を広げて、それを被って布団の上につつ伏せた。耳を塞いで、必死で涙を止めようと力を込める。

喉の奥に詰まった嗚咽が、熱く、余計に零れ落ちる涙の量を増やしていた。

その時、背中に大きな手が置かれた。

ひんやりとした感触に蝶夏はびくりと全身を揺らした。

「どうした」

信長の声をする。

口を開けば、ダムの決壊のようになってしまいそうで、蝶夏は黙したまま首を振った。上掛けの端から黒髪が飛び散るように覗いた。聞いても無駄だと察した信長は蝶夏の肩を無理矢理引っ張りあげた。

上掛けが捲れ、乱れた髪の間隙から涙に濡れた黒い大きな瞳が信

長を見た。

見られたっ。

そう知った蝶夏は、平手を信長の眼前に突きつける。

「見るなっ」

上擦った声で叫ぶ。

突きつけられた手を信長が掴んで降ろす。

再び蝶夏の顔が露わになる。

咄嗟にもう片方の腕で顔を隠して、漏れたのは懇願こんがんの言葉だった。

「見ないでよ、……おねがいだから」

搾り出すように、言った。

ぐいつと蝶夏の体が引かれた。

長い腕が体に回り、すっぽりと包まれた。蝶夏の頬に当たっているのは信長の胸だ。

「これで、俺には見えない」

ぽん、と手のひらが蝶夏の背を叩く。

まるで、押し込めているものを出せと言うように。

「……………たい」

先ほどよりもずっと大粒の涙が瞳から零れた。

「帰りたいよお」

ぽん、とまた背中を叩かれる。

「おとう、さん。おかさん……………」

口にしてしまえば、思いが溢れるばかりだ。

「会いたい、会いたいよ！」

ああああああああん、ああああああああん……………

……

蝶夏は声をあげて、泣いた。幼い時にそうしていたように。

両手でぎゅっと目の前の冷えた体にしがみついて、声が枯れるほど泣いた。

信長の腕の中では、泣き疲れた蝶夏が微睡まどろんでいた。時折鼻をすすっている。だが、体に回された腕以外はすっかり力が抜け、そう長くは持たずに眠りに落ちるだろう。

「眠るか？」

そう問えば、緩慢かんまんな動作で首を縦に振る。

それなのに、しがみつくと腕は離れない。

「寝ないのか？」

髪を撫でながら聞けば、信長の胸に顔を埋めたまま、蝶夏は言った。

「……………ひんやり」

確かに信長の体温は低く、夏だろうが冬だろうが人よりも冷たい体をしている。今は蝶夏の熱が移って常より上がっているとは言え、それでも低い体温だ。泣いて腫れ始めた蝶夏の顔には気持ちが良かった。

更に彼女はすす、と右に顔をずらして涼を求めた。

「おい」

さすがに信長も眉を潜めるが、ことん、と少女の重みが増したのに気付いた。

「…………寝たか」

無理に引き剥がすのも気が引けて、蝶夏を抱えたまま横になる。

しかし蝶夏の腕が体の下にきてしまうのに気付いた。

小さく息を吐くと、右肘を立てて頭を支えた。体が浮いた僅かな隙間に蝶夏の腕がある為、潰さなくて済む。

「むうう」

姿勢を変えたからか、蝶夏がうつすらと瞼を開く。

「寝ている」

声に反応したのか、首を反らして信長を見上げた蝶夏は微笑んだ。
「ありがと」

舌足らずな口調で言うと、ぽとりと頭が布団の上に落ちた。

彼女の瞼は既に腫れ始め、ぼってりとしている。

「これは、酷く腫れるな」

そこで、信長はにやりと笑う。

「蝶夏、これは貸しだぞ」

そう言つと、彼女の眦に唇を寄せた。

十五、二度目の朝は枕と目覚めたと思いたい

翌朝、蝶夏の頭はやはり靄もやがかったいた。

「む、ぐ……」

頭を押しつけている物体に沿って顔を上げると、端正な顔が見える。

超至近距離に疑問を持つことなく、とりあえず人と認識できるものに蝶夏はにっこり微笑んだ。

「おはようございます」

「またそこだけ敬語か」

肘をついた姿勢の信長が呆れ声を出せば、蝶夏は「ぐっ」と言っ
てまたしがみついていた。どう見ても二度寝をする気だ。

「起きる。朝飯を食いそびれるぞ」

自由な左腕で彼女を揺さぶる。

「はっ」

揺さぶられて額を信長の胸筋にぶつけていた蝶夏がようやく覚醒した。

まず、自分が何かにしがみついているのに気付く。

「だ、抱き枕……」

そう思ったかった。

だが、この枕は返事をした。

「誰が枕だ」

もう三日目だと言うのにちっとも聞き慣れない美声が頭の上から聞こえる。

そろそろと腕を離し、後ろにずり下がる。

肘を突いた男の顔が見えたところで蝶夏は叫んだ。

「ぎゃあ！　なんでいるの〜！」

「素早く後ずさり距離を稼ぐ。」

頭を抱えてうずくまる蝶夏に、体を起こした信長が問う。

「抱きついていたのは誰だ？」

「うとうとう。どう考えてもあたし、と言っしかないいい」

布団に頭を擦りつけて「夢にしたい。夢だと思いたい。夢になれ
く！」と呪文のように唱える蝶夏の前に信長が膝を着いた。

「蝶夏」

呼ばれて、彼女は顔を上げる。

男性にしてみれば細く長い指が蝶夏の目尻を撫でる。

思わず目を閉じたその瞼も辿たどっていく。

「大丈夫そうだな」

そう言っ指を離すと、立ち上がり障子を開ける。

何が大丈夫そう、なんだ。と疑問符を浮かべた蝶夏は彼がそうしたように自分の瞼に触れてみる。信長の手が冷えていた為か、触れた瞼も指よりひんやりとしている。

あれ？

蝶夏が疑問解消の糸口を見つけたところで、廊下から声がかかった。

「蝶夏様」

茅乃が立っていた。

「あ。おはよう、茅乃」

挨拶をすれば、ほっと安堵したような顔をして挨拶を返してきた。
昨日の朝同様、茅乃が着替えさせてくれるという。

部屋を出ようとしたところで、信長が言った。

「今日は出かける」

「またあたしを放置？」

昨日言ったことと違う！と抗議しようとした蝶夏を制して信長が続ける。

「おまえも行くんだ」

わーい、と両手を上げると、彼は黒く笑った。

「蝶夏、これは貸しだ」

そう言っ、自分の目元を指さす。

「ちゃんと返してもらおうぞ」
色気も出していないのに、蝶夏の背筋に寒気が走った。

十六、貸し借りについては深く考えたくはない

着替えに使っている部屋に入るや、蝶夏は鏡台に向かった。立てかけてある鏡を手にとると、覗き込む。

「……やっぱり腫れてない！」

あれだけ泣いたと言うのに、常と変わらないどころか引き締まってさえ見える目元に驚愕して声を上げると、茅乃が心配そうに聞いてきた。

「どうかなさいましたか？」

まさか昨晚ホームシックで大泣きしたとは言えず、蝶夏は言い訳を考えた。

「えーと、昨日、部屋で転んで、えーと、顔を打ったような打ってないような」

「まあ。では、腫れてはいなかったという事ですね？」

茅乃の問いに蝶夏はこくこく頷いた。

それを確認すると、「それはようございました」と言っ、彼女は蝶夏の衣装を整え始めた。

茅乃が心配して額を見にくるだろうと予想していた蝶夏は、彼女の淡白な反応に拍子抜けした。

蝶夏は知らない事だが、信長の寝室の傍には常に宿直番とのいばんと呼ばれる夜のボディガードが控えている。

昨晚、当番の者から伝えられて、信長は部屋に入る前から少女の異変を知っていた。

その報告と言うのが、実は蝶夏が筆に悪戦苦闘していた時間の話で、報告も「奇妙なうめき声をする」というものだったことは、また別の話だ。

宿直番の報告を共に聞いていた茅乃も寝室の傍までは来ていた。だから、蝶夏の泣きじゃくる様を漏れ聞いていたのだ。

だが、朝会ってみれば、どうしてかとても元気そうだった。茅乃

はそれに安堵した。

事情を知っているからこそ、彼女は臉の腫れについてずれた言い訳をする蝶夏に深く突っ込むまいとしたのだった。

その日、蝶夏が着せられたのは昨日よりも地味な小袖だった。薄青の地に小花が散った夏らしい装いだ。

部屋を移動すると、今日も先にきていた信長が座っている。

茅乃が何も言わずにご飯を盛る。

「あのさ。……今日ってどこ行くの？」

今朝突きつけられた「借り」について尋ねるのは、墓穴を掘りかねないと判断した蝶夏は、別の事を聞いた。

顔を上げた信長は片方の眉を僅かにあげた。

…… 答えない。

「無視かつ」

「黙秘する」

きいっと喚いて腕をばたつかせる蝶夏に、茅乃が茶碗を渡して黙らせる。

茅乃は蝶夏をあしらう為のスキルが着実に上がっていた。

十七、初めての外出に必要なあれやこれ

食事が終わりお茶を楽しんでいる間に茅乃がもう一枚着物を持ってきた。被衣かすきと言つて、外出時には必ず女性が被るものらしい。

「うえ。そんなの被つたら暑いよ。動きにくいよ」

顔をしかめる蝶夏に茅乃が言う。

「ですが蝶夏様、今日は日差しも強うございます。日除けにもなりますよ」

「うう。でもなあ……」

確かにまだまだ夏の日差しは強い。日焼け止めも塗っていない蝶夏としてはUV対策が気になるところだ。

しかし何しろ、今日も暑いのだ。どう考えてもメツシユ素材などではない被衣の下でどれだけ汗をかくだろうか。考えただけで恐ろしかった。これで蝶夏がフルメイクだったら某恐怖映画のモンスターより恐ろしい生物になるだろう。

まごつく蝶夏の横で信長が「貸せ」と言つて茅乃の腕から被衣を奪い取つた。

問答無用で蝶夏に被せて整えていく。

妙に手際が良い。

……女たらしスキル？

心の中で蝶夏が呟くと、聞こえた訳でもあるまいに、信長の視線がこちらに向く。

出来上がった蝶夏を、一歩下がって確認した信長は小さく頷く。

「これでいい」

「ありがとー」

実に気のない様子で蝶夏は礼を言つた。

その顔を覗き込むと、信長は蝶夏の手首を握つた。

「蝶夏、お前はもう橘姓を名乗るな」

意味がわからず首を傾げる蝶夏に、彼は続ける。

「姓は家を示す。橘の家と縁続きかと詮索されるのは面倒だ。姓を名乗らなくとも特に気にする者はいない。問われたら名だけ名乗れ」
「えーと、つまり、知らない橘さんに間違われたい為？」

「少し違う。お前が俺の傍に居る事で、お前を利用しようとする者共が出てくるだろう。そいつらは姓が同じというだけでお前を自身の娘に仕立て上げかねん。利益を貪りたい輩は己が欲望の為になんだってするだろう」

聞いているうちに蝶夏の視線が白けたものに変わっていく。

「……なんか、信長のせいっぽく聞こえるの、気のせい？」
くつと喉に掛かるような笑い声を信長が立てる。

「お前の観点は実に愉快だ」

「あたしは、全然愉快じゃない！」

膨らんだ蝶夏の頬をさらりと撫ぜると、信長は踵を返した。

「あまり喚わめいていると日が暮れる。行くぞ」

手首を掴まれたままの蝶夏は引き摺られるようにして歩き出す。

その背後に茅乃と方輔が続いた。

どこかと廊下を歩く信長の後ろで蝶夏は二人に聞く。

「二人も一緒に行くの？」

茅乃がにこやかに答える。

「私はご一緒致しません。ですが、方輔殿は参られますよ」

「はい。御供おとも仕ります」

「わわ。宜しくね」

何て言っているうちに信長が草履ぞうりを履いていた。

一段高いところでその様を見ていた蝶夏は、目を瞬いた。

地味派手だ。

信長の、標準より大きいだろうその素足に履いたのは、黒地に金糸で細かな模様の刺繍を入れた鼻緒の草履だったのだ。

「蝶夏様はこちらをお履きください」

そう言っ茅乃が差し出したのは紫と白の市松模様をした太めの鼻緒の草履だった。

足を差し入れるとすんなり収まった。誰かが既に使っていたものなのか、鼻緒が柔らかい。

「まあ。ちょうどよさそうですね」

茅乃が足元に屈み込んで具合を確かめながら言った。

「私の使っているもののなのですが、小さくなくて良かったです」

茅乃は蝶夏より小柄だ。その彼女の草履がぴったりと言うことは……。

「お前、足が小さいな」

ぐさつと来た。身長割りに足が小さい。数多くある蝶夏のコンプレックスのうちの一つだ。

160cmの身長に22cmの靴を買う悲哀を知らない男を睨み付ける。何が悲しいって、まず、バランスが悪い。こけやすい。更に、違うサイズなのに同じ靴を買うとなんと同じ値段なのだ。不経済だ。

しかし、この程度で拗ねていては茅乃のような大人の女への道は遠ざかるばかりだ。そう思った蝶夏は、つんと顔を背けて信長の台詞を無視した。

傍からみると、拗ねてぶいっと横を向いたようにしか見えないとも知らずに。

十八、馬ってもつと素直で可愛いものだと思っていた

未だに信長に手を引かれながら、蝶夏は那古野城内を進んでいた。平屋の建物が並ぶ中、区画を分ける様に木の柵が設けられている。足元はアスファルトなどではなく、固められた土だ。下草や木も生えているが、きちんと整備され、荒れた印象はどこにも無い。

でもなあ……、と蝶夏は思う。城、と言われて思い描く石垣も白堀も無いのだ。彼女の知る名古屋城や姫路城の象徴とも言える天守閣なんて欠片も見当たらない。

「まるで、……吉野ヶ里遺跡？」

佐賀県にあるその遺跡には再建された物見櫓ものみやぐらがある。この那古野城にも、少し向こうの方に似たような高い建物があるが。だが、規模から言えば、むしろ吉野ヶ里遺跡の方が立派そうに見えた。

戦国大名、戦国武将といった大まかな括りでしか『織田信長』という存在を蝶夏は知らない。親友である小金井ひよりならいざ知らず、尾張を手中に収める前の彼の現状等彼女には知る由よしも無い。

それにしても、と頭が切り替わる。

会う人物会う人物が大股に進む信長に頭を下げる。

一昨日、蝶夏を抱えた信長が歩いている時は、「何も見なかった」という顔でそそくさと姿を消したのとは対照的だ。

同時に、好奇の視線が蝶夏に寄越される。

幸い、彼女への視線は信長に着せられた被衣によって遮られていた。

それでも感じる視線に居心地の悪さを覚えながら行くと、信長は他より大きめの建物に入っていった。

鼻につく臭いが僅かに漂う。だが、不快に思う間も無く、風に流れてしまった。

蝶夏は歩みを緩めた信長の脇から中を伺う。

いなな
嘶く声がする。

「わあ！ うま、がもがいぐ〜」

上げた歓声は後半を大きな手に塞がれた。

「騒ぐな。馬が驚くだろう」

蝶夏の口を塞いだ張本人が言う。

「蝶夏様、馬は繊細な生き物です。大声を上げると興奮してしまいますよ」

茅乃が親切に口を添える。

口元を覆う冷たい手を外しながら、蝶夏は反省した。そういった話をどこかで聞いたことがあったからだ。従兄弟の豆知識かもしれない。

「あつ、そうだったかも。ごめんー」

近くに居た馬が苛立った様に蹄で地面を引っかいている。

そっちにも向けて蝶夏は「ごめんねー」と謝罪した。

「茜丸あかねまるを出せ」

建物の奥から顔を出した小柄な男に信長は命じた。

「準備は終わっております。すぐに」

そう言って一頭ごとに柵で区切られている部屋の一つに入っていた。

出てきた彼が連れているのは一際大きな黒馬だった。既に鞍くらが乗せられ、鐙あぶみと手綱が付けられている。

「でっ……………」

でかい、と叫ぼうとした蝶夏は自分で自分の口を塞いだ。先ほど注意されたばかりだ。またしても隣の馬は蹄を地面に打ちつけている。

しかし黒馬の方は動じもせず、自ら主の元へ歩いてきた。小男の先導などてんで無視だ。

信長の近くで止まると、鼻面を彼の腕に擦り付け始めた。視線は蝶夏を向き、まるで「こいつ誰？」と信長に聞いているようだ。

鼻を擦り付けられていた腕で茜丸の顔を蝶夏の方に向けると、信長は言った。

「蝶夏、茜丸だ」

大きく円らな瞳が蝶夏を覗き込む。

「えと。あたしは蝶夏。宜しくね、茜丸」

友好的に行こうと蝶夏は鼻先を撫でる為に手を差し出した。その手に茜丸は顎を乗せた。

「………………。挑戦的だね、茜丸」

むかついた蝶夏は声を低める。

やるのか、この野郎。的な気分になった蝶夏に、黒馬は「はっ」と言わんばかりに顎を上方に振り上げる。明らかに蝶夏を見下している。

その時、光の加減なのか、一瞬茜丸の瞳が赤味がかって見えた。

蝶夏は目を瞬く。

「茜丸、その辺にしておけ。今日は蝶夏を乗せるのだからな」

その言葉に茜丸は明らかに不満そうな顔をした。蝶夏もした。

こいつに？　このでつかいの？

そんな心の声が聞こえたように信長は笑う。

「一人で乗れるなら一頭ぐらい貸してやるが、お前、馬など操れんだろう」

全くその通りの蝶夏としては頬を膨らませるくらいしかすることが無い。

乗馬クラブに顔を出すくらいはしておけばよかったか……。

茜丸の手綱を引いた信長と蝶夏は馬房の外に出た。茅乃と、やはり小男から馬を渡された方輔も出てくる。

すると前方に男が二人いた。年は信長と同年代で、格好も彼と似たり寄ったりな小袖に袴だ。腰には大刀と小刀しんすいを履はいている。その背後には馬が二頭いた。

信長が近づけば、背の高い方の男が丁寧ていねいに礼をする。

「おはようございます、信長様」

鷹揚ようように頷く信長に、もう一人が軽く礼をする。

「おはようございます。ところでそちらが？」

と、蝶夏に視線を送る。

「ああ。お前ら、名乗れ」

なんとも大雑把に命じる。それから蝶夏の手首を開放すると、その手で彼女の背中を押して前に出す。

聞いてきた方の男が目の前だ。

彼は蝶夏と同じくらいの身長で、顔立ちは丸っこく、誰かを彷彿とさせる。

「やあ、始めまして。わたしは池田勝三郎恒興。いけだかつざぶろうつねおき信長様の乳兄弟だよ」

にこにこ笑いながら言う。

「あれ、乳兄弟って……」

「うんうん。君のお世話をしている茅乃は僕の姉だね」

いきなり一人称が「わたし」から「僕」に変わる。

「戻っていますよ、勝三郎」

蝶夏の背後に立っていた茅乃が前に進む。

指摘を受けた弟は「やつちまった」という顔をして肩を竦めた。

どうやら「僕」を使うほうが地らしい。

「茅乃の弟さん？」

「ええ、そうですよ。まったくどうしようもなく不肖の弟ですが、どうぞ宜しくお願い致します」

地味に辛らつな事を言いながら茅乃は和やかに笑う。勝三郎が「そんな言い方ないじゃないか」と唇を尖らせた。どうにも子どもっぽい仕草の抜けない男だ。

すると今度はその脇に居た男が背筋を伸ばして言った。

「私は丹羽長秀と申す」

堅苦しい物言いにぴったりの角ばった顔立ちだ。背は信長より僅かに低いが、蝶夏から見れば長身に違いない。

「万千代だまんちよ」

信長が言い添えると、長秀は顔を顰める。少し機械じみた動きだ。「信長様、幼名で呼ぶのはおやめください」

「わかったわかった」

あからさまにその言葉を気にも留めていない信長は手のひらを振る。

それを見て、長秀はそつと溜息をつく。

その様をまじまじ見ていた蝶夏は、可哀想にと同情の視線を送った。彼も信長に振り回されているかと思うと、ロボットっぽい顔にもわずかばかりの親近感が沸くというものだ。

そうしていると、信長が蝶夏を見ていることに気付く。

何かと思つて首を傾げると、二人の方に顎を向けた。その仕草で、自分にも名乗れと言っていることに気付いた蝶夏は二人に向き直った。

「た、……………」

橘、と言いそうになったところで隣からひんやりとした空気を感じる。

あわわつと一度口を閉じて言い直す。

「蝶夏、です。よろしく」

首だけで礼をする。

対する二人の態度はこうだ。

勝三郎は「はいよろしくね」とにこりと笑う。

長秀は片眉をぴくりとさせて苛立ちを示す。

どうやら外出のお供はこの二人に方輔を加えた三人らしい。

「そろそろ行くぞ」

そつ信長が言つと、皆馬に跨った。

さてどうしたものかと信長を見上げると、彼もこちらを向いた。

「蝶夏、馬の腹は蹴るなよ」

そつ言つや蝶夏の腰を掴み上げ、あつという間に馬上に横乗りさせた。声をあげる間ない。

彼はその後ろに鮮やかに跨ると、先頭を進み出した。

茅乃が背後で「お気をつけて」と言っているのが聞こえて、蝶夏は手綱を握る信長の脇から顔を出して、彼女に手を振った。

十九、馬上の葛藤と子どもの笑顔

四頭の馬は、大きな門を抜けると城を囲む堀に架けられた橋を渡り、城下を進んだ。

周囲には平屋の建物がまばらに並んでいる。あれは誰の家かと蝶夏が聞けば、信長は自分の家臣の家だと答えた。勝三郎や長秀もそこから毎日登城^{とじょう}しているそうだ。

簡素な家が並ぶ中で、やはり堀を巡らせ木の塀で囲われた那古野城は特別なことが窺^{うかが}えた。

信長が馬首を向けた先は北西。大分高くなってきた太陽の光を背中に浴びて歩む。集落を抜けると、固められている地面から徐々に短い下草の生えた荒れた道になっていく。

急ぐ用向きではないようで、その速度はゆっくりとしたものだ。同じ方向に行く者を追い抜いたり、向こうから来る者が脇に避けて頭を下げていたりした。どうやら皆信長の顔を知っているらしい。

徐々に武士らしい格好のものが減り、荷物を背負った商人や荷車を引く農民が目立ち始めても、彼らの反応はあまり変わらなかった。茜丸はぼくぼくと小さな揺れを作りながら進む。それがまた蝶夏に居心地の悪さを与えた。

なぜなら、鞍の上は狭いのだ。多分一人で使う物では無いのだろうが、それにしても狭い。頑張つて前方に寄つて隙間を作ろうとするが、それも馬上の揺れですぐに縮まってしまふ。それでも蝶夏は往生際悪く時折足掻いた。

じりじりと前方に進むと、ずるずると信長の方へと摺り落ちる。じりじり、ずるずる、じりじり、ずるずる、これを繰り返している。と呆れた声が頭上から降ってきた。

「先ほどから何をやっている」

「だって、狭いんだもん」

「馬上でじたばたするなど、阿呆^{おほう}か、お前は」

当然の言い分に蝶夏は黙して唇を尖らせた。

「あまり動くと茜丸の気を損ねるぞ。これは、俺以外にはただの暴れ馬だ」

ぎょつとして茜丸の鼻先を見ると、こちらを振り向いた。馬の目が言う。「蹴ったら落とすぞ」と。

まさか信長と乗っている時に落とされることはあるまいが、身の危険を感じた。

小さく吐息をついて蝶夏は身動きを止めた。

「馬に負けた……」

悔しげなその言葉に信長の肩が小さく震えた。

次第に周囲に田畑が増えてきた。畦道が縦横に伸びている。青々とした草が茂っているところもあれば、乾いてひび割れた土地もある。休耕地という言葉を知らない蝶夏にしてみればサボりかと思ってしまう有様だ。

大きな木が枝を伸ばす、少し開けた場所に出ると、信長は茜丸の手綱を引いた。従順な黒馬は抗う事無く足を止める。

「少し休憩をとる」

そう言っただけはさつさと地面に降り立った。蝶夏の腰を掴むや彼女のこともあっさり馬から降ろしてしまった。

他の三人も下馬して近づいてくる。

方輔が腰に下げていた竹筒を蝶夏に差し出した。

「蝶夏様。水はいかがですか？喉が渴かすきかれたでしょう」

日差しは信長の大きな背中と被衣かすきが防いでいてくれた為、そんなに渴きは感じていなかったが、折角の方輔の気遣いだ。

「じゃあ、いただきますー」

素直に受け取って手の中の竹筒を見下ろす。小さな穴が開いている側を口に運び傾けると生温い水が流れ込んできた。

二口、三口飲んで、方輔に返す。

「ありがとう」

受け取った方輔は竹筒の口に細い栓をして、再び腰に下げ直した。振り返れば信長は大木の下に座り込んでいる。勝三郎はその傍らに胡坐をかき、長秀はじつと佇んでいた。

やっぱり和製ロボットか……。

と、蝶夏がくだらないことを考えていると、遠くから歓声が聞こえた。

そちらに目を向ければ、蝶夏を庇^{かば}う様な位置に方輔が居た。既に歓声の方に目を向けている。

「村の子どもらです」

方輔が言う通り、十数人の子どもたち笑いながら駆けて行くところだった。

一際小さい子どもが置いていかれて集団に向かって何事か叫んでいる。

追いつがって走り始めて、派手に転んだ。

蝶夏は咄嗟にそちらに足を向けた。

「蝶夏さま？」

方輔が怪訝そうな声をあげて付いて来る。

「おやおや。手を差し伸べてあげるのかな？」

転んだ子どもの方に歩いていく蝶夏を離れて見ていた勝三郎が面白がって言う。

「あの子は、優しい子ですか？」

主である信長に聞けば、長秀が「下らない」と言うように顔を顰^{しか}める。相当蝶夏のことを気に食わない様子だ。

聞かれた主の方は、立てた片膝に肘を置き、その手の甲に顎を乗せた姿勢で気の無い風に答えた。

「さあな」

「ほーんと、信長様の興味の持ち方って掴めませんね。困った困っ

た」

全く困って見えない癖に勝三郎はそう言った。

さて。子どもに近づいていった蝶夏は、転んだ体勢のままで顔を歪めるその子の目の前に立った。

ああ、今にも泣く。

そう、方輔が思った時、高らかな音が周囲に響いた。

ぱあん……

ぎよっとして彼が音の方に目を向けると、蝶夏が両手を合わせていた。手を打ち鳴らしたのだ。

鳩が豆鉄砲を食らったような顔をしている子どもに、腰に手を当てて言う。

「はい、立つ！」

思わず、と言ったように子どもは立ち上がった。

代わりに蝶夏がしゃがみ込んで、どうやら男の子らしいその子の顔を覗き込む。

「よし。痛いところは？」

聞くと、子どもは涙の浮かびかけた瞳を瞬いて、それから首を振った。

「いたいところ、ないよ」

確かに、あちこちに土ぼこりは付いているが怪我らしいものは見当たらない。

蝶夏は彼の服の汚れをほろってやる。紅葉もみじのような手の平や短い着物の裾から覗く膝小僧を見た。

「うん。怪我は無いね。よく泣かなかったね」

そう言って、頭を撫でてやると、子どもは少し誇らしげに笑った。

「えへへ。ばく、ゆうた。おねえちゃんはだあれ？」

「おお。ちゃんと先に名乗るなんて、偉い子だ」

更に撫でて続けると、さも嬉しそうに笑い声を上げる。

「あたしは、蝶夏だよ」

「蝶夏様……」

諫める様な口調で方輔が口を挟むが無視だ。

「ちようか、おねえちゃん？」

「そう。ひらひら空を飛ぶ蝶々に、はるなつあきふゆの夏で、蝶夏」

「ぼく、ちようちよう好き！」

「奇遇だね、あたしも大好き」

蝶夏が笑うと、ゆうたは満面の笑みを返してきた。

笑い合う二人を見て、「意外な展開」と勝三郎が小さく拍手していた。

「まさか、まさか。泣かせないとはね」

彼は、恐らく長秀も、蝶夏は泣き喚く子どもを介抱する為に近づいたのだと思っていた。ところが、泣きだす前に事を納めてしまったのだ。むしろ一瞬叱り飛ばしさえした。

勝三郎の瞳には好奇心が浮かび、長秀の瞳にも僅かながらその色が見えた。

信長はほんの少し唇の端を上げていた。

二十、夫婦の在り方については主張がある

「ゆうた！」

そこに先ほどゆうたを置いて走り去った子どもの集団が戻ってきた。先頭に居る十歳ほどの少年が子どもの名前を呼ぶ。

「あ。にい」

ゆうたが蝶夏の傍らで彼を呼んだ。

「にい、つて……」

「兄、^{あに}でしようね」

舌足らずな言葉を繰り返した蝶夏に方輔が注釈を入れてくれる。子どもたちがあつという間に蝶夏たちの前に集まった。

「お前、なにやってんだよ！」

ゆうたの兄だと言う少年が、弟を怒鳴りつける。怯えたゆうたは蝶夏の背に隠れてしまった。

だから代わりに蝶夏が答える。

「転んじやったのよ。あんたたちを追っかけてる途中で。でも泣かなかったもんね？」

背後の子どもに笑いかければ、ほっとしたように笑い返してくる。

「うん。ぼく泣かなかったよ」

「お前が？」

兄に疑われて、ゆうたは可愛らしく唇を尖らせる。

「泣かなかったもん！！」

ちよびつと前に出て言い返す。

「いつも泣いてばかりのお前が？」

更に疑って掛かる少年に蝶夏は待ったをかける。切りが無さそうだったからだ。

「はいはい。その辺にしといて。で、君はこんな小さい弟をほっといて、どこ行つてたの？」

その言葉に、少年が「うっ」と詰まる。背後の同年代らしき子ら

も気まずそうに視線を泳がせる。

言いたそうな、言い難そうな顔をしているから、蝶夏は「ん？」と首を傾げて、先を促した。

「こいつ、一番小さいくせにいつつも付いてくるから、置いていったんだよ！」

やけくそのように少年が叫ぶ。

周囲も同意を示して頷いたり声をあげたりした。

「でも、ちゃんと迎えにきたんでしょ？」

この少年が、蝶夏と一緒にいるゆうたを見てあげた声には明らかに心配する様子が見えていた。邪険にするが、やはり弟なのだ。守ろうと言う意思がある。だから蝶夏は彼の頭にも手を伸ばす。

「お兄ちゃんだもんね。偉いぞ！」

子ども扱いにむすつとした顔をしながらも、少年は蝶夏の手を払ったりはしなかった。

逆に、ぶつきらばうに聞いてくる。

「あんた、誰？」

「お前っ」

咎めようとする方輔に「ほーすけ」と名前を呼んで黙らせる。

緊張しかけた空気を壊したのはゆうただった。

「にい、なまえ聞くときは、先に自分のなまえゆうんだよ」

先ほど蝶夏に褒められたのが余程嬉しかったらしく、ちよつと偉そうに言ってくる。

弟の常と違う様子に怪訝そうにした少年だったが、まあいいかと思いを切り替えたらしい。

「おれは、しyouた。親父はその村で年寄をやってる。弟が世話になったみたいだから、一応、礼を言っとく」

年寄とは、村の中でも指導者的な地位を占める存在だ。その子どもだからなのか、しyouたは一端の口を利いてきた。

しかし、その後に残るの子どもたちが続いたものだから、あまり締まらなかったのが残念だ。

「おれ、からや！」

「おれはとうき」

「ぼ、ぼくはアオイオリ」

「かほは、かほっていうの」

等等、蝶夏に詰め寄るように口々に言ってくる。

皆が一頻り自己紹介を終えたところで蝶夏は自分も名乗った。

「蝶夏っていうの。よろしくね」

「ちようちようさんなんだよ！」

ゆつたがそう言つて、蝶夏に「ねっ」と言つて小首を傾げる。蝶

夏もそれに微笑みながら返してやる。

「ふうん。で、蝶夏ねえは、信長様の知り合いなの？」

しろうたが、少し離れた大木の下に腰掛ける信長を見ながら聞いている。

他の子どもたちが信長の名前を聞いてざわつき出す。

「えっ信長さま？」

「どこ？ どこ？ いるの？」

「あそこの桜の木の下に座ってる」

視線だけを向けてしろうたは、信長の位置を他の子らに教える。

皆の視線がそちらに向く。蝶夏も振り向いてみたが、信長の顔までは判別できない。木の下にいる三人の男の男の区別も怪しいくらいだ。

茜丸がいるからわかったのかな？

一際大きい黒馬を眺めて、蝶夏はそう思った。

「で？ 知り合い？」

しろうたが再び聞いてくる。

少年の方を向いて蝶夏は首を傾げる。

「うん。やっぱりそうなるのかな？」

はつきりしない答えを返す蝶夏に、しろうたは更に次の質問をぶつける。

「じゃあ、側室になるの？」

「ええ？」

蝶夏は大きく瞬いた。

「だから、蝶夏ねえは、信長様の側室になるのかって聞いてんの」「しばし、その質問を頭の中で反芻して、蝶夏は止めていた息と共に返答した。

「まさかつ！」

なぜそういう発想になるのか。

「だって、信長様って二年くらい前までは普通にここいらをつろついていたけど、女連れてきたのは初めてだし」

「信長が女の人連れてたら、その人たちみんな側室になっちゃうわけ？ そんな馬鹿な！」

この村の領主でもある信長を呼び捨てにした蝶夏の台詞に他の子どもたちは再びざわつく。

蝶夏は構わず立ち上がる。

別にしよたを威圧しようとか、そういう意図は無かった。ただ、言うべきことを言うべきだと思ったのだ。

腰に両手を当てて、腰を屈めてしよたに顰めた顔を近づける。

「いーい！？ あたしは一夫一妻制推奨派なの！」

「いっぴいっさいせい？」

「一人の夫に、一人の奥さん！」

「あゝ、うちのおつとうとおっかあのことだ」

嬉しげに言うしよたの顔をさらりと撫でて「そうだね」と頷く。

「つまり、正室と側室のいる信長様は嫌いつてこと？」

あつさりストレートに聞いてくるしよたに方輔がぎょつとした顔をする。

蝶夏は今度は胸を張って答えた。

「嫌いかどうかはまだわかんないけど、正室だの側室だの、女の人に優劣つけるような男はいや！」

その時、背後から声がした。

「蝶夏」

二十一、子どもと信長なんてミスマッチもいいところで

「蝶夏」

全身に震えが走るほど艶めいた声だ。こんな声を持つ男はたった一人しか知らない。

何よ、と蝶夏が振り返る前に甲高いが小さい悲鳴が聞こえた。わっ、と子どもが走って逃げていった。

しょうたはそれを見ていたが、つられて走り出した弟を追いかけて行ってしまった。

呆氣にとられて蝶夏はしばらく固まっていたが、そのうちに腹筋が震えてきた。

「ふつ……」

「なんだ」

信長の問い掛けに我慢が出来なくなつた。

「あはははははははははははは！」

本当は彼を指差して思い切り笑いたかったが、それはさすがにま
ずいと思い、背中を向けたまましゃがみ込んでお腹を抱えた。

「こ、子どもに好かれるタイプじゃ絶対対ないと思ってたけど、けど、まさか、あんな、……く、クモの子を散らすように逃げるなんて……！」

笑い過ぎて横隔膜が痙攣けいれんを起こしかけている。結構痛い。

「ちよ、蝶夏様、そろそろ収められたほうが……」

方輔の諫める声も、今や蝶夏の笑いを増幅させる効果しかない。それでも笑いを堪えようと努力する蝶夏の上に濃い影が落ちる。

「いい加減にしないと、ここで奪うぞ」

耳元でひんやりとした声が囁く。

もちろんこの男が奪うものなんて分かりきっている。

ぴたつと笑いが止んだ。

そろそろと振り向くと、既に信長は元の姿勢に戻って蝶夏を見下ろしている。

「蝶夏様、大丈夫ですか？」

方輔が心配そうに聞いてくる。

立ち上がり、お腹を擦りながら蝶夏は答える。

「うん。大丈夫。なんか、一気に血の気が引いたせいで、収まっちゃった」

横目で信長を睨み付けながら言うが、当の本人は涼しい顔だ。

「それで、子ども。何の用だ」

蝶夏の背後に視線を送りながら信長が唐突に言うものだから、方輔と蝶夏は驚いて振り返った。

先ほどの集団の中に居たのだろっ、見覚えのある子どもが道の真ん中、蝶夏のすぐ脇に立っていた。しょうたよりは年少だろうその少年は、ぱさぱさと跳ねる髪が少し緑がかったいた。

「あれ、君、さっきの」

蝶夏が声を掛けると、少年はこくつと首を縦に振る。

「うん。ぼく、アオイオリっていうんだ」

手を蝶夏に伸ばす。

握手かなと不思議に思いながらも蝶夏はその手を取った。しつとり、というよりもじつとりと水を含んだような感触に驚くが、手は離さなかった。

そして、彼の指が少し変わっているのに気付いた。

「あのね、ぼく、向こうの『みまち池』の水神様のところにいるんだ」

「水神様？」

「うん、そう。でね、水神様がお姉ちゃんのこと心配しているの。だから、ぼくにお使いをたのんだの」

「おつかい？」

「そう。もしも、お姉ちゃんが困ったら、いつでも『みまち池』においでって」

「……えと、水神様がどうしてあたしを心配してくれるの？」

全く話が見えず、蝶夏が聞くと、あおいおりは少し声を潜めて言った。

「あのね、信長様は、血の臭いがするからって。お姉ちゃんが巻き込まれたら可哀想だからって言ってたよ」

「貴様っ」

主への侮辱に、方輔が腰のものに手を伸ばす。

アオイオリの方を向いていて、その様子が見えない蝶夏はしみじみと言った。

「まあ、そうだろうね」

二日前の晩にあれだけ蝶夏の血を啜^{すす}っていたら臭いもするだろうと。

方輔が蝶夏の返答に固まってしまう。

「えっ、いいの？お姉ちゃん、それでいいの？」

事情を知らなければ驚くのも無理は無いだろう、と蝶夏は微妙に勘違いしたまま答える。

「いいか悪いか聞かれると、かなり悪い、かな」

うんうんと首を振る蝶夏に、「くっ……」と今度は信長が笑いを零した。

それを見て瞬いたアオイオリは、ふっと空を見上げると、しばし身動きをしなかった。

蝶夏が声を掛けようと思った瞬間、「はい」と頷いてから、こちらを見た。

「あのね、とりあえず、大丈夫そうだからって。水神様が帰って来いって」

蝶夏の手を離してアオイオリは踵を返した。

ひらひらと手を振りながら走り去ってしまった。

「……あの子」

先ほどまで握り合っていた手を眺めながら蝶夏が呟くと、信長が答えた。

「カワワラベ、だな」

「カワワラベ？」

問い掛ける蝶夏の手を信長は掴んだ。アオイオリと繋いでいたほうの手だ。

「こつちでは『河原小僧』、他の地域では『河童』とか言ったか。そういう妖怪の血を引く者共の総称だ」

「河童……。あつ、だからあの子、指の間に水掻きがあつたのか！」
蝶夏があの子の手を握って気付いたのはそれだった。

「でも、水神様のところにいるって、村でもあるのかな？」

「それは無い。あの土地は手狭だ。恐らくあの子どもは両親を失つて水神に保護された類だろう。水の眷属同士ならよくあることだ」

「ふうん。優しいんだ。あたしのことまで気にしてくれるなんて」

「同族意識が強いだけだ。それに、お前のことはわかりやすい」
「なに？」

「あの水神は俺のことが嫌いなだけだ」

「つまり、あたしのことはおまけっていうか、当て馬？ 神様なのに、対抗意識、みたいな感じ？」

「そうだな。大体、お前が水神の元に言ったところでどうしようもないだろうにな」

何を考えているのやら、そう言いながら信長は勝三郎らを残してきた大木の方へと戻り始める。

「どうしようもないって？」

先を歩く背中を小走りで追いながら蝶夏が聞くと、彼は首だけで振り向いて笑う。

「お前、水の中で息ができるか？」

「出来るわけないじゃん！」

実はまだ握られていた腕をぶんぶん振って否定する。

引き剥がす意図では無く、ただ興奮するに任せて振られている腕をそのままに、信長は「だろうな」と言ってまた笑った。

「ねーえねえ」

「何用だ」

一見すると仲良く手を繋いでいるようにも見える二人（実際は一方的に捕まれているだけだが）を遠目に眺めながら勝三郎が長秀に声を掛ける。

「あの子、まだ警戒する必要があると思う？」

顔中でにこやかに笑いながら問う足下の男に視線を移した長秀は一瞬困ったような顔をした。しかし、すぐにいつもの四角い顔に戻った。

「用心に越したことはない」

「まあ、そうなんだけどね」

同意を示して勝三郎は立ち上がる。

少し意外そうに長秀は彼を見た。てっきり反論でもしてくると思っただのだ。

「いやあ。貴重だね」

「何がだ」

「長秀殿にそんな顔させるなんて。蝶夏殿は大物になっちゃうかもね」

眉間の皺を深くして、長秀は溜息をついた。

……やはりこのお調子者は役に立たない。

二十二、握り締めた拳に宿るものの名は

再び四頭の馬は北西へと進む。

段々と雰囲気が荒んだものになっていくのに、蝶夏は気付いた。

田畑に荒地が目立ち、明らかに人が住むことができないと判るほど崩れた家も目立ちだす。

道の脇に立っていた小さな神社も酷いものだ。朱色など欠片しか残らない鳥居の奥には吹けば飛びそうな社がある。

蝶夏は久々に『三匹の子ぶた』の物語を思い出した。藁の家ならいざ知らず、木の家が息で吹き飛ばかよ、と嘲笑ったことを反省した。飛ぶ。あれなら確実に吹き飛ば。そう思わせるほど酷いのだ。

「ここ、何？ 何でこんなに……」

戸惑って信長を見上げれば、苛立ちを含んだ顔が正面を見据えていた。

「この辺りは既に尾張守護・斯波家の土地だ。だが、斯波家はもはや権力を持たない。守護代の清洲織田家も同様だ」

吐き捨てるように言う。

「清洲、織田家？」

「清洲城を本拠地としていた織田家の本流に近い家だな。本家は岩倉織田家だ。だが、そこにもはや力はない」

「織田さん、多すぎ」

「百年も経てば本家から分家から枝分かれが進むものだ」

「ふうん。じゃあ、今ここの実権を握っているのって誰？」

一瞬蝶夏を見下ろすが、すぐに正面へと視線を戻す。

「又代の坂井大膳」

名目上、尾張国の頂点に立つのが守護・斯波義統で、その下に続

くのが守護代・織田彦五郎。その下に又代（小守護代）の坂井大膳となるのが本来の有り様だ。しかし坂井は今や守護も守護代も凌ぐ権力を有していた。

「見ろ」

信長が菑丸の足を止めて、その道の先を指差した。
蝶夏は、振り向いて目に飛び込んできた光景に言葉を失った。

そこは一面、黒焦げの焼け野原だった。

拓けた土地に、建物の柱だったのか、時折黒い棒がもつれるようにして突き出ている。

何か、吐き気を催すような臭いも漂ってくる。

「なに、この、臭い……」

袖で口元を覆いながら蝶夏が呟けば、信長の平坦な声が答えを寄越す。

「この暑さだ。全て焼き払うように命じた」

「焼く？」

「腐るだろう」

腐るようなものが何なのかわからない蝶夏は、すぐ傍の男の顔を見上げた。

「ここ、一体どこなの？」

見下ろしてきた信長の顔は、無表情といっても良かった。だが、その瞳には種類の判然としない強い力がある。

「萱津だ。先だって、ここで清洲の軍勢と戦った」

茅乃が言っていた『いくさ』のことだ。蝶夏はすぐに気付いた。
驚きよりも納得といった様子の蝶夏に、信長は呟く。

「知っていたか」

「茅乃に聞いた。それで、城の人の気が立ってるんじゃないかって、
信長が……」

心配してるらしい、とは本人の前では言い難い。

「俺が？」

ぶつぶぶんと蝶夏は首を振る。

「なんでもない」

器用に片眉だけ寄せて、信長は不審を表すが何も言わなかった。ひらりと茜丸から降りると、蝶夏に手を伸ばす。

どうして問答無用で降ろさないのかと疑問を抱きながらも蝶夏は下馬することにした。しかし、首を捻る。

「ねえ、手を繋いでもしよぅがなぃよね？ この場合」

繋いだところで降ろせなぃだろう。

「肩に手をつけ」

信長はそう言って蝶夏の中途半端に上げられた手を自分の肩へと導く。

彼女の両手が肩に乗ったところで、信長は細い腰を掴んで自分の方へと引き寄せる。そのまま地面に降ろされれば、先ほどよりずっと安定した姿勢で降りられた。

蝶夏の視線は自然と戦のあったという場所に流れる。

あの異臭はまさか、人が燃えた臭いなのだろうか。

「人が、死んだの？」

「戦だ。当たり前前に死ぬ」

怖いもの見たさなのか、蝶夏の足がさくりと草を踏む。

さくりさくりと生の草の感触が、ある時、ざり、と音を変えた。

蝶夏の歩みが止まる。足元で砕けた灰が風に吹かれて舞い上がる。黒く、ひらひらと風に散る。

「勝ったの？ 負けたの？」

「勝った」

信長の答えは簡潔だ。

「じゃあ、信長は、何に怒ってるの？」

横に並んで同じ景色を見ている男に、蝶夏は尋ねた。

「俺は怒っているように見えるか？」

聞いているのはあたしなだけだなあ、と思いつつも信長の問いに答えた。

「怒ってるし、苛立ってるし、あと、……………」

もう一つの感情が上手く言葉にならない。

考えている間に、遠く離れたところから泣き叫ぶ声が聞こえた。

見れば、女が一人、地に伏して肩を震わせている。縁者の遺品が見つかったのだろう。傍らには鋤のような道具を地面に突き刺して俯く小さな影がある。

やがて、その影は顔を上げて母親らしき女の体を支えながらその場を立ち去った。

「いくさは、ああいう人をたくさん作るんだよね……」

胸の奥に燦^{くすぶ}る感情があった。

「話では、知ってたんだけどなあ」

信長は黙っている。

「なんていうんだっけ、こうゆうの。こう、胸の奥がもやもやする感じ」

自分の胸元を握りしめながら蝶夏は独白する。

ああ、そうだ。

「悔しい……かな」

疑問を含めて口にするが、口から飛び出せば、そういう名前の感情だったと納得できた。

「そうだよ！ 悔しい、だ。そうそう！ だって、いくさなんてなければあの人たちあんな目に合わなかったんだもん。でも、起こっちゃったものはどうしようもなくって、でもどうしようも出来無い事が、悔しい……んだ」

すつきりした、と蝶夏は胸を掴んでいた手を離れた。

すると、伸びてきた両腕が蝶夏の顔の脇に垂れる被衣^{かすき}を持ち上げた。自然、蝶夏の首が上を向く。

被衣に顔の両側を隠された蝶夏と、屈み込んできた信長の顔に濃い影が出来る。

「お前は、どうしてそうなんだろうな」

そう言いながら、信長は端正な顔を近づけてくる。

間近に迫るその顔を瞬きもせずに眺めていた蝶夏は、気付いた。彼の黒い瞳に金色の輝きが混じっていくことに。

夜じゃなくても光るんだ……。

ずれたところで感心する蝶夏はどんどん距離が詰められていくというのに、どこかぼんやりとした心地だった。

それは、直前に見た信長の顔が柔らかい笑みを作っていたからかもしれない。

被衣の両端が信長の顔を受け入れようとした時、蝶夏を見つめ、蝶夏に見つめられている彼の瞳が、すいっと横に流れた。

身を起こし、振り向きながら舌打ちをする信長の様子に首を傾げながら、蝶夏もそちらを見る。

二十三、名前の付け方に不服あり

少し離れた位置で何事か話していたはずが、急に密着し始めた二人を見ながら勝三郎は間の抜けた声を発する。

「ほーすけ君は蝶夏殿の傍にいないくていいのかい？」

傍らの方輔が眉間に皺を寄せて口を開く。視線は定まらず、落着かせる場所を求めて彷徨^{さまよ}っていた。

「あの雰囲気の間に割り込め、と仰るのですか、池田様」

「いや」。真の護衛はそうするべきじゃないのかなーと思って」

恐らく三人の供の中でその役目を果たせそうなただ一人である長秀は、事後処理の為にもう少し先に置いてある兵の詰め所へと足を運んだ後だった。

よってこの場には、目の前の光景を楽しそうに見ている青年と、目を逸らしたいような逸らしたくないようなと葛藤する少年の二人が残されていた。

「しっかしまあ。見られてるっていうのに気にしない人だよねー、うちのご主人様って。こっちの声も多分全部聞こえてるのに、動揺一つしてないし」

「えっ。こんなに離れているのに聞こえているのですか？」

驚く方輔にのほほんと勝三郎は答える。

「うん。そう。地獄耳ってやつ？聞こうとしなきゃそんなに聞こえないみたいだね。いやー人間離れしてるよね。君も見習った方がいいよ、小姓君」

「……人間離れしているあたりですか？」

「君、意外と面白い子だったんだね。残念ながら、あの平常心のほうだよ、見習ってほしいのは」

「は、はあ」

「目の前であれ、やってても表情一つ変えない。長秀殿を見習ってれば出来るんじゃない？」

あれ、のところで距離が近づいていく二人を指す。

ところが、信長が身を起こした。

「あゝらら？何かあったかな？」

主はこちらの方を向いているが、視線は通り過ぎている。

勝三郎と方輔も振り向いてそちらを見れば、騎影きえいが三つ見えた。

急に身を離れたかと思えば、向こうを向いてしまった信長にっられて蝶夏もそちらを見る。

大分離れた位置に勝三郎と方輔の背中があつて、ここで初めて蝶夏は長秀がいないことに気がついた。

二人の奥に動くものが見える。

馬が三頭だ。近づいてくるが、うち二頭は勝三郎らの辺りで歩みを止めた。

残る一頭は信長の少し手前で止まった。乗っていた人間が地に降り立つ。

「兄上！お久しぶりです」

蝶夏と同じくらいの年の少年は快活に言った。

「のぶゆき信行か。ここで何をしている」

素っ気なく信長が問いかけるが、聞かれた当人は気にした様子も無くにこりと笑った。

「爽やか100%か……」。

蝶夏はそう思った。

「はい。柴田が兄上の戦った後を見ておくのも勉強になると言つので。私も見てみたかったですし」

「そうか」

「兄上は視察ですか」

「そんなところだ」

「では、お会いできてよかった」

どこまでも素っ気ない信長に、少年はますます笑みを深める。

天然度も100%か……。

さらに蝶夏は彼に対しての評価を立てていった。

そこで彼が蝶夏に気付く。興味深そうにこちらを眺めるその顔立ちは柔らかな美しさがある。

「おや。兄上、こちらは？」

「あたしも聞きたい。兄上って、信長の弟？」

同じ端正な顔立ちでも、種類の全く違う美貌を持った二人を見比べながら蝶夏が聞けば、信行は目を大きく見開いた。信長は絶対にしないだろう表情だ。

「兄上を呼び捨てにする女がいるなんてっ」

素早く蝶夏との距離を詰めると彼女の両手を握り込んだ。

「やあ。初めまして。私は織田信行。信長兄上の直ぐ下の弟になります」

ぎゅっと手を握る力を強めると、こくこくと一人頷き出す。

「大抵の女性は兄上の前にいると萎縮いしゆくしてしまうんですよ。乳母と茅乃以外で兄上と堂々渡り合っている人は初めてです。感動だ。感動だなあ」

蝶夏は意味が分からず彼を見ていたが、同じようなことを延々と話すのを聞くうちに、段々どうでもよくなってきた。

信長に視線を移して聞く。

「なにこれ」

信行を顎だけで指し示す。

「弟だ」

しばし間を置いて言い直す。

「頭のおかしい方の弟だ」

「兄上酷いです！」

蝶夏が顎で彼を指した時は反応しなかった癖に、信長の暴言には反応する。

……変人だ。

「そついえば、直ぐ下の弟って、一つ違いって事？」

「いや。俺には兄弟がこれを除いても後十人いるからな。俺が二男でこいつが三男だというだけだ。……年は二歳違いだったか？」

「はい。今年で十七になりました」

「十二人兄弟？！ 多っ。あれ？。じゃあ、行君、ゆきくん 同年じゃん」

「同年？」

「行君？」

兄弟で反応するところが違った。

先じて信長が質問を続けた。

「お前、十六じゃなかったのか？」

「うん？ あたし、信長に年言ったつけ？ …… ああ、茅乃に聞いたのか」

茅乃から信長へ、蝶夏の情報がただ漏れであることは明白だ。

「確かにあたし、十六だよ。でも、こっちじゃ生まれた年から一歳って数えるんでしょ？ 数え年かそどしって言ったつけ？ 昨日茅乃に教えてもらったの」

「お前のところではちがうのか」

「そ。あたしのところでは、生まれた年はゼロ歳って数えるから、その数え方で行けば、行君は十六歳で、あたしと同年になるの」

「つまり。数え年ならお前は十な……」

蝶夏の年齢を言おうとした信長の口を、信行の手を素早く振り払った蝶夏の手が塞ぐ。

「だめっあたしはまだ十六歳がいいの！」

一掴みで口を覆う両手を取り去った信長が言う。

「たかだか一年分だろう」

「花の十六歳は一年しかないの！ それをちょっと違う年の数え方するからって一歳年とるなんて、絶対いや。女子高生の十六歳の貴重さをなめるなよ！」

「意味がわからんぞ」

「わかんなくていいの！ 納得しとけばいいの！」

二人のそんな馬鹿馬鹿しいやりとりを信行は目を丸くして眺めて

いた。言葉もない。そんな感じた。

「いいから、私は十六。行君も私の中では十六。これでいいでしょ！」

そう言った蝶夏の台詞でようやく我に返る。

「あ、あの。その、行君と言うのは……」

「ん？ ああ。だって、信長と信行でしょ？なんか紛らわしいなっ
て思っ
て。行君にしとけば間違わなかった。……ダメだった？
いやなら他の考えるけど」

「お前、ふつうに名を呼ぶという選択肢はないのか」

「ない。だって織田一族って『信』だらけでしょ。お父さんが『信
秀』だっけ？ それなら絶対そうでしょ」

蝶夏は自分の名前の由来のこともあつてそう言った。

「親って自分の名前を子供の名前に使いたいもんだもんね」

「た、確かに、十二人中八人は『信』がつかますね」

「ほらっほらっ。だから区別つける為に呼び易いあだ名があつたほ
うがいくない？」

絶対覚えられないし、間違える自信があつた。

「うゝん。一理ありますね」

信行は腕を組んで考え出した。

「……お前は一体何をしに来たんだ。これと遊ぶためにここにいる
のか？」

その言葉に、「これってなんだ」と抗議する蝶夏とは違い、信行
はさつと姿勢を正した。

「兄上に教えを請いに参っております！ 戦場を見られるだけでも
十分ですが、兄上がいらっしゃるとい
うこの偶然を是非ともわが身
の糧かてとしとございます！」

そう言うや、矢継ぎ早に信長に質問を投げかける。今回の戦術か
ら使用した武具について、果ては兵糧等々の細かなことにまで及ん
でいた。

信長と信行が話し始めれば、内容のわからない蝶夏は手持ち無沙

汰になる。辺りを見て回ろうと二人から離れた。

「蝶夏、あまり離れるなよ」

信長からの注意が飛ぶ。

「はいはい」

子どもじゃないんだから、と内心ぶすくれながらも彼に了解を示す為、手を振る。

その様を見た信長はすぐに弟との会話に戻った。

踏めばぐしゃりと崩れる足下に注意を払いながら蝶夏は進む。この辺りの片づけはあらかたが済んでいるのか、これと言って何もない。

風が吹けば時折例の異臭がする。

蝶夏は焼け野原を見ながら考えた。

今、ここで本当にいくさが起こっていたら、戦い方なんか知らないあたしは、ひとたまりも無いんだろうな。……ううん。いくさなんかなくなつて、あたしは着る物も、食べる物も、寝る場所も無かつたんだ。こう考えるのはかなり癪に障るんだけどね！！

もちろん茅乃や方輔に、では無い。どうもあの男は、信長は蝶夏を素直にさせない。全ては彼の言動と行動によるものだから、ある意味自業自得なのだが、ともすると狙ってやっている節さえある。

「質悪すぎっ」

一人呟いて蝶夏は顔をしかめた。

振り返り、彼の様子を伺おうとした瞬間、とてつもない頭痛が蝶夏を襲った。眩暈めまいが後から付いてきて、立ってなどいられなかった。

二十四、敗者の嘆きなんて聞いていられるものではない（前書き）

他者に対して攻撃的な物言いをする話になります。

不快に思われる場合もあるかと思いますが。ご注意ください。

二十四、敗者の嘆きなんて聞いていられるものではない

蝶夏の様子が変わったことに真つ先に気付いたのは信長だった。驚いたのは信行だ。

「蝶夏」

そう言つて、少女の方に歩きだした兄が既に抜刀はうとうしているのだ。頭を押さえてしゃがみ込んだ蝶夏の脇で足を止めると、信長は手に持った刀を振り上げた。

「兄上！？ 一体何を」

彼は兄が蝶夏を斬るのだと思つた。背後の家臣たちも何事かと駆けてくる。

しかし信長の振るつた刃は蝶夏の上方を撫でた。

もし彼女の前に男が立つていたとしたら、丁度その肩口を袈裟懸けさがけに斬るようにしたのだ。

蝶夏には傷一つ、ついていなかった。

「ぎゃあああああああああああ」

信長が斬り付けた、誰もいないはずの空間から悲鳴が響きわたつた。

そして、唐突に男の姿が浮かび上がる。

四十がらみの男の、向こう側を透かす半透明な姿はこの世の物とは言い難い。

だが、その場に居合わせた男たちはこの男に見覚えがあつた。

「坂井大膳か」

信長が口にしたその名は、先だつての戦で清洲の兵を率いていた男のものだ。今現在、尾張国の実権を握っている又代である。

斬り付けられたその身は血こそ出ないものの、ダメージはあつたようで、坂井は肩の辺りを押さえて苦悶の表情を浮かべている。

「おのれ、おのれ、織田の小倅があ！」

怒りを湛えたその表情は凄まじく、叫び声を上げる度に周囲の空

気が波打つようだった。

信長の背後までやって来ていた信行も蝶夏と同様に頭痛や眩暈といった症状を感じ、「うつ」と呻いて地に膝をつく。

離れた位置に居た勝三郎らも近づくほどに同じ苦痛が強まるのを感じていた。

その中で、平然としているのが信長ただ一人だ。

それがまた坂井の癪に障る。

「何故この儂がお前のような者に負けねばなんのだ。有り得ぬ、有り得ぬぞ！この尾張の真の支配者は儂だ。坂井大膳だ！！」

「そんな恨み事を言いにはわざわざ体を抜け出てきたか」

「あ、兄上、その坂井殿は生霊ですか……」

不快な症状を堪えて信行が問えば、坂井が答えた。

「そうだ。儂はこの男への恨みと憎しみのあまりにこの様な事になったのだ。お前がさつさと儂に従えば良かったのだ！お前はあの忌々しい信秀と同じだ！どうせ父親同様に清洲を支配して尾張の実権を握ろうというのだろう」

「……っさい」

「今川に通じた山口を討ちおつて、武を見せ付けたつもりか！この国を治めるに相応しいのは我が坂井家の他にあるまい。その当主たる儂が、お前など今度こそ討ち果たし、尾張に覇を唱えるのだ！！」
そう言つて笑う坂井の顔は醜悪であつた。

蝶夏は我慢の限界だった。坂井が喚く度に頭痛が強まるし、眩暈が波のように襲い来る。

足元の石を掴み取ると、力を振り絞つて立ち上がった。
引っくり返つてしまいそうな程体調は最悪だったが、怒りが勝っている。足に力を込めて地を踏みしめた。

「うるさいって言つてるでしょう！」

叫び、坂井に向かって拳大の石を投げつけた。

透けた体を石は通り抜けてしまふが、驚いた男は哄笑をやめ、目を見開いた。

「人が頭痛と眩暈と吐き気で苦しんでるつてのに、その目の前でぎやあぎやあ騒いでんじやないわよ！迷惑！大体、原因はあんたじゃないの？この公害男！」

怒りに任せて被^{かぶ}つていた被衣^{かすき}を頭からむしり取る。

最後は推測の域を出ない内容では有^あったが、蝶夏には確信があつた。

「そもそも、生霊？になつてまでやりたいことつてこれ？こつやつて恨み言いたかつたつていうの？……ちつちやい男ねえ」

蝶夏の瞳には輕蔑の色が満ちていた。

「なんだと、この小娘がつ。儂は坂井大膳だぞ！この尾張の支配者の名を知らぬとは言わせぬぞ！」

「名前ぐらい知^しつてゐるわよ。さつき信長から聞いたもん」

「名前ぐらい、だと……？」

坂井の頬が引きつる。

「でも、だからどうしたつていうのよ。あんたが坂井さん家の誰それでもあたしには関係ないし？迷惑かけられる理由にはなんないし。恨みがあるんだつたら直接信長にやんなさいよ。こいつ、何にもダメージ受けてないじゃない。このへボ！」

「か、格式ある坂井家をなんだと思^{おも}つてゐるのだ、貴様」

「だから、名前しか知らないつて言^いつてゐるでしょ。ただ単に『坂井』つて名乗^{な乗}つてゐる家だつてだけじゃない。あんたがその家に生まれたのなんか唯の偶然よ。あたしがあたしの両親の間に偶然生まれたようにね。それなのに、これまで御先祖様が築^き上げたその格式とやらの上で胡坐^こかいてゐるだけのあんたが偉^偉そうにするつてどうなの？恥^ちずかしいの？」

「………っつ小娘！」

「はいはい。小娘でもね、知^しつてゐる事はあるのよ。折角だから教えてあげる」

そこで蝶夏はにやつと笑^{わら}つた。

「人間つてね、本当の事言^いわれると怒^{おこ}るのよ。だから、あたしが言

つてる一から十までの事全部に怒ってるあんたは、その一から十まで全部が真実だって公表しているようなものね。あゝ恥ずかしい」怒りに震える男が血走った目で蝶夏を睨み付ける。しかし、蝶夏は恐れてなどいなかった。

背後の信行を含む複数の視線は呆気に取られたものだったが、傍らからの視線は明らかに面白がっている。それで少し気持ちが軽くなる。

「それに、さつきからあんたは尾張の支配がどうか言ってるけどね、ここを見なさいよ。あんたが本当にきちんと国を治めてたんなら、ここはこんなことにならなかったし、女の人も子どもも泣かずに済んだのよ？わかつてるの？」

「なんだと？」

少し表情を改めた蝶夏に、坂井も怪訝な表情を浮かべた。

「あんたがしつかりしていれば、ここでいくさなんか、する必要なかったんじゃないのって言ってるのよ」

蝶夏の台詞に、今度は坂井がその顔に嘲笑を乗せる。

「何を言うかと思えば、不穩の芽は早いうちに摘まねばなるまい」不穩の芽とは、信長のことであろう。彼の父親である信秀は、その武力と財力によって守護代の地位を得ていた。同時期からその権力を高めようと画策していた坂井家にとっては最も邪魔な存在であった。信秀が死に、まだ若い信長が当主の座に着いた今こそがこの家を権力の中枢から遠ざける絶好の機会と坂井大膳は考えていた。

細かな内部事情など知らない蝶夏は、先程味わった行き場の無い感情をそのままぶつけた。

「もう一つ教えてあげる。あたしにとって良い国っていうのは、豊かで平和な国よ。ここには、そんなのないじゃない」

「お前は清洲城を知らんのだな。この辺りでは最も規模が大きく、立派な城だぞ」

来る途中で見た民衆の暮らしを思い出す蝶夏とは対照的に、己の住まう城について誇らしげに坂井は言う。

蝶夏は唇を噛んだ。

「城一個豪華だからって何だって言うの？あんだ、自分が、誰が作ったものを食べて、誰が作った物を着て、誰が作った家に住んでるのか、考えたことある？その人たちの暮らしについて、考えたことある？」

「民は儂に奉仕する為に居る。そんな瑣末な事に構ってなどいられるか」

坂井の話の通じなさに、蝶夏は一瞬言葉を失った。けれど、少し合点がいった。

「だからあんたは勝てないのよ。そんな根性の人間が何度立ち向かってこようと、信長に勝てるわけなんかない！」

「ならばその男ならこの地を治めるに相応しいとお前は言うのか！？」

唾を撒き散らして叫ぶ坂井に、蝶夏は「汚なっ」と、一步下がる。実際に飛んできた訳ではないが、気分的にそんな感じだった。

だが怯んだのは一瞬だ。すぐに顔を上げて答えを返す。

「相応しいとかなんとか、知る訳ないでしょ！一昨日会ったばかりだよ！」

「ん、なっ？！」

肯定の返事をするとはかり思っていたのは、坂井だけでは無く蝶夏の背後の人間たちもそうだったようだ。驚きの声は複数だった。

「ではなぜ、織田の肩を持つ?!」

「重いから持てないわよ！あんな大男！」

「??????」

蝶夏の勘違いをした返答に坂井が疑問符に塗れた顔をする。

「でもねえ、あの子たちは笑ってたのよ！」

ここに来る途中に出会った村の子どもたちの顔が蝶夏の頭を過ぎる。

笑い声を上げて、村中を駆け回っていた。兄弟喧嘩をしたりしていた。妖怪の子孫だって混じって遊んでいた。

自分たちの領主が戦をしていることなんて、知らないのかもしれない。だが、親はその戦に対する不安を子どもたちに見せてはいないのだ。だからこそ、あの子達は屈託無く笑っていられるのだろう。逆に、信長の領地を抜ければ、疲れ果てた人の顔が目立った。子どもの姿は余り無く、偶に見かけても、騎馬まれしている人間と見るや走って逃げてしまった。

「子どもを真つ当に育てられないようなところに未来なんか無いわよ！子どもと、畑と、建物とか、そういうの見ればすぐにわかるじゃない。どっちがマシなことやってるかなんて。あんたみたいな馬鹿のところで働いている人たちに心の底から同情するわ！」

「小娘があ！」

驚嘆と湧き上がる怒りに顔を朱に染めた坂井が蝶夏に迫る。だが、その首を信長の刃が薙ないだ。

「ぎゃっ」

短い悲鳴を残して坂井の姿が掻き消える。

刃の風圧で蝶夏の髪が乱された。

「わ、わわっ」

慌てて髪を押さえようと右手を添えるが、足元がふらついた。

蝶夏よりも長い腕が蝶夏の背中に回り、支えられる。

「お前、生霊相手によくやるな」

「誰が相手だろうとあたしは言いたいことを我慢するなんてイ・ヤッ！」

するりと信長の腕から逃れる。

先程まで凄まじい痛みを放っていた頭はすっかり元の通りだ。組んだ腕をぐつと天に突き出して、蝶夏は体を伸ばした。

「あー。すっきりした！やっぱりあたしの舌鋒鈍ぜっぽうってたんだ。あのぐらいかまさないと調子出ないんだなあ……」

くるりと振り向けば、信長を除く周囲の男共は何とも言えない顔でこちらを見ている。

なによ、何か文句ある？

むっとした蝶夏は腰に手を当てて、彼らを睨みつけてやる。

「なんて言うか、貴女は規格外ですね」

信行が戸惑いがちに言った。

蝶夏は首を傾げた。

「規格の中にいるって楽しい？あたしはそんなのお断り」

「ははあ。さすが、兄上が傍に置かれるだけありますね」

「やらんぞ」

真顔で信長が言えば、信行は苦笑を返す。

「兄上のもとのわかりきっているのに手を出すほど、私は愚かでは
ありませんよ」

蝶夏は憤慨した。

「誰がものだ、誰が!!」

しかしこの兄弟、蝶夏の訴えに耳を貸さない。

「それにしても、また坂井殿が生霊で現れたら面倒ですね那古野城
内が混乱しかねないでしょう」

弟の方が思案げに言う。

無視されて怒り心頭の蝶夏もその言葉に反応を返した。

「来ないよ。あいつは、信長のところに直接来たりはしないと思う
よ。一人では、ね」

「どういうことです？」

蝶夏の台詞に信行が疑問を差し挟む。信長は傍観だ。

「だってあいつ、信長のこと本当は怖いんだもん」

あっさりと蝶夏は答えた。

二十五、褒められているはずなのにそう思えない

「だってあいつ、信長のこと本当は怖いんだもん」

あつさりと蝶夏は答えた。

「だから、叩き潰したい。でも、自分でやっても勝てないってわかってるから、他の手段を使ってるんでしょ。多分」

実は、似たような例が蝶夏の直ぐ傍であった。

バスケ部のキャプテンと副キャプテンだ。

キャプテンは、自分よりも実力も人望も上の副キャプテンを妬^{ねた}んでいた。いつかキャプテンの座を奪われるのではないかと怯えてもいた。

そうして、キャプテンとその取り巻きによるイジメが始まった。

もちろん教師に気づかせるような真似などしない。

蝶夏がそれを知ることになったのは只の偶然だ。掃除の時間もうに終わったところにゴミ捨て場に行つて、イジメの現場にたまたま遭遇したのだ。

彼女の姿を見ると、キャプテン側は無言で立ち去った。

制服が乱れたまま座り込んでいた副キャプテンはゆっくりと立ち上がり、蝶夏に背を向けた。特に言葉はない。

でも、蝶夏は一言だけ彼に声を掛けた。

「ねえ、これだけされててどうするかはあんたの勝手だけど、もう少し立場をはつきりさせてあげたら？これじゃあ、イジメてる方も辛いんじゃない？」

副キャプテンのイジメへの反応は、顔を俯^{うつむ}けてただ黙って仕打ちに耐えるというものだった。抗うでも、逃げるでもないのだ。これは、キャプテン側に見れば無視されている、相手にされていないととれるだろう。

蝶夏の言葉に、副キャプテンは、はっと表情を変えた。

しばらく彼女を見ていたが、やはり何も言わず立ち去った。

蝶夏はゴミを捨てる時、ちょっと荒れた。

教室に戻ると、ひよりに「すっごい変な顔！」と言われて笑われるくらいだった。

その後、副キャプテンは転校という手段を取った。

ひよりの大笑いと台詞を思い出して、蝶夏は少し顔をさすった。

信長の大きな手がその上から蝶夏の手を押さえる。

「再び仕掛けて来る事は無いと思うか？」

「まさかっ」

そんな訳はないと、蝶夏は笑い出しながら否定する。

信長と例の副キャプテンは大違いだ。向かってくる敵は叩き潰す、くらいこの男は言いそうだ。そして、それに相対している男も生霊になって現れるくらいだ。そうそう諦めないだろう。

「方法なんか知ったこっちゃないけど、あんだだけ執念深そうなんだから、色々やってくるんじゃない？」

「だろうな」

薄く笑いながら信長は蝶夏を見下ろして言った。

そうして手を離す。よくわからない行動に首を傾げながら、蝶夏も手を下ろした。

それを穏やかに眺めていた信行は、少し屈んで蝶夏の投げ捨てた被衣を拾う。軽く叩いて埃を払うと蝶夏に差し出した。

「蝶夏殿。近いうちに那古野城に伺うつもりです。その時にまたお話できると嬉しいです」

礼を言つて被衣を受け取った蝶夏は、曖昧に頷きながらも信行に告げた。

「うーん。出来れば『殿』も『様』もつけないで欲しいなあ。あ、あと、敬語禁止！」

「ですが……」

「折角同い年なんだし、ね」

信行の視線が蝶夏の傍らに立つ信長に移る。無言の会話があった後、弟の方だけが口を開いた。

「わかった。そうするよ」

そう言つて爽やかに笑つた。

今度は信長に向き直り、丁寧に一礼した。

「では、兄上。今日はこの辺で失礼させていただきます。じっくりお話を伺いたいで、一両日中には先触れの文を送らせて頂きます」

先触れの文とは、訪問先にあらかじめ訪問の日時を知らせておく手紙である。これを一日、二日以内に出すと言っているのだ。

「好きにしる」

やはり素っ気無く信長は言つた。

再び一礼すると、信行は二人の供と立ち去つた。

その背中を眺めていた蝶夏は、顎に手を当てて言つた。

「見事にブラコンだね」

「なんだそれは」

尋ねてくる信長を見上げて、蝶夏は言い方を考えた。

「お兄ちゃん、大好きつてこと」

兄の眉間に深い皺が寄つた。

ざくざくと音を立てながら、勝三郎が方輔を連れて近づいてきた。
「信行様のあれは凄いいよ」。あんたは犬ですか？つて偶に聞きたくなつちやうんだよね、僕なんかは」

へらへらと笑つて言う。決して主君の弟にしている態度では無い。
そんな男に咎める様な視線を送っていた方輔は、蝶夏に向き合つと、心配そうに声を掛けてきた。

「蝶夏様、お加減は如何ですか？」

「ん？だいじよぶ、だいじよぶ。あの半透明の消えたらすつかり良くなつちやつた」

「それは良かったです」

その時、長秀が戻つてきた。

下馬した彼はすぐに信長の元に寄り、膝を付く。

「詰め所の方は、恙無くご指示通りに事を運んでおりました」

「そうか。ご苦労だつた」

信長の旁いに、長秀は一礼した後立ち上がる。

しかし、脇の方でにやにやと笑っている勝三郎に気付き、怪訝な顔をした。

「なんだ？」

「いや、すごい惜しかったなあ、と思って」

「……何かあったのか」

長秀がさつと表情を改める。けれど、勝三郎の方は相変わらず緊張感の無い笑みを浮かべていた。

「蝶夏殿がねえ……」

その瞬間、長秀が蝶夏の方を見た。「何かしでかしたのか」と言う咎めるような雰囲気があった。

被衣を被り直していた蝶夏はその影でむっ、と唇を尖らせた。

「素晴らしい啖呵たんかを切ったんだよ。生霊の坂井大膳相手にね。それを見逃しちゃって、もったいないなあって思ってた」

多分、勝三郎は褒めている。

「生霊の坂井大膳だと？」

確認するように、長秀が信長を見る。信長は、彼に頷いて見せた。

「この娘が、被ったのですか？」

「いや。こいつは言いたい事を言っただけだ。俺が奴の首を刎はねた」

「……そうでしたか。馳はせ参さんじるのが遅れ、申し訳ありません」

神妙な顔で謝罪する長秀にも、信長は頷くだけだ。

そこで蝶夏は疑問を抱いた。

「そうだ。ねえ。あたしが投げた石はあいつに当たんなかったのに、なんで信長の刀はあいつのHPを下げ、とと、攻撃が効いてたの？」

聞かれた方は、自分の腰の刀に手を当てて答えた。

「これは、破魔はまの力を持っているからだ」

「破魔？」

「魔を破る。つまり、人ならぬ者にも影響を及ぼすことが出来るのだということだ」

「ふうん。……あ、あのさ……」

言いよどむ蝶夏に信長が首を傾げる。

「あの人、死んじゃってたりしない、よね？」

肉体では無いからか、信長に斬られても坂井大膳が傷ついたという意識は薄かった。しかし今更ながら蝶夏は気になっていた。

「靈魂を斬っただけだからな。肉体との繋がりを斬っていれば死ぬだろうが、そこまではこの刀では出来ん。但し、暫く寝込ひんむぐらいの影響はあるだろうな」

「そ、そっか」

蝶夏は少し安堵していた。

俯いてほっと息をついた彼女は、自分を見つめる信長の瞳が一瞬冷たい光を宿したことに気付きはしなかった。

「では、そろそろ戻りましょうか」

長秀の言葉に、蝶夏から視線を外した信長は同意した。

二十六、どんなときでも前向きに

そう遠くは無い道のりを、四頭の馬は軽い駆け足で進む。

蝶夏は再び信長の前に横座りで収まっていた。

行きよりはまあ、大分この姿勢に慣れてはいた。しかしただ黙って座っているのも、どうにも居心地が悪い。

彼女は、戦場見学からこっち、考えていたことを信長に打ち明けることにした。幸い、そんなに揺れないから舌を噛む危険も少ないだろう。

手綱を握る信長を見上げ、口を開いた。

「ねえ」

「なんだ」

返答は早かった。一瞬こちらをちらりと見るが、視線はすぐに前方へと戻る。

さすがの蝶夏もこれに文句をつけようとは思わない。脇見運転をされては、たまった物ではない。

「考えてみたんだけどね」

「何を」

「今後のことよ!」

何とも訝しげな声で返事が返る。

「……今後?」

「そう。あたしだっていつまでもただ飯食らいでいるつもりもないもん。家に帰る方法が判るまでは、何とか稼いで生きてかなくっちゃ」

しばしの沈黙の後、信長は急に重く感じ始めた口を動かした。蝶夏のポジティブさが少し忌々しい。

「ここで一人で生きていくことはお前には出来んと思ひ知らせるつもりで、俺はお前を連れて来たが、まだ良くわかっていないようだな」

「ああ、それね。あたしだってそのくらい思ったよ」

軽い返事に思わず舌打ちしそうになって、信長は堪えた。

「だから、不本意だけど、信長のところでお世話にはなるつもりと、言う訳で、仕事ちよーだい」

「……何だと？」

蝶夏は真摯な瞳で信長を見上げた。顎くらいしか見えないが、彼の眉間に深い皺が寄っているのは明白だ。

「家事は大体できるから、洗濯係でも掃除係でもいいよ。あつても、台所はダメ！」

「何かあるのか？」

「あたしの作ったものはみんな、……下剤になるらしいから」
「……………」

信長は沈黙した。

「おんなじ材料を使って、同じ料理を作っても、何故かあたしのだけおかしいのよ。原因は不明。ついでに言つと、全く作為なし！」

「……お前、『甘露』^{かんろ}を知っているか？」

突然、信長は話の流れにそぐわない質問して来た。

蝶夏は瞬いた後、首を振る。

「うっん。もしかして、甘露煮のこと？ 魚とか、金柑とかの」

「違う。知らんならいい」

そのまま黙ってしまう。

「で、仕事、くれるの？ くないの？」

「やらんと言われたらどうする気だ」

「そうだなあ。家訓に反しちゃうから、何とかしないとイケないんだけど……」

「どんな家訓だ」

今度は呆れた声が出る。

「『働かざる者食うべからず』よ。まあ、た、……」

そこで、姓を名乗るなど言われたことを思い出す。『壁に耳あり障子に目あり』だ（今は屋外だが）。誰が聞いているかわからない、と蝶夏は信長の方に身を寄せた。上半身を伸ばして彼の耳元に囁く。

と言つても届かないから顎の辺りからになったが。

「これは、橘家の家訓というよりお母さんの座右の銘なんだけどね」
「変わった母親だな」

信長の口元が自然と満足気に歪む。

「失礼な！お母さんは儉約家で、現実家なだけだよ！」

体を元の位置に戻して抗議する蝶夏を見下ろすと、信長は結論を下した。

「取り合えずお前はこちらの文字の読み書きを習得しろ。仕事をするにしてもそれが出来なくては話にならん」

義務教育など無いこの時代。那古野城で働く下女の殆どは読み書きなど出来ないだろう。しかしそれを知らない蝶夏はあっさり信長に丸め込まれてしまった。

「そっか。そうだよね。じゃあ、働くのはそれからにする。働いてない間の食事代なんかは利子をつけないでおいでくれると嬉しいんだけど……」

ちよつと虫が良すぎるかと思ひながらも蝶夏は頼んでみた。

「わかつたわかつた」

そう言つて、信長は手綱から離れた手を軽く振つた。

蝶夏は「良かった」と安堵したが、その仕草が、長秀に幼名を呼ばないで欲しいと頼まれた時と同じ対応だと言つことには思い至らなかった。詰まるところ、この時の信長は、全く蝶夏の言葉を受け入れていなかった、と言うことだ。

夕刻、那古野城に帰り着くと、茅乃が笑顔で出迎えてくれた。

長秀と勝三郎とはそこで別れた。

相変わらずのにこにこ顔で「まったね」と手を振る勝三郎と、慇懃無礼に目礼してきた長秀の態度の違いは実に面白かつた。

こちらにしてみれば遅めの夕食をとり終わった頃、日はすっかり落ちていた。

寝支度が整い、信長のまだ訪れない部屋で蝶夏は今夜も机に向かつていた。

彼女はすっかり油断していた。二晩を共に過ごして何も無かったのだから、今夜も何も起こらないだろうと、心の何処かで思っていたのかもしれない。

なんにしろ、すっかり忘れていたのだ。今朝、信長が言った台詞を。

……彼女が彼に、『借り』があるということ。

二十七、あばかれる夜（前書き）

多少艶っぽさのある話になっています。
苦手な方はご注意ください。

二十七、あばかれる夜

「よし、っと」

日記を書き上げた蝶夏は筆を置いた。

ふうふうと紙面に息を吹きかけ、乾いていることを確認してから冊子を閉じた。

そのまま上掛けを持って、敷布の上、定位置と化してきた廊下側の端に座る。

「……待つか、待たないか」

信長のことをだ。

「待つてあげる理由が無いか」

蝶夏はあっさり思い切った。この判断は後から思うとあまりよくなかった。なぜなら、横になって直ぐに、冷えた手に上掛けの上から肩を掴まれたからだ。

「部屋の主を差し置いて寝るとはいい度胸だな」

がばりと、蝶夏は飛び起きた。

「い、今、気配無かった、気配！」

蝶夏は敷布の上で肩膝をついた信長を指差して叫んだ。

誰も居ない部屋で横たわった次の瞬間に現れたのだ。

「ワープ!? 出来るの?」

瞬間移動だ、と蝶夏は思った。

「阿呆。気配を消して動いただけだ」

きっぱり否定された。

「ま、魔法使えるのかと思った……」

「そんなもの使えるか」

あわやファンタジーな展開かと思っていた蝶夏は胸を撫で下ろすが、信長は呆れ顔だ。しかも、二重の意味で呆れていた。

「お前、やけにあっさりとその部屋に入ったと思えば……。今朝、俺が言ったことを忘れているな?」

今朝。

美味しいお麩の味噌汁は覚えているが、他に何かあったらうか。考え込む蝶夏に信長はヒントをくれる。

蝶夏の目元を人差し指でとんとんと叩く。

蝶夏、これは貸しだ。

信長の声が蘇る。

ちゃんと返して貰うぞ。とも。

「……………」

思い出した蝶夏は身の危険を感じた。やばい、まずい、と顔に思い切り出ていた。

さつと後ずさるうとするが、もはや遅かった。目元を叩いていた指が蝶夏の首の後ろに回る。反対の腕が蝶夏の腰を掬い上げ、引き寄せる。

信長の顔が目前に迫ったかと思えば、蝶夏は胡坐をかいた信長の膝の上に座って、抱え込まれていた。

「う、ええええええええええ??」

蝶夏は混乱して奇声を上げた。

そんな少女の様子を喉の奥で笑いながら、信長は眺めている。

「安心しろ。今回は気絶するほど奪ったりはしない」

全然安心できない。

「あんたへの、その辺の信用は皆無！かーいーむー!!」

自由になる両手で彼の肩と胸を押し返す。

しかし、首に回された腕のせいで距離は全く縮まらない。

むしろ引き寄せられている。

「なにせ、危険人物第一号だしな？」

からかう様な声が首筋を撫ぜる。

びくりと体を震わせた蝶夏の耳朶に熱いものが這う。

「ひうつ……?!」

ひんやりとした手が首筋にあるせいで、しっとりとした感触のその熱はやけに熱く感じる。

次の瞬間、硬いものが突き刺さるのを感じた。

「……………いつつう」

思わず目を閉じた蝶夏の耳に、吐息と静かな水音が響く。

信長の牙が蝶夏の耳朵を穿ち、血を啜っているのだ。

首筋と違つて、耳の血管から大量の出血が起こることはあまり無い。だからなのか、信長の舌は執拗に蝶夏の耳を這う。自分がつけた傷跡を探る様に熱い舌が蠢く。

「ん、……………んっ」

蝶夏の頬はすっかり上気し、体の芯には寒気にも似た震えが走っていた。

再びびりつとした痛みが耳に走った時、蝶夏は思わず足を上げていた。

足の行く先は丁度信長の脇腹だ。

しかし蝶夏の腰を支えていた腕があつさりと軌道を逸らしてしまう。寝巻きの裾が肌蹴^{はだ}け蝶夏の太腿が半ばまで晒^{さら}される。冷たい指先が素肌に触れた。

「うぎゃっ、やだ、触らないでよ！」

散々ミニスカートで晒しているはずなのに、着物の裾が肌蹴^{はだ}た時とは羞恥心が段違いだった。

なんで、こんなに恥ずかしいのよっ。

蝶夏は内心で叫んだ。

ようやく蝶夏の耳元から顔を離れた信長は機嫌良さそうに笑っている。

「お前は足癖が悪い。抱き上げた時もそうしていたな」

「わ、悪い?!」

未だ動揺しながら蝶夏が悲鳴のように問えば、信長は表情を改めて言う。

「あまり他の男に足を晒すな……………」

しげしげと蝶夏の足を眺めながら、何となく中途半端に台詞を止めた。

耳まで赤くした蝶夏が「見るなっ」と言いながら裾を戻そうと奮闘していると、信長はしみじみと呟いた。

「お前、胸の方は良く育っているのに、色気が足りんな」

「なっ……!!? なん!!?!?!!」

何で知っている、と混乱のあまり聞けない蝶夏に信長はしれつと答える。

「あれだけ何度も抱えていて、気付かない方が妙だろう」

「気付いても言わないもんでしょ!」

怒りを露わにする蝶夏に信長は意外そうに言う。

「何だ、気にしていたのか。色気が無い方か? 胸の方か?」

「この、馬鹿っ!」

着痩せするタイプの為、蝶夏は胸のサイズを指摘されたことは無いが、実はDカップだ。女の魅力は胸と足(ヒップは除外)だと思いたい蝶夏としては、密かに自慢のサイズだった。

それなのに、自慢の胸とセットで色気が無いことを指摘されたのだ。その衝撃たるや、かなり大きかった。

涙目になりながら信長への攻撃手段を求めた。

「何も泣くことは無いだろう」

胼胝たこが出来ているのか、細い癬かぶにこつこつした指が再び蝶夏の尻に添えられる。

夜目の効く信長の目には蝶夏の赤く染まった頬も目尻に浮かぶ涙も全て見えていた。

「うるさいっ。乙女心は繊細なの!」

彼への攻撃を諦めた蝶夏はぺちりと信長の手を払いのけた。

「だいたい、こんな目立つところに傷つけるなんて! ピアスホールでも開ける気なの?!」

そう言っ自分の耳に触れて、ぴたりと動きを止めた。

「あ、あれ? あれ?」

何度も触れて確かめるがすべらかな肌の感触しかない。確かに信長の牙が突き刺さったはずの場所に傷跡が無いのだ。

「か、鏡……」

「この部屋には無いぞ」

辺りを見回す蝶夏に信長が言う。

そして、傍らに置いてあった愛刀を手にとると、すらりと半身程抜き放った。もちろん蝶夏を抱いたままだ。

「わっ。急に武器とか出さないでよ。びっくりするなあ」

刃を前にしても緊張感の沸かない蝶夏に「映るぞ」と刀身を示す。なにせ薄暗い為、蝶夏は顔を鈍く光る刃によく近づけた。

「あっほんとだ。映る」

顔を横向けて耳を映す。やはり傷跡は無さそうだ。

自分に背中を向けて刀身に見入っている蝶夏に信長は愉快そうに言う。

「俺が舐めたからだ。どうも傷の回復を促進したり腫れを引かせたりするように出来ているらしい。便利なものだ」

「へえ……。犯罪の隠蔽にぴったりだね。サイテー」

蝶夏の目に軽蔑の色が浮かぶ。うつすらと刀身に浮かぶ男の姿を睨みつける。

しかし信長は特に何も言わない。

少しくらい反論してくると思った蝶夏は、ふと自分の言葉を反芻した。

犯罪隠蔽……。

「あっ」

ようやく思い至って自分の首筋に手をやった。ぺたぺたと上から下まで撫でてみるが、傷跡の感触など無かった。

「本当に今思い出したのか……。鈍いな」

「ぬ、ぐう……」

言い返す言葉も無くうなだれる蝶夏に信長は追い打ちを掛ける。

「いや、鈍いんじゃないって鳥頭なのか」

確かに蝶夏は大抵の遺恨は次の日まで残さない。

大らかとか心が広いとか言い様は色々あるが、要するに忘れっぱ

くて怒りが長続きしないのだ。

これを称して、親友のひよりは「鳥頭」と呼んでいた。
それをここでも言われるとは……………。

蝶夏はかなり凹んだ。

「うううう」

呻きながら涙の滲んだ瞳を手の甲で擦った。

あ。あんまり擦ると腫れちゃうな、とそう思った時、今朝全く瞼が腫れていなかったことを思い出した。

ま、さ、か。

「な、ななな舐めたのおつ？まぶた！！」

刀を鞘に納めていた信長が目を細める。

「それも今頃気づくか」

蝶夏はもはやその台詞に構ってなどいらなかった。

「ひえええええええ」

寝間着の袖で目の周りを擦っていた。

それを見た信長のこめかみがひきつる。

「親切でやってやったのに、いい態度だな」

「貸しだの借りだの言ってたやつがどの口で親切語るのよ！」

激昂する蝶夏を宥めるように信長はそのからだに腕を回す。

「あまり俺を怒らせるなよ」

低く言い放つその声と、体に回った腕は、蝶夏にとって嫌がらせ以外の何者でもない。

「こんの、馬鹿！」

放せー、放せーと蝶夏はじたばた暴れるが、大した効果は無い。
肘で信長の肩の辺りを押しながら身を放そうともがく。

「大体、さっきので借り、返したでしょー！もう、寝る！」

「それもそうだな」

そう言つや、彼はあっさり蝶夏を解放した。
その場で横になり、目を閉じてしまった。

「……………」

何とも変わり身の早いことだ。蝶夏はあんぐり口を開けてしばらく固まっていた。

「……………寝よう」

力無く言って、飛ばされていた上掛けを引き寄せる。

しかし、敷布の脇に置かれたもう一枚の上掛けを見つけて思い切り顔をしかめた。

世話になってるから、世話になってるから、と心の中で唱えながら広げた上掛けを信長に掛けてささっと距離をとる。反応が無いことを確かめて自分も横になった。

信長に投げるように上掛けを掛けてきた後、蝶夏は某アニメキヤラ顔負けの早さで眠りに落ちた。今日は一日出ずっぱりだった疲れが出たのだろう。

沈黙していた信長は蝶夏の寝息を聞くや、ぱちりと瞳を開いた。金色の輝きが闇に滲^{にじ}む。

身を起こして、自分にかけられた上掛けを手取る。

それから背中を向けて眠る蝶夏に視線を移して困った様に笑う。

「どうしたらそんなに無防備でいられる？」

蝶夏への問いが、ぽつりとこぼれた。

二十八、男寄り集まって語るには（前書き）

現在の未成年（二十歳以下）の飲酒シーンがありますが、当時の成人（元服）に合わせていると思うてください。

二十八、男寄り集まって語るには

すっかり夜も更けると、城内に残っている者は格段に減る。

信長の供を勤めていたため、一日分の仕事が増まっていた長秀は、残ってそれを片づけていた。

「なーがひでどの」

同じく供をしていた勝三郎が銚子ちょうしと杯を持って近づいてきた。

「勤務中だぞ」

眉間に皺を刻んで言えば、「勤務時間は終了ですよ」とふざけた返事が返ってきた。

「まあ、一献」

笑みを崩さない男は、無理矢理押しつけてきた杯に酒を注ぐ。

と、周囲にいた者たちが呼んでもいないのに寄ってきた。

「お。酒か？酒だな？」

「オレにもくれ」

皆城に勤める武士たちだ。

「最初は長秀殿ですよ」

そう言って勝三郎が諫めるいさめ。

自分が飲まねば他に回らない、と生真面目に考えた長秀は一息にぐいと杯を空けた。

床に音を立てて杯を置けば、瞬く間に十数人の男たちの奪い合いになった。

勝った男は勝三郎に酒を注がせている。彼の上役だったようだ。

「ところで、今日、お前等信長様のお供をしてきたんだろう？」

敗者の一人が身を乗り出して尋ねてきた。

「はいはい。そうですよ」

信長にも乳兄弟という気安さからか割と不遜な態度を通す勝三郎も、これだけ同僚が集えば少しばかり態度を改める。

「で、どうだった？！」

「どう、とは？」

「萱津の件でしたら後ほど報告書をまとめて……」
軽く聞き返す勝三郎と堅苦しく話し出す長秀に、他の男達が焦れる。

「違う違う！信長様のお気に入りだよ！」

「見たんだろう？会ったんだろう？」

「どんな娘むすめだ？」

好奇心の固まりの様だ。

「姿は、今朝見たぞ」

隅の方に座っていた男が言えば、皆そちらを振り向く。

「被衣かすきを羽織かっていて顔は見えなんだがな」

その一言に、期待外れと顔に描いた者達が再び勝三郎と長秀に迫る。

「それで？」

「はあ。顔ですか？顔は〴〵可愛い方だとは思いますがね〴〵」

「……………」

そういつた浮ついた話が苦手な長秀は黙り込む。

「背は、割と大きい方ですねえ」

「信長様の肩くらいだったか？」

先ほど蝶夏を見かけた、と言った男が口を挟む。

「そうですね。でも、な〴〵んか、幼い感じですね。十六とか言ってたのになあ」

「それに、口の利き方や態度がなつてはいませんね」

黙っていた長秀も口を出してきた。渋面の額に右手を添える。

「あはは。あれ、面白かったね」

「面白がっている場合か。信長様が許しておいでだったから黙っていたが、斬り殺されても文句は言えぬぞ、あれでは」

「そんなに酷いのか？」

「だが、茅乃殿が可愛がられていると聞いたが？」

「ああ。姉上ですね〴〵。凄く可愛がってますよ。そのうち、目に入

れても痛くないとか言い出しそうなくらいですよ」

「茅乃殿も礼儀作法には厳しいのでは無かったか？」

「姉上はですね、多分長期計画を立てていますね」

「長期計画？」

場に居る男どもが悉く首を傾げる。

「今は許すけれど、徐々に厳しくしていくつもりですよ。姉上は、信長様の乳母だった母から薫陶くんとうを受けてますからね」

「………ああ」「……」

納得したような溜息が複数人の口から漏れた。

信長に仕えるようになってまだ二年程の長秀には、その意味がわからなかった。内心首を傾げるが、表にはおくびも出さない。

「あ。でも、胆力はかなりのものですよ」

「胆力？」

「ええ。長秀殿が詰め所に行っている間に坂井大膳の生き霊がでたんですよ」

なんとも明るく勝三郎は言つてのける。

しかし周囲も深刻には捉えない。

「余程、萱津かやつで負けたのが悔しかったのか……」

「かなり執念深い男と聞き及んでおります」

長秀と同時期に勤め始めた男が呟く。

「いやいや。その坂井がですね、もう、呪しゅを振りまいて凄かったんですよ。頭は痛いわ、目眩はするわ、吐き気もね」

呪とは、妖魔や物の怪、怨霊などが生者に対して放つ悪影響を総じて言う。蝶夏が感じた不快な症状もこれのためだった。

「信長様には効かなんだらう？」

苦笑を滲ませて年輩の男が言う。

「ああ。もう。まーったく。可哀想になっちゃいますよね」

誰が、とは言わないが。

右手を振りながら言う勝三郎に皆が笑いを漏らす。

誰も主の危機など感じていなかった。これも信用がある、と言う

のだろうか……。

「坂井の一番近くに居たのが蝶夏殿なんですがね、あの娘、なんと立ち上がって怒鳴りつけたんですよ」

「誰を？」

「坂井大膳に決まってるじゃないですか」

「呪をかけられて、それをやったのか？」

現場を見ていない長秀は、少し意外な心地で尋ねていた。

「そうですよ。いやあ。本当にあれは見物だったなあ。何せ、昔、信長様が言つてた様な事言うんだもんな。もしかしたら、あの二人、考え方とか、ものの見方とかが似ているのかもしれないね」
にこりと笑う主の乳兄弟を皆が見たが、その真意はまったくわからなかった。

長秀は彼の瞳を見つめるが、その底は知れない。やはり胡散臭い男だと、一筋縄ではいかない者だと、心に刻んだ。

二十九、課題図書は期限付きにて

翌朝、蝶夏が目覚めると信長は既に隣にはいなかった。

とりあえず、挨拶をする相手が居なければ蝶夏のあの変な挨拶は発動しない。ぱたん、と再び横になり、覚醒を待つだけだ。

「蝶夏様？」

茅乃の呼び声で飛び起きる。

「ふわっ。朝だ……」

障子を開けて茅乃に向き合う。

「おはよう。茅乃」

「はい。お早うございます。よく眠れましたか？」

「え」と

昨晚のことを蝶夏は思い出した。羞恥心と怒りがにわかに胸に沸く。

両手で顔を覆ってうなだれる。多分、赤いから。

「うっう。多分、よく眠れたと思う、よ」

唐突に様子の変わった蝶夏を見て、茅乃は「あら」と思った。何かがあったことは明白だ。今日の（茅乃の）機嫌は上登りしていく。

「それはようございました。ささ、お召し替えに向かいましょう」

真っ先に顔を洗いたがる蝶夏を引きずって茅乃は着替えを優先させた。

「今日は茜色のお着物にしてみました！」

そう言った茅乃が広げたのは暗めの色調の赤い小袖だ。緑の茎が下から伸び上がり、黄色い小さな花を咲かせる大胆な模様だ。

「茜ってこういう色なんだ」

「ええ。蝶夏様が昨日お会いした茜丸の名もここから来ております」

「目の、色？」

「あら、ご覧になりました？光の加減でそう見えるようなので、信

長様が名付けられた時は誰もが首を傾げたものでした」

どうやら茜丸の名付け親は信長らしい。

着せる方は元々慣れていたが、着せられる方も大分慣れてきて、話をしながらも着替えは進んでいった。

身支度が完了した蝶夏は食事に向かう。

部屋の前では既に方輔が座っていた。蝶夏に気付くと、居住まいを正して挨拶する。

「お早うございます。蝶夏様」

「お早う、方輔」

蝶夏が手を伸ばす前に彼は障子を開けてくれた。

中には膳が一つ置かれているだけで、信長の気配は無い。

「信長様は既に食事を済まされ、仕事に向かわれましたよ」

部屋の中を見回している蝶夏に茅乃が説明をくれる。

「あたし、寝坊した？」

時計が無いため、時間の感覚が薄いなあと思いながら尋ねると、

茅乃は首を振った。

「いいえ。信長様が無理に起こすなど仰られたのです。それに、元々信長様は朝がお早い方です。茜丸の世話も基本的にご自分でされておりますし」

別に蝶夏だつて彼が怠惰だとは思っていなかったが、それでも足りないくらいに信長は勤勉らしい。

蝶夏が食事を半ばまで平らげると、廊下をどたどたと歩く足音が聞こえた。

方輔が外から障子を開け、足音の主である信長はさつさと部屋に足を踏み入れた。

座る蝶夏の目前になると、どさどさと彼女の脇に書物を積んだ。箸を持ったままあんぐり彼を見上げる蝶夏を見下ろして言う。

「とりあえず三日以内にこれを全て読め」

理不尽な要求が、否、命令が下された。

蝶夏はぼんやりと箸を置き、一番上の一冊を手取る。表紙には

こう書かれていた。

『論語』。

「わあー。漢文だー」

抑揚の無い声で呟く。

ぱらぱらと捲^{めく}った中身は見事に漢字だらけだ。みみずののたくった様な御伽草子のかな文字よりはまだ判別がつきそうな文字がある。しかし、けして薄くは無い。さらに下にはまだまだある。

「三日なんて無理！」

こちらを見下ろす信長を振り仰いで叫ぶ。

「っていうか、むしろ、一年かけても微妙！」

言い切る蝶夏に信長は片眉を上げる。

膝について耳元に顔を寄せると、囁いた。

「それでもいいぞ。一日伸びる毎に俺の楽しみが増えるだけだ」
ひやりと冷たい指先が蝶夏の耳朶に触れる。

体を走る震えにびくりと体を揺らした蝶夏は、横目で信長を見る。彼の瞳には僅かに金の輝きが揺れ、その目と仕草で求めるものがはつきりわかってしまう。

耳朶に触れていた指先がそこを離れ、首筋へと下る。

「それとも、こちらの方が罰則に相応しいか？」

傷跡一つない、出会った日の昼と夜に牙を穿^{うが}った辺りを擦る。

内心、ひいーっと叫びながら、蝶夏は待った。反撃の機会を。

手の中で冊子が歪む。

くつくつと笑いながら信長は身を離す。

「言っておくが、冗談で済まさんぞ」

「ええいつ、せめて三日で一冊にしてよ！」

譲歩を求めて、信長に『論語』を突きつける。

冊子を持つ手が握られ、顔の前から退けられる。

「それは譲りすぎだな。五冊だ」

負けじと蝶夏も言う。

「……ん。二冊！」

「四冊だ」

「わかった、三冊！」

「いいだろう」

やったあ。勝った。

諸手を上げて喜ぼうとした蝶夏は我に返った。

「……………あれ？」

取り敢えず、手の中の内容を覗き見る。

「……………」

直ぐ下の『平家物語』を手にとってこちらも中を捲る。

「あれー？」

にやりと、信長の唇の端が上がる。

「自分で言い出したことだ。きつちりやってもらおうか」

ぶるぶると両手を震わせた蝶夏は、おもわず手に持った二冊をぼとりぼとりと床に落としていた。

「は、は、……………」

ハメられた——！！

蝶夏の後悔がたつぷり詰まった叫び声が響いた。

廊下でそれを聞いていた方輔は青い空を振り仰ぐ。

「今日も、いい天気だ…………」

三十、癒しを求めるなら

さて、ハメられた蝶夏は障子を開け放った部屋で机に向かっていた。

一度足を痺れさせてからはちまちまと体勢を変えて、再度そのような事を防いでいた。

「……………アノヤロウコノヤロウバカヤロウ」

先生役を務める方輔は、蝶夏の呟きにふと手を止めた。朝から始めて、既に一辰刻（二時間程）が過ぎている。

良く頑張っている方だと方輔は思う。囲碁を教えている時もそうだったが、この少女は興味の有る事に関する集中力は強い。だからこの『論語』の内容には興味があるのだろう。ただ、勉強嫌いが板に付いてしまっているのだ。

だが、気になる事がある。時折、対象が信長と思われる恨み節が口から漏れるのだ。自覚があるのか無いのかわからない。

「うつつ。もう駄目！煮詰まった！」

そう言って蝶夏は机に突っ伏した。

「蝶夏様、休憩しましょう」

方輔が提案すると、むくりと起き上がる。

「はい。先生！」

蝶夏は右手をすつくと伸ばして彼に向き合う。

勉強を教えてくれるのだから、彼は蝶夏の先生である。最初は断られていたが、勉強中だけは無理矢理押し切ってそう呼んでいる。そして、要望を伝える。

「心を癒されに行きたい！です」

「はあ？心を癒されに、ですか？どちらへ？」

方輔は戸惑いながら尋ねる。

場所までは深く考えていなかった蝶夏は拳を唇に当てて考えた。心の癒しといえば、子どもか小動物だよねえ。

「ねえ、方輔。信長って子どもいないの？子ども！」

「は、……はあ！？」

方輔にしてみればかなり唐突な蝶夏の質問に、彼は目を見開いて驚いた。

だが、直ぐに落ち着いて答える。

「え、ええ。まだ信長様にお子はいらっしゃいませんが……。それが、何か？」

「うーん。癒しアイテム候補が一個消えちゃったなあ。あ、家臣さんの子どもとかは？いない？」

「いえ。出仕し始めるのは十歳前後からですので、小姓の中にはそのぐらいの者もありますが、家臣の子どもを城で養育することはしておりません」

「託児所無しか。子どもは却下ね」

出来れば六歳以下がいい蝶夏は、心の中で『子ども』の欄に×印をつける。

「じゃあ、動物は？いる？」

この質問には肯定の頷きが返る。

「はい。鶏を飼っています。それから、そうですね。後は昨日、蝶夏様も行かれた厩うまやですね」

蝶夏はぴんと来た。

そのまま、勢いを付けて立ち上がる。

「茜丸だ！茜丸に会いに行こう！」

腰を浮かせた方輔の前に再び座り、正座をする。

「厩なら行ってもいいかな？駄目？」

「あまり出歩かせるなどは言われておりますが……。わかりました。茅乃殿が戻られたら私が伺って参ります」

「え。めんどくさくない？」

「いいえ、それがお役目なれば」

柔らかく微笑んで、方輔は首を緩く振った。

「そう？じゃあ、お願いしようかな。ありがとう、方輔」

蝶夏もその笑顔に笑い返した。

いつも他の人間（主に茅乃）に笑い掛けているのは脇で見ていたが、方輔が少女の笑顔を目前で見たのはこれが初めての事だった。なんと健やかに笑う方だろうか。

そう思った。

用事を済ませた茅乃が蝶夏の元に戻ってきたのは、更に一刻（三十分程）が過ぎた頃だった。

勉強を休憩して、蝶夏と方輔は詰め暮をしていたが、茅乃が戻るや中断した。

茅乃に経緯を説明して、方輔は部屋を出て行く。

「蝶夏様、茜丸にお会いしたいのですか？」

「うん。だって、癒されたいんだもん！もう漢字ばかり見ていると目が疲れちゃうし」

そう言って蝶夏は自分の眉間を揉んだ。

その様子に柔らかく目を細めた茅乃は、机に積まれた冊子の一冊を手に取る。

「それにしても、まあ。見事にご自身の蹟でのものばかりお持ちになったんですね」

茅乃の言葉に蝶夏は首を捻った。

「自身のおて？」

「ええ。こちらの書物は皆、信長様が写されたものですよ」

「写すって、まさか全部書き写したってこと?!」

驚いた蝶夏は、碁盤に向かい合っていた体を茅乃の方に向けて身を乗り出した。

茅乃は動じず頷く。

「ええ。そうですよ。これらは全て書き写したものですよ」

「手で?!」

「……………手以外でどうやって写すと言うのでしょうか?」

苦笑しながら茅乃は言う。

「あう」

その通りだ。この時代の日本に印刷技術など無いだろう。

蝶夏は一冊手に取って、頁を捲^{めく}る。

蝶夏の毛虫が千切れたような（墨を含みすぎて滲んだ為）文字とは大違いだ。

なんだあいつ。完璧人間か？

面白くない気持ちが一杯で、蝶夏は心の中で呟いた。

三十一、許しを得るための試練

「茜丸に会いたいだと？」

領地の村々から上がってきた報告書を片手に方輔の話聞いていた信長は、怪訝けげんそうに呟いた。

隣で机に向かっていた勝三郎も首を傾げる。

「あれ？蝶夏殿と茜丸って仲悪くなかった？昨日の帰りなんてぜんぜん喋ってなかったのに」

そう。茜丸の蝶夏を軽んじる態度は一日中続き、帰路などは完璧に無視状態だった。那古野城で信長に下ろされた時、蝶夏は真っ先に茜丸にお礼を言ったが、「は？礼なんて当然だろ？」的な見下した視線に蝶夏は地団駄を踏んだものだった。

「あの状況を味わっておいで、なぐんでまた会いたいと思うんだろ？」

「それが、城に子どもが居ないとなると、癒されるには動物でなくてはいけないと仰おっしゃられ……」

まさか蝶夏に問われた事を赤裸々に話す訳にもいかず、方輔は適度に誤魔化した。

「ほう？」

しかし、信長は器用に片目を細めて方輔を眺める。

特段悪い事をした訳ではなくとも、この見透かすような瞳は心臓に負担が掛かる。

方輔は背中にじわりと汗が滲むのを感じた。

「まあ、いいだろう」

信長の視線が外れ、肩の力が僅かに抜けた。

「好きにさせる。但し城外には出すな」

「はっ」

一礼をして部屋から去って行く方輔の背中から、手元の書類に關心を戻した信長に、幼馴染が声を掛ける。

「ほ」すけ君は随分忠実に蝶夏殿に仕えてるんですね。」

「あれは小姓の中でも出来の良い方だぞ」

時折手元の帳面に何事か書きつけながら、信長は答える。

「へへえ。そんな優秀な子を蝶夏殿につけちゃうなんて、我が主は一体何を考えてるんです？」

完全に仕事の手を止めて、勝三郎は問う。

常にふざけた様子を崩さないこの男が、珍しく真剣に聞いてきた口調はいつも通りだが、その瞳には答えを促す強い意志がある。

乳兄弟の何時に無い様に、信長も手を止めて顔を上げる。

しばし、時を置いて、にやりと笑う。

「いずれわかる」

「また」それ」

気が抜けたように勝三郎は机に突っ伏した。

真面目に聞いても、答えたくないかその時期では無いと判断した事には挺子でも答えない。それが信長のある種厄介な面であった。

くつくつと笑いながら、彼は言い足す。

「だが、結局どうなるかを決めるのは蝶夏と、そして俺だ」

顔だけ上げて主を見上げた勝三郎は、夏の空を射抜くように見つめるその瞳に期待めいたものを見た。

三十二、睡眠学習の事始め

夜半、蝶夏は寢室で唸^{うな}っていた。

茅乃が灯した明かりの下で、また小卓に向かっているのだ。

しかし今日は日記を書いている訳ではない。というか、そんな余裕は無い。

「し、しこうにいつていわく、……おんな？」

文章中にある『女』の文字に首を傾げる。

いや、違う読み方だったはずだと傍らの帳面を捲^{めく}る。二、三頁の辺りで目的の文字が見つかった。

「あ、『なんじ』か。でも、『なんじ』ってさんずいいらないのかな？」

呟きながらも、先に進もうとするが、いい加減目が疲れてきた。

「やつぱり暗いなあ。って言うか、これじゃあ全然進まない！」

机の端に額をつけて頭を抱えた。

「いや、思ったより進んでいるな」

背中から声が聞こえて蝶夏は飛び上がった。

振り向けば案の定、信長がいる。

「毎回毎回、なんでそういう登場のしかたすんのよ！心臓が喉の奥から『コンニチワ』って言うて出てきたらどうすんの！？ ああ、夜だから『コンバンワ』だ！」

喚く蝶夏に信長は端的に答える。

「慣れる」

そう言つて、彼女の脇から腕を伸ばした。その手は、先ほど蝶夏が捲^{めく}っていた帳面を手取る。

ぱらぱらと流し読み、蝶夏に尋ねてくる。

「なんだこれは」

蝶夏は僅^{わず}かに胸を張って答えた。

「作りかけの読み仮名表よ！」

「読み仮名？」

「あたしの知らない読み方が結構あるんだもん。だから読めない文字は片端から書いていつてるの」

「ほう。便利は便利だろうが……。効率が悪いな」

蝶夏も薄々思っていたことをあつさりと信長は言い切った。

「うつつ。あたしもちよっと思つてたんだよね。だって全然先に進めないもん。」

うっん、時間が足りない。

そう思つて再び頭を抱えた蝶夏に、声が掛かる。

「読んでやろうか？」

「え？」

顔を上げると、見上げる位置にある端正な顔がこちらを見下ろしている。少し、唇の端が上がっているだろうか。

「ええ？」

何を言い出すんだ、と蝶夏が警戒して少し身を引くと、察した信長が口を開く。

「今回は、貸しに数えないでやるぞ」

「……………どういう、風の吹き回し？」

未だ警戒を解かずに蝶夏は聞く。

帳面を机に戻した信長は、少し斜め上を見上げる。返答を考えているらしい。

「そうだな……。余りにもこちらに余裕が有り過ぎるから、といった所か」

どういう意味かわからず、蝶夏は首を傾げる。

「三日で三冊だろう。だが、一日目の今日は『論語』が終わってもない。これを余裕と言わずして何を余裕と言う？」

「つまりあたしが思いつきり不利って言いたいよね！」

「そうだ」

「はい、はい、はい。あたしは今のところ思いつきり不利ですよ！だから、使えるものは信長でも使っわよ！」

開き直った蝶夏は『論語』の冊子を信長に押し付けて、自分は上掛けを掴んで布団に横になる。

「……なんのつもりだ。寝るのか？」

「睡眠学習！」

「なんだって？」

冊子を手にしたままこちらに歩み寄る信長を見上げて、蝶夏は言う。

「寝入る時から寝ている間に、聞いたことを記憶する学習方法よ。あたしは寝る。信長はその間それを読む。完璧！」

蝶夏のすぐ横に、呆れ顔の信長が胡坐をかく。

「あ、そうだ」

がばりと蝶夏は起き上がる。

傍らの信長に視線を合わせる。

「こんな暗いのに読める？目、悪くないの？」

「夜目が効くと前に言っただろう。だから読む分には問題無い。視力のことなら、……そう言えば、下がったことが無いな」

「なに、その便利体質！」

ずるいずるいと言いながら、蝶夏は再び横になった。

ちらりと信長に視線を送れば、小さく嘆息して冊子を開いた。

よし寝るぞ、と蝶夏も瞳を閉じる。

「子、子貢に謂って曰く、『女と回とは孰れか愈れる』。対えて曰く、『賜や何ぞ敢えて回を望まん。回や一を聞いて以って十を知る。賜や一を聞いて以って二を知る』。子曰く、『如かず。吾、女に如かざるを与さん』」

蝶夏の耳に届く響きは、川の流れの様に涼やかで滞ることが無い。意味は相変わらず全くわからないが、頭に、というよりも体全体に染み入るような感覚がした。

三十三、根回し上等

翌日から二日というもの、蝶夏は信長に会うことがなかった。

朝起きれば既に仕事に出、夜は蝶夏が眠ってから戻って来ているようだ。というのも、蝶夏が小卓に置きっぱなしにしている書物に触れた痕跡があるからだ。

「まさか、本当に睡眠学習に協力してくれてるの？」

午前中の勉強を切り上げて厩うまやに向かう途中で、蝶夏は頭を悩ませていた。

「何か仰おっしゃいましたか？」

背後を歩く方輔がその独り言に反応を返す。

「うつん。ただの独り言」

少し振り返り、何でもないと首を振った。

また前を向いて歩き出す。

実は今日が『三日で三冊』の期限日なので、蝶夏は焦っていた。

ゆっくり歩いていると、頭は勝手に余計なことを考える。

こちらに来て一日目と三日目の夜を思い出して蝶夏の頬は微妙に赤く染まる。被衣かすきを深く被り直す。

ただだだめだ。こんなことを考えるとまた何にも手が着かなくなるうう。

蝶夏は頭をぶんぶんと激しく振って、足を早めた。

無心。無心で歩くのよ、蝶夏！

今日で三度目の蝶夏の不審行動に、方輔も黙って従う。

信長にハメられて三日の期限を決めていた時に同席していた彼も、薄々蝶夏の不審行動の原因は感じていた。

転ばれないといいが……。

慣れてきてはいるが、草履を履いて歩く蝶夏の足下は時々怪しい。だから、方輔は進行方向に躓つまずくようなものは無いか注意しながら彼女の後ろを小走りに行く。

と、蝶夏の足が止まった。

方輔も足を止める。

彼女はその場で近くにある高井楼たかせいろつを仰あおぎ見る。

ひらりと片腕を上げて、上にいる二人の見張り番に手を振る。

「お疲れさま」

それを見て、二人は会釈を返す。

再び歩きだした蝶夏は腕を組む。

「うーん。反応がイマイチだ」

不満げな蝶夏に、方輔は昨日からの疑問をぶつけてみた。

「一体何をなさっているのですか？」

「ん？ 挨拶」

端的に答える蝶夏に、方輔は少し肩を落とす。

「いえ、それはわかります。何故なにゆえ、見張り番にまで声を掛けるのか
と思ったのです」

「それはねー。根回しよ！」

立ち止まり、振り向いた蝶夏は、目前に立つ少年に人差し指を立てて力説した。

「あたし、あの井楼に登ってみたいの。でも、あの人たちはお仕事を
している訳だから、邪魔しちや駄目だと思うのよ！だから、邪魔
にならないように、親しくなっておいて、お邪魔しようと思ってる
の。……あれ、結局邪魔はするのなあ」

どうしよう、根本の計画に穴があった。と蝶夏は立てたままだっ
た人差し指で額を突いた。

「そのようなことなさらずとも、信長様に頼んでみられてはいいか
ですか？」

方輔の言葉に蝶夏は顔を顰しかめる。

「だって、それじゃあ、借り作っちゃうじゃない？あたし、これ以
上作りたくないし」

「借りだなどと……」

「言う。絶対言う。それで、また……」

結局、想像の行き着く先は先程と同じで、蝶夏の頬が熱くなる。

「も、もう、この話はいいよ！早く既行って、早く戻って勉強しなきゃー！」

「は、はい」

被衣を捲きつけるようにして顔を隠した蝶夏は、止めた足をせかせか動かして歩き出した。方輔も素直に従う。

大して時間も掛からずに厩につき、蝶夏は入り口を通り抜ける。

真っ直ぐに茜丸の居る小部屋に向かう。

「茜丸！来たよ」

覗きこむと、もぬけの殻だった。

「あれ？」

「いらつしゃいませんか？」

後ろから方輔も覗き込む。

「やあ、お嬢ちゃん。今日も来たのかい？」

二人の背後から人が近寄って来て、そう言った。

厩の管理を任されている六介という小男だ。皺だらけの顔のこの男は、五十代程で、馬の扱いに掛けては随一の腕を持っているらしい。気難しく、信長以外に手も触れさせない茜丸が、唯一この六介にだけは世話を許すと言う。

「あ。おはよう。茜丸どうしたの？」

蝶夏が聞けば、六介は「おや知らんのかい」と意外そんな顔をした。

「今日は朝から信長様と出掛けとるぞ？」

「へえ。今日出掛けてるんだ。方輔知ってた？」

首を傾げて傍らの少年に聞けば、彼は首を振った。

「いいえ。恐らく急に決まったのでしょね。他の小姓たちも何も言っていなかったのだ」

「おお。そうじゃ、そうじゃ。ばたばたとしたしなあ」

「ってことは、信長が帰ってくるまで茜丸いないのか……」

蝶夏はがっくりと肩を落とす。これで午前中の癒しタイムは無く

なつてしまった。

「昼には戻るといつとつたから、午後に来た時にはおと思うぞ」
励ますように六介が教えてくれる。

蝶夏は昨日、茜丸に会いに午前と午後に厩を訪れていた。もちろん今日もそのつもりだ。

「じゃあ、午後にまた出直してくるね!」

嬉しげに笑って蝶夏は踵を返す。

隣の小部屋に居た葦毛あしけの馬が顔を出しているものだから、その鼻面を少し撫でてやった。

三十四、馬の感情表現とはこれ如何に

午後になって、再び蝶夏は方輔と共に厩うまやへと向かった。

近づいていくと、何か騒がしい。厩番の男達おこが数人、馬場うまば（乗馬などの訓練場）に出ている。鋭い嘶いななきと、蹄ひづめが地面叩く音が響く。

六介の背中を見つけた蝶夏が近づくと、彼は傍の若者に指示を飛ばしていた。

「すぐに信長様をお呼びしろ、あれはもう信長様で無いと収まらないぞ！」

指示を受けた若者が馬場を避けながら走り去った。

「何？あれ、茜丸？」

蝶夏が尋ねると、六介は弾かれた様に振り向いた。

その奥では茜丸と思しき巨軀が前足を振り上げては地面に叩きつけている。土ぼこりが立って視界が悪いが、もう一頭馬がいるようだ。

「お嬢ちゃん。悪いが下がっていてくれないか？茜丸の気が立つて酷いんじゃない」

蝶夏は目を凝らす。

茜丸の蹄が、もう一頭の馬の脇腹を擦るのが見えた。やられた葦毛の馬は傷つけられた痛みいたみに膝を折り、悲しげに嘶く。

「なにあれ、一方的じゃない」

「並みの馬じゃ茜丸の力にはかなわんよ」

「あの子が悪い事したっての？」

「いやいや。戻ってきた茜丸を厩に戻したら、急に不機嫌になっなてなあ。儂の手を振り解いて、あやつを追い掛け回したんじゃないよ」

「……………」

蝶夏はそれを聞いて腹の中がムカムカした。

「それって、つまり弱い者イジメじゃないの」

低く言えば、六介が肯定した。

「ははあ。確かにそうなるの」

「……蝶夏様？」

方輔が問い掛けた時には蝶夏はもう動き出していた。

一方、六介の使いを名乗る若者に呼び出された信長は、直ぐに馬場に向かっていた。

厩に茜丸を戻して間もなかった為、僅かな時間で戻れた。

そこで、少女が土埃の舞う馬場の柵に手を乗せている姿が見えた。
「あれえ。蝶夏殿、何して……」

信長の背後でその存在に気付いた勝三郎が声を漏らすと、少女は腰よりは低い高さの柵をひらりと乗り越えた。勢いで飛ばされた被衣がゆっくりと地に落ちる。

その背後で方輔が何事か叫んでいる。少女を止めようとしている事は確かだ。

柵を乗り越えて馬場に降り立った蝶夏は、深く息を吸った。

そうして、怒鳴る。

「いい加減にしなさい、茜丸！！」

再び足を振り上げようとしていた茜丸は赤い瞳を蝶夏に向ける。
膝について頂垂うなだれていた葦毛の馬も大声に驚いて彼女を見ていた。

「弱い者イジメなんて、恥ずかしい真似してんじゃないわよ！」

苛立たしさと、少しの失望を込めて蝶夏は茜丸を叱り飛ばす。

「ほらっ」

手を伸ばせば、茜丸はこちらをじっと見つめてくる。

かちりとぶつかった赤い瞳は、不満と苛立ちのような色を浮かべている。

その意味のわからない蝶夏は視線を逸らさずに、僅かに首を傾げる。

ゆつくりと茜丸は歩を進め、やがて蝶夏の目前までやってきて、彼女の伸ばした手の平に鼻先を擦りつけた。

その瞳は、常に蝶夏に向けられている。

「どうしたって言うのよ。あんた、こんな事しない子でしょ？」

昨日の午後に彼の元を訪れた時、厩の馬達は皆馬場に出されて運動をしていた。

他の馬達が群れている中、茜丸は一頭、黙々と運動していた。

その躍動する身体が綺麗だと思ったから、「あんた、凄く綺麗なんだね」と、珍しく自分から近寄ってきた茜丸にそう言った。すると彼はなんと、蝶夏の胸の辺りに顔を押し付けて甘えて見せたのだ。その場にいた者達は大層驚いていたが、蝶夏としてはお土産に持っていた蜜柑の効果だと思っていたりする……。

件の蜜柑を茜丸に食べさせていると、他の馬も寄ってきた。茜丸はその時、物凄く迷惑そうな顔をしていたが、決して追い払ったりはしなかった。まあ、蜜柑は食べきってしまったけれど。

むやみやたらに乱暴に振舞う訳では無いと知った為に、蝶夏は今の茜丸の行動が解せなかった。

「茜丸？」

擦り付けられた鼻先から、鼻筋を撫で上げると、昨日の様に胸元に顔を押し付けてくる。

両手で抱えるようにして顔を撫でていると、ぐいぐいと押された。蝶夏はよろけて数歩後ろに下がった。

すると、とんと背中が何かに当たった。

驚いた蝶夏が首を逸らして見上げると、頭上に太陽の光を背負った信長がいた。

彼は、茜丸の顔に添えられていた蝶夏の左腕を掴むと、吊り上げるようにして、力任せに蝶夏を自分に向き合わせた。

「……………いった」

その腕の強さに蝶夏は小さい悲鳴を漏らして、再び彼を見上げた。
「この阿呆がっ」

怒声が馬場に響いた。

茜丸が数歩後退して踏鞴たたらを踏む。

蝶夏は、ぽかんと口を開けた。

「気を荒立てた馬を相手にして何を考えている！茜丸の一踏みでお前など死に至ってもおかしくないのだぞ！！」

蝶夏は大きく見開いた瞳で、信長を見つめて、それから傍らの馬を見上げた。

……あの身体が押し掛かってきたら、あたし、ぺっちゃんこだ。言われて初めてそんな危険性に気付いた。

信長に視線を戻せば、その両眼は未だ怒りに燃えている。

「わ……………」

蝶夏の呟きに、彼は目を眇すがめる。

「……悪かったわよ」

ぽつりと、蝶夏の口から謝罪の言葉が零れ落ちていた。

今度は信長の方が目を見開いた。

その仕草が極端に「予想外だ」と言っているものだから、蝶夏は唇を尖らせる。

「あたしだって、反省ぐらいするわよ。い、今頃怖いことをしたんだって、思いはじめてるわよ！」

バツが悪くて、蝶夏は俯く。

握っている細い腕が、小刻みに震えている事に信長は気付いた。嘆息を一つついて、持ち上げていた腕を握ったまま下ろす。

「それで、お前は何故そんなに機嫌が悪かったんだ」

茜丸に向き合えば、まだ不満そうにしているのがわかった。

「それについては儂から説明させて頂いても宜しいですかな？」

唐突に掛けられた声に、蝶夏はびくりと身体を揺らした。

蝶夏が来た方角から六介が近づいてきていた。

信長が先を促すように顎を持ち上げる。

「お嬢さん、今日の午前中に既に葦毛の馬に触ったろう？」

「え。あたし？……多分、触ったかな。茜丸の隣にいた子だったと

思うけど」

「それがあそこでひっくり返っている馬でしてね」
そう言って六介は馬場の端を指差す。

先程まで茜丸に散々な目に合わされていた馬が地面に打ち伏せていた。

「ありやあ、信長様の怒気に当てられて気を失つとるわ」

「ええ？そんな、まさか」

「いやいや、馬は繊細だからの。ましてあやつは茜丸に肝を潰されかけ取ったしの」

蝶夏は元凶と言える一人と一頭を代わる代わる眺めた。

「で、結局、なんでそれで茜丸が不機嫌になるの？」

話の流れが読めた信長は口を噤むが、さっぱりわからない蝶夏は六介に先を聞く。

六介は一瞬くしゃつと顔の皺を深めたが、すぐに元に戻した。

「お嬢ちゃんは、なんて言うか、鈍いのう」

「むう。失礼な」

「……事実だろう」

ぼそりと信長が呟くが、どうやら二人の耳には届かなかったらしい。茜丸だけが、「同意」と視線を送ってきた。

「まあ、なんとというか。茜丸はお嬢ちゃんが他の馬に触ったから、嫉妬したんだと思うぞ」

「しつ、と……」

予想外の話に蝶夏は乾いた笑いを漏らした。

「あははー。まさか」

ねえ。と茜丸を見る。

当の茜丸がどこか諦めたような目で蝶夏を見ていることに、彼女自身は気付いていない。

「いや、あの、お嬢ちゃん？」

「……うん」

なおも言い募ろうとする六介に蝶夏は渋い顔をする。

「だって、嫉妬とか、あたしにする意味わかんないし。わかんないものは、とりあえず置いとくわ！」

ばっさりと悩みを切り捨てた蝶夏は胸を張った。

「うん。微妙に男前だね」

六介は感心したように言う。

「無駄に、の間違いだ」

信長のぼやきを完全に無視して蝶夏は茜丸に向き合った。

「いい、茜丸。あんたはあの子に悪い事したんだから、ちゃんと謝らないと駄目よ！」

「茜丸は言ってしまうばここの馬達の頭領だよ。そんな事せんでも許されるぞ」

六介の言葉に蝶夏はきつぱりと首を振った。

「駄目よ。相手がどんな立場で、自分がどんな立場でも、悪い事をしたら謝罪するのよ。それも出来ないような奴が頭張っちゃ駄目！」それから、眉尻を下げて、茜丸の顎を支えるように両手を添える。その瞳を覗き込んで、聞く。口元には自然と笑みが浮かんでいた。

「一緒にいつてあげようか？」

蝶夏の手を振り払わないくらいの小さな動きで、茜丸は蝶夏の言葉に「否」を示した。

「いい子。また蜜柑持つてきてあげるね」

昔飼っていた犬にそうしたように、額と額を合わせようと顔を寄せると、ぐいっとな首が掴まれた。

「……なに？」

蝶夏の襟首を掴める人間はこの場では、たった一人だ。

和んでいたところを邪魔された蝶夏は剣呑な表情でその『たった一人』に振り向いた。

「……………」

ところが、彼は蝶夏と同じくらい剣呑な表情を浮かべている。

内心で「えー、意味わかんない」と疑問符を浮かべた蝶夏がそれを表に出すより早く信長は彼女の身体を反転させた。

くるりと馬場の柵に向かい合わされたかと思うと、蝶夏の身体は持ち上げられて柵の向こう側にいた。

「お前は、もう行け」

振り向いて抗議しようとした蝶夏の耳元で囁く。

「期限は今日までだろう。それとも、諦めるのか？」

ぞわつと蝶夏の二の腕に寒気が走った。

今度こそ振り返って口を開いた。

「諦める訳ないでしょ！これからさつさと帰って勉強の続きよ！」

そう言う蝶夏に、顎をしゃくつて「行け」と無言で言う信長に、彼女は思い切り舌を出す。

「じゃあ、行くね！茜丸、六介おじさん」

乱暴に一人と一頭にだけ挨拶をして、蝶夏は馬場に背を向けて駆け出した。

展開に置いていかれていた方輔が、信長に一礼した後、被衣を抱えて彼女の後を追いかけた。

去っていく背中を呆然と見ていた六介は、ちらりと主を仰ぎ見る。まだ少し不機嫌が残っている信長は、その視線に気付きながらも無視をする。

その怒りを図りかねた茜丸が鼻先をさ迷わせているものだから、驚かせない程度のちからで、ぐいと引き寄せた。

「それで、謝罪はするのか？」

主の問いに茜丸は不承不承の態で頷いてみせる。

それに低く笑いながら、もう一つ、台詞を口に乗せてみた。

「あれが、気に入ったか」

問い、というよりは確認に近かっただろう。

茜丸は彼の二の腕に鼻先を擦り付けただけだった。

三十五、敗北感のち緊張感のち……

その夜、蝶夏は敗北感に打ちひしがれていた。

「お、終わんなかった……」

小卓の上に広げた冊子を見やる目は少し恨めしげだ。完璧に逆恨みだが。

「どどどどうしよう……。まずいよね、かなりまずいよね」

蝶夏はそわそわと立ち膝したり正座したりを繰り返す。

正直に言えば、今すぐ逃げたかった。しかし、売り言葉に買い言葉だったとは言え、『三日で三冊』は蝶夏自身が切り出した期限だ。言ったことには責任を持たなくてはいけない。彼女はさすがにこくは生きられない性格だった。

最後の足掻き、と『論語』の後半頁を捲る。それでも大分善戦したのだと方輔は褒めてくれた。

文字を目で追うが、全く別のことがどんどん頭の中を占領していつ、蝶夏は頭を抱える。

すると、廊下の奥から足音が聞こえてきた。

昼間の荒々しい足音ではなかったが、こちらに向かってくる足音の主などただ一人だ。

気配を断って近づいてくるあれも相当心臓に悪いが、今日のような場合は、徐々に近づく足音の方が心臓への負担が大きかった。

蝶夏の胸の中で心臓が暴れ回る。せり上がってくる緊張感に思わず胸を押さえていた。

すたすたと歩く静かな足音に、時折裾をさばく衣擦れの音が混じる。

障子にぼんやりとした影が浮かび、その影はそこで止まった。

「っ……………」

蝶夏は息を吞んで、身を縮こまらせた。

「……………」

待つ。

しばし、待つ。

障子に映る影はそれから幾ら待っても動かない。

緊張し過ぎて、蝶夏の胸元を握った手が震え出した。ぶつん、と緊張の糸が切れる音を聞いた気がした。

蝶夏は立ち上がり、障子を両手で左右に押し開いた。

「嫌がらせか！ ハラスメントか！！ 緊張し過ぎて心臓止まりそうになったじゃない！」

すぱんつと小気味のいい音が蝶夏の叫び声に続いた。

強張った顔で蝶夏が廊下にいる人物を見上げれば、信長は腕を組んで空を見上げていた。

くるりと振り向いた顔は、少しきょとんとしていた。

「なんだ。何を怒っている」

「っおう……」

自分自身何が言いたかったのかよくわからない声が蝶夏の口から漏れた。

「……」
信長は特に口を開かない。

「……そら、見てたの？」

仕方なく、蝶夏は聞いた。

最初の勢いなど萎しぼんでしまっていた。

彼女の問いに、信長は再び空に視線を移す。

「ああ。いい月だ」

彼の横に進んで、蝶夏も空を見上げた。

「……うわ、あ」

圧倒されるような星々の瞬きが夜空を彩っていた。

それぞれの星が、今にも降り落ちてきそうな程の輝きを放つ。蝶夏は初めて星の光に様々な色があることを知った。濃く、薄く、黄

色や赤や、青と言ってもいい色まであった。

そして、周囲の星を静かに脇に寄せるようにして一際輝くのが少し不完全な形の月だ。淡い金と銀を混ぜたような色が地の上さえも照らしている。

廊下から伸ばした蝶夏の手の平の上で月の灯りが揺れる。

ほうつ、と蝶夏の口から吐息が漏れた。

「綺麗……………」

目を細めてひっそりと微笑む少女の傍らで、信長は口元を緩めた。しかし、先程の蝶夏の叫びが彼の頭を過ぎった。

「そう言えば、『嫌がらせ』とは何のことだ」

上り調子だった気分には水を指されて蝶夏はむっと唇を尖らせる。

「なんで、ここでそれ聞くかなあ」

「お前が言ってきたんだろうが。……ああ、期限の事か」

やたら察しのいい信長は直ぐに蝶夏の懸案事項に思い至った。

「ぬ、ぬっ」

身構える蝶夏に彼はあっさり言った。

「あれは冗談だぞ」

「やっぱりそう来たか！」

てつきり罰則を言い渡されたものと思った蝶夏は、死刑宣告でもされたような心持ちで頭を抱えた。

少し時間を置いて、ようやく信長の言った意味を飲み込むと、目を見開いて口を開けた。

「はあ……あ？」

「そもそも三日で『論語』一冊読めるとも思っではいなかった。だが、冗談で期限を三日にしたらお前が喰い付いてきたからな、乗っけてやったまでだ」

「つまり、最初の『三日以内に全部読め』、は冗談」

「そうだ」

「それを本気にしたあたしが面白かったから、からかった結果、『三日で三冊』の条件をあたしは自分で出しちゃった」

「そうなるな」

「つまり、この三日間はあたしの一人相撲だったと」

「はっ。いい例えだな」

信長は面白そうに笑う。

その顔を見て、蝶夏の頬は引きつった。

「あ、あたしのあの努力はなんだったのよ！そして、さっきまでのあの、緊張感は？！」

両手を広げて、興奮していることを示す蝶夏を室内に押し込め、信長は障子を閉める。

ノーストレス社会！　と言いながらこめかみを押さえる蝶夏に聞く。

「それで、どこまで進められたんだ」

項垂れていた蝶夏は、胡坐あぐらをかいて冊子を広げる信長に「その、榮挟えいさんであるところまで」と指差す。

「結構進んだな」

ぱらぱらと捲りながら感心したように言う。

その正面にすんと、と蝶夏は腰を下ろした。

「方輔も、そう言っつて褒めてくれたよ」

「あれはいい教師か？」

「うん。丁寧に教えてくれるし。気晴らしにも付き合ってくれるしね」

「そうか」

穏やかに話す信長に、蝶夏は結構勇気を出して聞いてみた。

「ね、あの期限が冗談だったら、罰則みたいなものも無い、よね？」

「まあ、そうだな……」

そこまで言っつて、彼は顔を上げた。

蝶夏の情けなくも眉尻の落ちた顔を見て、苦笑する。

「そんなに嫌だったか？」

「誰が好き好んで貧血になりたがるっつてのよ」

「まあ、そうか」

「そうよ」

沈黙が二人の間に落ちる。

「……………」

用が無いようならそろそろ寝たいなあと、蝶夏は上掛けに視線を走らせた。今日は死刑宣告ならぬ、罰則の言い渡しを待つ為に普段より遅くまで起きていた。

我ながらなんて自虐的な事やっていたんだと嘆息する。

その嘆息に反応したのか何なのか、信長が口を開いた。

「蝶夏、お前生娘きむすめだな」

「は？ 木結び？ 何結ぶの？」

「違う。処女かと聞いている」

「……………はあっ?!」

これまでに無く、蝶夏の瞳は大きく見開かれていた。

「なんんななななになにに、嫁入り前の乙女に聞くな！ そんな

事！」

「嫁入り後ならいいのか」

「嫁入り前も後も無いわよ！ 聞くな！ そんな事!!」

「まあ、その反応だけで十分だな」

蝶夏の真っ赤に染まった顔を眺めて信長は言った。

「ああああああああああああああああ」

恥ずかし過ぎて、蝶夏はそのまま床に突っ伏す。

「なんて事聞くのよう〜。どうせあたしは彼氏いない歴十六年よう

〜」

「カレシ？」

「んーと、恋人、かな」

「お前恋人もいないのか」

「悪い!？」

床に両手について身体を伸び上がらせると、信長との距離が少し縮まった。

激昂した蝶夏はそれに気付かず、彼を睨み付ける。

「悪くはない」

片膝を立てた信長は、口元に手をやっていて、蝶夏からはその表情ははつきりしない。

「でも、いいの！ 今恋人募集中だもん。そのうちできるはず！

……多分、できる、と思いたい」

尻すばみに消えていく蝶夏の台詞を聞きながら、少し愉快に思っていた気分が冷えていった信長は、目を^{すが}眇めて言った。

「罰則を決めたぞ」

その声は冷たかった。

言葉の意味を捉えるより先に蝶夏はその声の冷ややかさに身体を揺らした。

ひやりとした感触が蝶夏の^{おとがい}頤を捕らえる。

薄暗い部屋なのに、蝶夏の顔に影が落ちた。

影の正体を掴もうと顔を動かそうとした蝶夏の動きを、顎を掴んだものが押さえ込む。

彼女の唇に柔らかいものが触れた。

それは、強張りを見せた蝶夏の唇をなぞるように掠めていく。

僅かにそれが離れた時、蝶夏は熱を持った吐息を感じた。

影が蝶夏の顔から離れていく。

頤を掴んだ指が、頬を撫でて離れていく。

近すぎてわからなかった顔がはつきり見えてきた頃、蝶夏の右手が彼女の意味より早く空を切った。

ぱしんっ

部屋に乾いた音が響く。

蝶夏は、目を瞬いた。

「なんで、なんで避^よけないの？」

信長の頬を打った右の手の平がじんじんと熱を持ち始めた。

叩かれた姿勢のまましばらく動きを止めていた信長が、左の唇の端を指で拭いながら答えた。

「綺麗に入ったな」

「そんなこと聞いてない！ 叩かれるのなんか、わかってたはずでしょ？　なんで素直に叩かれんのよ。不気味！」

「言つに事欠いて『不気味』とはなんだ」

信長の赤い舌が唇の端をちろりと舐める。切れていた傷はあつさりとふさがるだろう。

「だって、……………不気味なもんは不気味なのよ」

蝶夏は視線を揺らして下を向くが、すぐにきつと信長を睨んだ。

「なんでこんな事すんの？　罰則にしては酷過ぎ！　あたしファーストキスだったんだから！！」

ファーストキスの意味が分からない信長は無言で首を傾げる。

蝶夏はその疑問に答える。

「初めてのち、じゃない、キスよ！」

すっかりアニメソングの題名を口にするところだった。

「キスとはなんだ」

「あ、あれよ、口がどっかに触ることよ！　それで、ファーストキスだと大抵口と口よ。ってなんであたしはこんな事説明してんのよ！！」

「ああ。口付けとか接吻せつぶんのことか」

「おおあああああ。なんかその言い方、余計に恥ずかしい」
蝶夏はもはや耳まで真っ赤だった。顔中が熱くてたまらない。

両の手の平で交互に顔を仰ぎながら、何とか信長と向かい合う。

「だからっ、なんでっ、こんな事したのよ！」

「中々いい響きだな」

「なにがっ？！」

まるで蝶夏の質問とは違うことを口にする信長に、彼女はキレ気味だ。

「キスだ。口付けより余程いい」

「あああああ。あなたの好みなんか聞いてないわよあ！」

話は信長に操作されてどんどん本筋からずれていく。
もちろん蝶夏は気付かない。

おもむろに信長は蝶夏の髪を一筋掬い、唇を寄せる。

「これも、キスで合っているか？」

にやり、と上目遣いで蝶夏に笑みを見せた。

ぱくぱくと蝶夏の口は上下すれど、言葉が出ない。数日振りの凄まじい色気が放たれていた。

その姿勢は暫く続いたが、やがて、信長の肩が揺れ始めた。

「くつくつくつ……………」

堪えきれなくなった笑いに、彼は瞳を伏せて口元を押さえた。

またしてもからかわれたと知った蝶夏は、上掛けを掴んで、塊のまま目の前で笑う男にぶつけてやった。

「こんの、大馬鹿！！」

もう片方の上掛けを掴んで敷布の定位置で蝶夏は亀になって不貞腐れた。^{くさ}

ぶつけられた上掛けを腕一本で払い除けた信長の大笑いが、夜の寝室に、短くはない時間響いていた。

三十六、いざ熱田へ

その日、蝶夏はすっきりと目覚めた。

生まれて初めてと言っても過言では無いかもしれない。

その冴え渡った頭で、蝶夏は考えた。

なんだ。カウントしなきゃいいんじゃない。

本気でそう思った。

「さて、今日もやっぱりお勉強かなあ？」

朝食も済み、蝶夏は腕を組んで呟いた。

読むことはこの三日必死でやった成果が（どこと無く）出ている
気がするが、書く方は進歩が無く、変わり映えのないちぎれた毛虫
なのだ。

ちゃんと書けなきゃ、仕事も貰えないよねー。

彼女は相変わらず勉強すれば仕事が貰えると思っていた。

「蝶夏様。信長様は、本日は熱田に行かれると仰っていましたよ」

お茶を淹れていた茅乃が言った。

「熱田？」

「ええ。ここより南にある熱田神社の門前町です」

「熱田神社……」

「ご存じですか？」

「うーん。聞いたことがあるような、無いような」

腕を組んだまま、蝶夏は首を右、左と傾げてみせる。

「海に面して、交通と商業の要所です。市が開かれて、とても賑やかな所ですよ」

「市？」

ぱっと蝶夏は顔を上げた。

「それって、お店がいっぱい並んでるってことだよね！？わあ。」

行ってみたいなあ」

蝶夏の目がみるみる輝いていくのを見て、茅乃はにこにこ微笑んだ。

「蝶夏様もお連れすると仰っていたので、見られますよ」

「ホントっ?」

勢い込んで聞く蝶夏に、彼女は頷いて見せる。

「ええ」

「でも、忙しいんじゃないの? 熱田に行くのも仕事?」

ここ四日ほど殆ど会うことが無かったのを思い出して蝶夏がそう言えば、茅乃は少し沈黙してから返答した。

「……そうですね、お仕事もあるでしょうね。熱田を治めているのは信長様ですし。ですが、……」

「?」

蝶夏は口を挟まずに茅乃の台詞を待った。

茅乃はそんな蝶夏をとつぷりと眺めた後、続きを口にした。

「蝶夏様とお出掛けしたい、というのもあると思いますよ」

そう言って、にっこりと微笑んだ。

その微笑みの奥に隠された意味などさっぱり察しない蝶夏は「ふうん?」と言うしかなかった。

それは、茅乃の言うことを信じられ無かったと言うよりも、信長がそんな事を考えるとも思えなかったからであった。

すぐに関心が目の前のお茶に変わってしまった蝶夏を見て、茅乃は残念そうな顔をした。

熱田へは朝から出掛けると言うから、蝶夏はすぐに支度^{しよど}に掛かった。

とは言え、やることなんて茅乃が用意してくれた被衣^{かすき}を被るだけだ。

さっさと準備を済ませた蝶夏は茜丸に会いたくて、足早に城内を

進んだ。お供につくという方輔が黙ったまま、見送りをするという茅乃が急ぐ蝶夏を諫めながら彼女の後に続いた。

「蝶夏様、そのように急がれなくとも茜丸は逃げたりしませんよ」

「早く会いたいんだもん！あ。おはよう。」

道すがら出会う人出会う人に一々挨拶しながら蝶夏は進む。そんなものだから、早足なのに蝶夏の歩みは決して早くはなかった。

挨拶される側はというと、面食らったような顔をして黙ったままの者や、かろうじて挨拶し返す者と色々だ。

厩に近づけば、既に茜丸は鞍と手綱を準備され、外に出されていた。

「茜丸！」

蝶夏が嬉々として声を掛ければ、顔を振り上げて答えた。蹄が地を擦り、こちらに駆けてきたいような仕草をする。残念ながら、手綱は木の柵に括られて彼はそれ以上前へは進めない。だから代わりに蝶夏が駆け寄った。

驚かさないように、少し手前でスピードを緩め、茜丸の鼻先に手を伸ばす。蝶夏の手には鼻筋を滑らせるようにして、茜丸の顔はあっという間に蝶夏の懷に収まっていた。

「おはよう、茜丸。今日はご機嫌ね」

喉の辺りを撫でてやりながら蝶夏が言えば、彼は瞬きで肯定する。ふと昨日の一件を思い出して、蝶夏は茜丸の耳元に口を寄せて囁いた。

「ちゃんと、謝った？」

思わずくすくすと笑いを漏らせば、くすぐったかったのか茜丸は耳をぱたぱたと動かした。

それから少し身を離して、蝶夏をひたと見据えた。「当たり前だろ？」そう言っているようだった。

いい子いい子とたてがみ鬣を撫でてやれば、目を細めて気持ち良さげにする。

「まあ、蝶夏様。いつの間に茜丸とそんなに仲良くなられたんです

か？」

茅乃が驚いた声をあげた。

蝶夏は茜丸と顔を見合わせて、いつだろうかと思ひ返す。

……いつだろ？わかんないな。

だからこう言った。

「多分、餌付け作戦成功？」

ことん、と首を傾げて言う蝶夏の背後で、方輔が「そんな馬鹿な」と呟いた。茜丸のプライドの高さは蜜柑ごときでは乗り越えられない。

茜丸は無表情に蝶夏の頭を鼻先で小突いてきた。

「え。え。なに、茜丸。蜜柑美味しかったよねえ？」

全く小突かれる理由がわからない蝶夏は戸惑った声を上げる。

小突かれて、よろめいて、と、と、と前に進み出れば、どんつと何かにぶつかった。

んん？昨日もこんな事があつたような……。

と、デジャブを感じた蝶夏が顔を上げれば、信長が立っていた。

「何を遊んでいる」

いつも通り、すつきりとした簡素な衣装に身を包み、高く結い上げた長い黒髪は少し跳ねている。髪^{いぶか}の結び紐は今日は鮮やかな朱色だ。

「あ。おはよ」

自然に朝の挨拶が蝶夏の口から出た。

目覚めた時にさっぱりと昨日のキスを無かったことにしようと思ったせいか、彼の顔を見ても蝶夏の心は大人しいものだった。

一方信長は、自分の感情に素直な蝶夏がいつも通りであることを訝^{いぶか}しんだ。面白いぐらいに過剰な反応をするだろうと予想していたから、正直拍子抜けだった。

片眉を引き上げて、僅かに感情を露わにする。

「支度が早いな」

しかし発した言葉は全く別の内容だった。

「だってこれ、被るだけだし」

蝶夏は言つて、被衣の両端を持ち上げる。

夏らしい、白地に青い小花の散った模様の布地は蝶夏の顔から胸元にかけて薄い影を作っていた。

蝶夏の姿を一瞥した後、信長は茜丸の手綱を取った。進み出てきた六介が木の柵から茜丸を解放した。

「六介おじさん、おはよう」

「ああ、お嬢ちゃん。おはようさん」

「昨日の子、大丈夫だった？」

茜丸に虐められ、信長の怒気で撃沈した葦毛の馬を蝶夏は心配していた。

「おお。あやつなら、今朝はもう元気じゃったて。嬢ちゃんが気にするようなことはないぞ」

六介は朗らかに言った。

ほつと息をついた蝶夏は笑う。

「そお。良かった」

「それに、今朝は茜丸もご機嫌でなあ。なあ？」

六助が茜丸に問いかけると、彼は蝶夏にすり寄つて、その問いを無視した。

「ごめんねー。出掛けるって言つから、今日は蜜柑持つてきてないの。また、今度ね」

茜丸が上機嫌な理由を食べ物だと思つた蝶夏は額の辺りを撫でてやるが、彼は「なんでわからないんだ」と言わんばかりの視線を蝶夏に送るばかりだ。

同じような視線が、そこら中から送られている事に蝶夏は全く気づいていなかった。

そんな中、誰より先に意識を切り替えたのは信長だった。

「まあいい。そろそろ行くぞ」

「はっ」

方輔が返事を返して、自分の馬を引き取りに行った。

「今日のお供は方輔殿だけですか？」

茅乃が信長に問う。

「いや。勝三郎と内蔵助くわいざうすけが行く」

「では、その勝三郎はどちらに？」

茅乃は信長の背後に立つのが、年若い青年一人であることに眉を顰ひそめた。声に少しばかり険がある。

「別の仕事を任せたから少し遅れるだろうな。後から追いかけると言っていた」

「まあ、そうでしたか」

口元に手をやって茅乃はにこやかに微笑んだ。しかし顔とは裏腹に「てつきり私に折檻せつかんされるようなことをしているのかと思ひましたわ」と冷たい声音で呟いた。

ひいひい。

蝶夏は思わず二の腕をさすった。鳥肌が立っていた。

「内蔵助」

茅乃の怖い発言をなんら意に介さずに、信長は背後の青年を呼んだ。

あらぬ方向に視線を送っていた彼は、即座に背筋を伸ばしてこちらに歩み寄った。

蝶夏の目前に立つと、軽く一礼する。

によつきりと、背中に背負っているモノの先端が頭の上からちよつろつと覗いた。黒い鉄の筒は、どう見ても銃口だった。

「……………」

蝶夏は見間違いかと思って自分の目を擦った。その間に内蔵助は姿勢を戻し、ソレは見えなくなってしまった。

「佐々《さっさ》内蔵助と申します。趣味は短筒たんづつ作りと火薬の調合となります。どうぞ宜しく御願ひ致します」

それから、深く一礼する。

今度は背中のブツの全容が見えた。唐草模様の布地と革に包まれた銃くが括りつけられていた。

「はあ。蝶夏といます。趣味は、ん〜と、スポーツ観戦とか、ウインドウショッピング、……………」

そこまで言つて、相手に通じない単語ばかり使っている事に気付いた蝶夏は、言い直した。

「運動しているところ見たり、あ、自分でやるのも好きだなあ。あとは、ウインドウショッピングってなんて言えればいいんだろ。買わない買い物？見るだけ買い物？」

「店を冷やかすだけか？」

懸命に考えながら話す蝶夏に、信長が口を挟む。

「ああ。そうかな。でも、冷やかすつて、人聞き悪い感じする」

口を尖らせる蝶夏に、信長は口の端だけで笑う。こっちは人が悪そうに見えた。

「まあ、趣味はそんな感じ、です」

蝶夏が適当に話をまとめると、内蔵助はこくりと頷いて見せた。あまり話さないようだ。

和製ロボット（長秀）と同じ属性かなあ。

蝶夏は内蔵助にそんな印象を抱いた。背中の銃の事は何となく突っ込み難かった。

「蝶夏、上げるぞ」

「へ？」

ひょいと、唐突に信長は蝶夏の腰を持ち上げて馬上に乗せてしまった。

すぐに自分も茜丸に乗り、手綱を引いて歩を進めた。

茅乃が「いつてらっしやいませ」と淑やかに頭を下げる。

「じゃあ、いつてきます」

信長には文句を言うだけ無駄だと思った蝶夏は、茅乃に手を振った。今回は茅乃も手を振り返してくれた。

すぐに方輔が追いついてきて後に続く。いつの間にやら内蔵助も馬に乗ってそれに並んでいた。

城門を抜け、堀に掛かる橋を渡り終わる頃、背後から早足の蹄の

音が聞こえた。

「遅くなりましたっ」

そう言つて茜丸のすぐ脇に寄つてきたのは、勝三郎を乗せた茶色の毛の馬だった。

「おはよう、勝君」

「はい、おはよう、蝶夏殿」

蝶夏の挨拶に、勝三郎はにこやかに答えた。

ややしばらく彼女の顔を眺めた後、「んん？」と首を捻った。

「……勝、君？」

「うん。あだ名」

「……………」

「いやなら変えるけど？」

「いえ、いえ。嫌とかじゃなくてですねえ。なんて言つか、信行様のことは」

「行君」

「そう！それなのに僕まで同列に」

「勝君」

「と呼ぶのはいかなものかと……」

「無駄に息が合っているな」

蝶夏と勝三郎の打てば響くようなやりとりに、信長が感心半分呆れ半分の声を出す。

慌てたのは勝三郎だ。

「いえいえいえいえい！まさか！」

左手で手綱を握り、右手を顔の横で精一杯振つて否定を示す。

「で、勝君は有り？無し？」

蝶夏が繰り返して聞けば、「いいんじゃないのか」と信長が答えを返した。

その視線は前を見据えるばかりで、勝三郎に彼の真意は見えなかった。色々と懸念は残るが主がこう言っているのだ。

「はあ。勝君で結構ですよ」

勝三郎の答えはこれしかなかった。
四頭の馬は、一路南へと進んだ。

三十七、市といえば

「わああ！」

熱田の町に着き、当地に住む信長の部下に馬達を預けた。

そこから暫く歩いた先に広がっている光景に蝶夏は感嘆の声をあげた。

大きな通りに木造の建物が立ち並び、その殆どがどうやら店舗のようだ。道に張り出すように木の屋根を伸ばしたり、厚手の布で日差しを遮ったりしながら、その下に沢山の商品を並べている。筵むしろの上に果物や野菜を並べる店。大きな桶の中に種類の魚を入れて、大声を張り上げて呼び込みをしている店。反物たんものが山の様に積まれた店。実に多種多様な品があった。

そして、これらの商品を買おうとする人もまた、多い。車が二台くらい余裕で通れそうな幅の通りだというのに引つ切り無しに行き交う人で先を見通すのが難しいくらいだ。

「凄い、人がいっぱいいる！」

興奮した蝶夏は大通りに進み出ようとしたが、冷静な声がそれを引き止める。

「はぐれるなよ、蝶夏」

振り向けば、眉間に微かに皺を寄せた信長がいた。その背後では、勝三郎と方輔が苦笑している。唯一人、内蔵助だけがやはりあらぬ方向を見ていた。

むう。あれは田舎者だと思っているな！渋谷のスクランブル交差点の方がここより凄いんだからな！

三人の視線に不快感を感じて、蝶夏は比べてもしょうがない対象を持ち出して心中だけで反論した。

唇を尖らせながら、それでも蝶夏は了解を示した。はぐれたら、困るのは蝶夏の方だから。

「わかってるよ！ちゃんと後ろについて行ってくれば！」

「どうだかな」

にやりと笑って、信長は蝶夏を追い抜かして大通りを進み始めた。その斜め後ろに勝三郎、内蔵助くわいざつごが続く。

「参りましょう、蝶夏様」

方輔の促す声に頷いて、蝶夏は小走りに信長の背を追った。

それなのに、その背中が白くぼやけ始めた。

「……えっ」

驚いて一瞬足を止めた蝶夏だったが、はっと我に返り、慌てて足を速めた。

手を伸ばし、声をあげる。

「信長っ」

視界は真っ白い靄もやに埋め尽くされた。

少女の切羽詰った様な声が聞こえた気がして、信長は振り返った。目的の姿は無く、方輔が目を見開いて立っている。

「蝶夏はどうした」

低く問えば、方輔は肩を揺らして信長を見上げた。

「突然、消えられたのです……。先程までは確かに私の目の前を歩いてらっしゃいました！」

青褪めた顔で言う。

「突然消えたって……。おいおい、はぐれちゃっただけでしょ？」

勝三郎が呆れたように言うが、内蔵助が口を挟んだ。

「違います。白い靄もやに包まれて、姿が見えなくなりました」

いつ抜き放ったのか、その手には背中中の銃が握られていた。

蝶夏すがの声が聞き間違い等では無かったことを信長は確信した。

瞳を眇すかめて、周囲の気配を探る。微細な音を拾う。顔に出来た陰

影の奥で、金色の光が鈍く輝いた。

熱田に元より充満する神気が、濃く、しかし狭い範囲に揺らいでいた。

それを知るや否や、信長は踵を返す。

「信長様っ。どちらへ？」

「あの阿呆を迎えに行く」

勝三郎のらしく無い慌てた声に、信長は短く答えた。

白い。

信長の大きな背中を掻き消した靄は、もはや蝶夏の視界いっぱい
に広がっていた。

「どこよ、ここ……」

隠し切れない不安が、声に滲んでいた。

恐る恐る足を踏み出せば、一応地面はあるようで、前に進むこと
は出来た。

一步、また一步と進むが、辺り一面同じ景色なので、本当に進ん
でいるのか怪しいものだ。

そうやって幾らか進んでいくと、少し先に、赤い色を見つけた。

信長の髪^の結い紐が朱色だったことが印象に残っていた蝶夏は思わ
ず、そちらに向かつて駆け出していた。

「あっ」

赤の正体が判別できる位置まで来て、蝶夏は足を止めた。

正体は、^{ひばかま}緋袴だった。正確に言うと、白い小袖に緋袴を^{まと}纏った女
性だった。

所謂巫女装束に身を包んだその人は、茅乃と同じくらいの年齢だ
った。長い黒髪を肩に垂らしながら、一本に結んでいる。切れ長の
目に、鼻筋の通った^{うりさねが}瓜実顔。上品な仕草で立っていた。

「突然お呼び立てして申し訳ありません、蝶夏様。我が主が貴女様
にお会いしたいと仰せです。どうぞこちらへ」

彼女がゆったりと手の平で示した先には朱色の鳥居と同じ色の板敷
きの回廊が続いていた。

「あの、どちら様？出来れば、さっさと一緒に来た人たちと合流し

たいんだけど……」

蝶夏の言葉に、彼女はこくりと一つ頷いた。

「戸惑われるのは御尤もで御座います。しかし、これは我が主の仰せ。大神の御言葉に人如きが逆らうも愚かしゅう御座います」

一時同情らしき色を見せたかと思えば、次の瞬間彼女はあっさり
と蝶夏の言い分を切り捨てた。しかも全て棒読みだ。

呆氣にとられた蝶夏の手を、彼女の白い手が優しく、しかし強引に掴む。そのまま、緋袴の裾を揺らして前に進んでしまう。

腕をとられてしまった蝶夏はつんのめるように、足を前に動かしてしまった。

後はもう、ずるずると、引き摺られるように回廊を進むばかりだった。

回廊の先には広間があった。同じく板張りで、途方もなく広くも見えるのに、ほんの数歩で突き当たりに着いてしまった。

広間の突き当たりには御簾が下ろされ、その先は一段高くなっている。御簾の奥の様子は伺えないが、うつすらと人影が見えた。

蝶夏の手を掴んでいた女が、その手を放し、その場に膝を着いた。

「大神様、ご所望の娘をお連れいたしました」

「ご苦労」

女のたおやかな声音と正反対の低く太い声が御簾の奥から響いてきた。

つまり、なんだ？この奥にいる人が、このお姉さんに命令してあたしをここに連れてきたって事？

蝶夏は立ったまま、眉間に皺を寄せて考えた。

「その通りだ、娘よ」

御簾の奥から、今度は蝶夏に向けて発せられた言葉に蝶夏は目を剥いた。先ほど考えたことは、あくまで蝶夏の頭の中で考えたことであって、決して口に出してはいなかったのだ。それだと言うのに、まるで人の心と呼んだかのように答えが返ってきた。

「そなたの心は面白いぐらい素直だの。聞こうと思わんでも聞こえ

てくるわ」

「んな馬鹿なっ！」

驚く蝶夏の台詞に反応したのは、傍らの女だった。

ぐるりと首を巡らし、無表情ながら蝶夏を睨みつけた。

「あつたのおおかみ熱田大神様に向かつて何という口の聞き様。お控えなさい」

美人の睨みというのは中中迫力があるが、そんな事に怯む蝶夏ではない。むしろ抑揚の無い口調の方が怖いのだが、逆に睨み返して、その場に仁王立ちする。

「誘拐犯相手に控えてどうすんのよ！誘拐されたときは冷静に、かつ下手に出ないのが一番なんだから！」

どこかで覚えてきた間違った知識を蝶夏は堂々と披露する。多分誘拐された当人の対処方法と、身代金を要求された場合の対処方法が中途半端に混ざっている。

「ゆ、誘拐犯ですって……」

蝶夏のストレートな言い方に、女は平坦に言う。一応動揺しているのか、一回だけでもった。

未だかつて神を相手取って「誘拐」を訴えた者などいただろうか？いや、いない。たぶん。

やはり無表情のまま、女は立ち上がり、蝶夏に対峙した。

「あやめ落ち着け、文女」

「しかし、大神様……」

主の諫める声に、巫女装束の女、文女は瞳を揺らす。それでも無表情だが。

「娘にもその供の者にも了解を得ずに連れてきたのだ、まさしく誘拐じやろうて」

神妙に話しているが、声は震え、笑いを堪えているようだった。

「じゃあ、帰して！迅速に！」

蝶夏が言えば、「まあまあ」と取り成してきた。

「そなた、折角神に会えたのだから、なんぞしたい事は無いか？ん？」

便所神の千那木といい、この大神といい、男神は蝶夏を子ども（孫？）扱いする倣いらしい。

ご機嫌を取る様にされたって蝶夏の不快感は上がるばかりだ。

「したいことって……、そっちが勝手に連れてきたくせに聞く？ 普通」

「はっはっはっ。儂はあの小生意気な吉法師のところに変わった娘が居ると聞いてな、会いとうなった。だから連れて来た。いや、いや、そなた面白いのう」

何とも大らかに笑いながら、大神は言う。

「うるさいなあ。こっちの人にしてみれば、あたしはさぞかし変わってるでしょうともっ」

そっぽを向いて、蝶夏は呟いた。

「こつちと、そっち、のう……。そなたは、時を超えたのじやろう？」

背けていた顔を、蝶夏は思い切り、大神に向けた。

「知ってるの！？」

「儂を誰と想っている。三種の神器の一つ、『草薙の剣』を祀る熱田の神ぞ」

威厳に満ちた強い言葉だった。

「そう、なんだ。わかるんだ……。神様ってやつばすごいのね」

ゆらり、と蝶夏の足元が揺れた。

力が抜け、ぺたん、と床に座り込んでしまう。

「じゃ、じゃあ、帰り方とか……。そう！ 帰り方知らない？！ ううん、知りませんか？！」

身を乗り出して、蝶夏は尋ねた。

まなじり
眦には涙が滲んでいる。

もしかして、帰れる？ 帰れるの？

期待と不安が胸に渦巻く。

帰れるなら、帰り方がわかるなら、誘拐犯にだって遜る。へりくだ

「帰り方……」

熱田の大神は顎に手を添えて、唸る様に言った。

「そう！……です。知ってるなら教えてください！あたし、早く帰りたい！」

思い出せば挫けてしまうから、蝶夏は信長の胸で泣いて以来、極力帰る場所のことを考えないように過ごしてきた。

なんだかんだと忙しかったから、努めて考えないようにする機会はそう多くは無かったが……。

そうか、もしかして、信長ってそれも狙ってたりしたのか、な？

一瞬、そんな風に思い至るが、遮るように大神が言った。

「還る方法とやらだが」

その台詞に、蝶夏の頭の中は帰ること一色に染まってしまった。

「はい！帰る方法はっ?!」

「わからぬ」

「うん！」

大きく、蝶夏は頷いた。

「……………」

両者、無言を持って思考した。

「むむう。やはりわからんな」

「マジ?!」

そんな、思わせぶりに言っというて、それ?!

蝶夏の心中を見た大神は僅かに申し訳なさそうに言葉を紡ぐ。

「時を超えるなどと。そんな力は、感じることは出来ても、発揮することは出来ぬよ。いかに信仰を集める儂とてな」

「……そんな。あつ、じゃあ、そういうのに詳しい人知りません？」

諦めたくない蝶夏は食い下がる。

御簾の奥で大神が首を振った。

「八百万の神の中にはもしかしたら居るかも知れぬが、儂の知る限りではおらんな」

「そう……」

俯いた蝶夏に、大神は穏やかな口調で言う。

「そなたの中に、ここで生きるという選択肢は無いのか？今のそなたがそうであるように、抗えぬ運命というものは誰しもあるう。それに従おうとは思わぬのか？」

考え、考え、蝶夏は言葉を紡ぐ。

「ここに来て、もう何年も経っているって言うんなら、あたしだって腹括り、ますよ。でも、……まだ七日なんだもん。それに、帰るためにあたしが何かしたかって言うと、何にもしてないし。信長のところでお世話になって、茅乃や方輔に面倒掛けてるだけだもん。そんなのいつまでも続けられる訳ないし。その内どうにか一人立ちして、そうよね、大神様が知らなくっても、他の神様が知ってる可能性だってあるし。うん。やっぱり第一目標は一人立ちね！一朝一夕になんでも解決する訳じゃないもんね！よし、凹むのはおしまい！」

結論が出たところで、蝶夏は立ち上がってぎゅっと拳を握り、大神に向き直った。

「そういう訳で、とっとと元のところに帰してください！あたし、やらなきゃいけないことがいっぱいあるみたいなので」

輝く笑顔でそう言った。

床に膝を着き直していた文女が、無表情ながら、どこか呆気にとられた顔をしている。

かたかたかたかた、かたかたかたかたかたかたかたかた

しかし、御簾の奥から響いてきた小さな物音に気づき、蝶夏と文女、二人の注意はそちらに引かれた。

あーはははははははははは

けたたましい笑い声と共に、暴風が吹いた。

御簾はぴくりとも揺れないのに、蝶夏の全身に吹き飛ばされそうな程の『何か』がぶつかってきた。

ぺたん、と。蝶夏は再び板張りの床に座り込んでしまった。

「へ？」

うつかりするとそのまま床に突っ伏してしまいそうなほど、全身

から力が抜けていた。

「おやおや、儂の神気に当てられてしまうとは……」

「しんき？」

僅かに驚きを含んだ声で言われた言葉に蝶夏は聞き返した。

それに答えたのは文女だ。

「神々が放たれる気配や力の事でございます。あらゆる対象物に様々の影響を及ぼします。ですが……」

「そなたはこのほか影響を受けやすい様じゃな」
神気とな。

首を傾げようと思えば力が入らず、ごん、と音がしそうな勢いで倒れていった。ちよつと痛い。

「おつとと、迎えが来よつたぞ」

「迎え？」

今度は反対側に、ごん、と蝶夏の首が倒された。

するすると目の前の御簾が上がり、大神の胸元まで覗く事が出来るようになった。その手には扇が握られている。先程のかたかたという謎の物音はあれが何処かに当たった音だろう。

「あまり時間が無かつたのう」

さも残念そうに大神が言えば、文女が静かに頷く。

「はい。今代の織田弾正忠家御当主殿は拙速ながら我慢の足りない御仁と見受けられます」

「は、は。そう言うてやるな。あれは中々礼儀を弁えとるぞ？……」

今は頭に血がのぼつとる様だがの」

蝶夏にはさっぱり意味のわからない事を二人は楽しそうに話す。

徐に、熱田大神の扇を持った手が返った。

「戻りやれ、蝶夏。また遊びに来ると良いぞ。精々儂を楽しませよ」
「戻るって……、どうやって。っつーか、あたしは玩具じゃないっつーの！」

抗議する蝶夏の周囲は再び白い靄に包まれた。

三十八、ある神職者の災難

「お、お待ちください、織田様！」

焦る祝（神主、禰宜の次位に位置する神職）を引き連れて、信長は熱田神社の拝殿に乗り込んでいた。

「ああ。だからね、こっちの連れを、熱田大神様が連れてつちやった訳ですよ。だから迎えに行くだけだからさ、そんなに騒がないでくださいね。」

信長の半歩後ろを歩みながら勝三郎はフォローを入れる。

「お客人など今は来ておりません！断りもなく本殿に押し入るうなどと、いかに御領主と言えど、暴挙でございますよ！」

「本殿の扉を開ければ判ることだ」

顔を真つ赤にして言い募る祝に、信長は冷ややかな態度を取った。回廊を進み、祭文殿を抜ける。尾張造と呼ばれるこの地方独特の建築様式で建てられた熱田神社は、正面から拝殿、祭文殿、本殿が一直線に並び、更にそれぞれが回廊で繋がれている。

やがて本殿に着けば、そこで漸く信長は足を止めた。

本殿の扉の前に音も無く胡座をかくと、左手を左足の腿に置き、右手の拳を床につけて頭を垂れた。

背後で勝三郎もそれに続く。

戸惑ったままの祝も結局はそれに倣い、両膝について丁寧な礼をした。

「ご無礼は承知でここまで押し入りました事、これ全てそちらに我が連れがいるが為。是非ともお返し願いたい」

謝罪の言葉かと思いきや、扉に向かつて極丁寧に「お前が連れて行ったせいだ。さつさと帰せ」と言う信長に、若い祝は伏せていた顔を引きつらせた。

しばしの沈黙の後、ゆっくりと、本殿の扉が開かれた。軋みの音一つしない。

顔を上げれば、薄暗い空間が扉の奥まで広がっている。

その中央に、白い影がいた。

「えっ、あ。……本当に居た」

神の許し無くば開かれないはずの本殿の、その扉の内側に、少女が、蝶夏がいた。

ぺたりと床に座り込み、こちらに背中を向けていた。夏らしい白い被衣が、ここでは彼女の姿をぼんやりと浮かび上がらせていた。祝の声に遅れて顔をあげた勝三郎は口を開いた。

「ああ、いたいた。蝶夏殿のことだからここからも逃亡してたらどうしようかと思ってたんだよね」

のほほんと言う勝三郎の台詞に、祝の頭の中に疑問符が浮かぶ。

と、逃亡？織田様がお連れしているのだから、どこぞの武家の姫君ではないのか……？

彼の心中を知らぬ勝三郎は、腰を上げた。

「さてさて、行きますかね。……蝶夏殿？」

勝三郎の声が聞こえない距離では無いというのにぴくりとも動かない蝶夏に、彼は不審の声をあげた。

それでも蝶夏は肩を揺らすことさえしない。

立ち上がった信長が、本殿に足を踏み入れた。

「蝶夏」

恐ろしい程、『力』の籠もった声だった。

慣れているはずの勝三郎でさえ皮膚が泡立つような感覚がした。初めての祝などは立っていたならば確実に腰が抜けていただろう。

蝶夏の肩もびくりと揺れた。

視線をあちこちに走らせるから、被衣がそれに合わせてゆらゆらと揺れる。

それから、そろそろと後ろを振り返った。

日の光を背負うようにして立っている男には、当然の如く見覚えがあった。

「……信長」

すいつと彼は蝶夏の方に足を進める。

蝶夏は訳が分からず、眉尻を下げた。

「えと、ここ、どこ？さっきの所って……??」

「熱田神社の本殿だ」

「熱田神社……」

そう言えば、熱田はその神社の門前町だと茅乃が言っていた。と蝶夏は思い出す。

「ん？熱田？あれ、あの大神様が、熱田大神とか呼ばれてたかも？
文女^{あやめ}さんがそう言ってたな、と続ける。

「大神様がお会いになったと?!」

信長の背後から素っ頓狂な声上がるものだから、蝶夏がそちらを見れば、白い小袖と袴をまとった痩せ型の男が目を見開いていた。
誰さ。

首を傾げる蝶夏を見下ろしていた信長は、その傍らに膝をついた。

「はぐれるなと言ったはずだ」

蝶夏の周囲にまとわりつく彼の神の神気が彼を苛立たせる。

「言われたけど、これはあたしのせいじゃないでしょ!」

当然蝶夏は噛みついた。

「勝手に連れてかれて、どうしろってのよ。あの白い靄を何とかする方法があるってんなら是非とも教えてもらうわよ!」

腕を組んで、ぶんつと顔を背けた。

蝶夏の言っていることはもっともだと頭では理解しているが、それでも信長の苛立ちは収まらない。

蝶夏に右手を伸ばすが、彼女はさっと避けた。相変わらず四肢に力が入らないものだから、避けたと言うよりも仰け反った姿勢になっ
ってしまった。

そこで信長は奇妙な顔をした。

「なんだ、腰でも抜けたのか？」

「抜けてないっ!あの神様の神気に当てられたとか言ってたから、
そのせいよ!」

身体の状態として表現すれば、『腰が抜けた』と言うのは妥当な線なのだが、蝶夏は頑として認めたくなかった。

「なるほどな」

それだけ言うと、信長は蝶夏の細い腰に腕を回し、肩に担ぎ上げた。

「おわっ？」

戸惑いの声などまるっと無視して本殿の扉を抜ける。

そこで一度振り返ると、片膝を着いて頭を垂れる。

「のわわっ」

ずり落ちそうになった蝶夏は慌てて信長の肩にしがみつく。

蝶夏の背中に手を添え直して、信長は口を開いた。

「お返し頂き、感謝致します」

殊勝な言葉と、その所作の（蝶夏を担いでいるというのに）優雅な様に、神事を見慣れているはずの祝の男も目を見張った。

蝶夏に至っては驚愕の余りあんぐり口を大きく開いてしまった。

幸いな事に、その後信長が呟いた言葉は、小さすぎて祝の男には聞こえなかった。

「……二度は無いぞ」

とても神様に向ける台詞では無いし、またその声音の低い事と言ったら無かった。身体を通して聞いてしまった蝶夏はぶるりと震えた。開いた口も一気に閉じる。

蝶夏の重さ等無いとでも言う様にすっと立ち上がった信長は、回廊を戻り始めた。

その背後で、本殿の扉が静かに閉まっていくのを蝶夏は見た。慌ててほんの少し、礼をした。

それから、自分の現状を省みて、前にもこんな景色を見たなと思う。

「はっ。なんでまた担がれてんのよ！」

「お前が歩けんからだろう」

「ちよっと待ってくれたら歩けるよ！下、ろ、せ！あたしは俵じゃ

ないぞー！」

あまり自由になるとは言えない体で蝶夏は信長から離れようと努力した。しかし悉く押さえられ、無駄な努力となる。

「わーお。蝶夏殿、幾ら信長様でも俵は担がないよ」

のほほんと二人の後ろに続きながら、勝三郎が言う。

「んんん？どういう意味？」

「どういう意味だと思っ？」

軽口を言い合う二人を無視して、信長は祝に声を掛ける。

「客間は使えるか？」

「はい。すぐにお通しできます」

今度は怒りの気配も見せない信長に、ほっと小さく息をつき、彼は答えた。

「では、半刻程これを休ませてもらう」

「わかりました。では、案内の者をお付けしますので、社殿の外でお待ち頂けますか？」

祝の言葉に、信長は頷いて答えた。

青年が立ち去り、三人が社殿を抜けて外に出ると、方輔が安堵の表情で駆け寄ってきた。

「蝶夏様、ご無事でしたか！」

無事といえば無事ですな。と信長の肩辺りで蝶夏はぶつくさ呟く。

方輔の奥にいた内蔵助は蝶夏が信長に担がれているのを見て、僅かに目を開いていた。

しかし方輔からしてみれば初対面の辺りから蝶夏は信長に担がれていたものだから、今の状態もそんなに不自然では無かった。困った事に、二人のツーショットとしては十分にありえる光景だと認識している。

「行くぞ」

端的に言う信長に、供の三人が従う。

砂利の敷き詰められた境内を進む、人が少ないから裏通りのよう

な道なのだろう。

「もう歩けるんだけど」

多分、と内心で付け加えた蝶夏の訴えは無視された。担がれたまま揺れる景色を、蝶夏はむす／＼とした顔のまま眺めていた。

目に映る景色の中にやたらに太くて巨大な木が二、三本あった。注連縄が掛けられているものもある。

木々に遮られて落ちる影が涼やかな空気を作り、神社という神域の為なのか澄んだ風が流れている気がした。

瞳を閉じて、蝶夏は荒れた心を静めようと静かに深呼吸を繰り返した。

「織田様、お待たせいたしました。客間にご案内致します」
先程の祝の男とは違う人物だが、同じ格好をした青年が追いついてきて頭を下げた。

案内されたのはこじんまりとした部屋だった。

蝶夏を床に下ろすと、信長は無言で背中を向けた。

「それじゃあ方輔君。神氣に当てられてぐ／＼たりの蝶夏殿と仲良く待っててね」

「皆様はどちらに？」

「元々こつちに来た用件を済ましにね」

勝三郎のふざけた台詞に、方輔は真面目に対応する。

「どのくらいこちらでお待ちすれば宜しいでしょうか？」

「半刻くらいだよ。終わったら迎えに来るから、それまでは、く／＼れ／＼く／＼れ／＼も！大人しくしててね蝶夏殿？」

神氣に当てられて言うことを聞かない体と、あちこちで信長に担がれているのを見られた故の羞恥心で蝶夏は精も魂も着き果てていた。脇息（きせき）に（勝手に）もたれながら勝三郎を上目遣いで睨み付け、「うるさい」と言うのが精一杯だった。

三十九、青い海と機嫌取り

「あはは。ぐったりした蝶夏殿つてのも初めて見たなあ」

「人の不幸を笑うものではないと思う、勝三郎」

「楽しそうに言う勝三郎を内蔵助がくらのすけたしなめる。」

「え。不幸っていうか、一応幸運なんじゃない？熱田大神様に会えるなんて、滅多にないよ」

「本人が不服そうなのだから、不幸じゃないか？」

眉根を寄せて内蔵助が問う。

「傍から見れば幸運なんだから、僕としてはそれでいい！」

勝三郎はまだ笑っている。

内蔵助は肩を竦めた。それから主を見れば、腕を組んで先を歩くばかりだ。

内心、「面倒な事になりそうだ」と渋面を作っている事は誰も気付いてはいなかった。

まさしく半刻程で戻ってきた信長たち三人と蝶夏、方輔は帰途についた。

考え事をしていた蝶夏は全く気付いていなかったが、実はその進路は那古野城と反対の方向だった。

やがて特徴的な香りが蝶夏の鼻をついた。

「なに？潮の香り？」

気付いた彼女が顔を上げれば、少し先の方に砂浜と青い海が広がっていた。

「……海だ」

砂浜に入る大分手前で信長は茜丸の足を止めさせた。

「少し休憩を取る」

その言葉に蝶夏は彼を見上げた。

「じゃあ、海行つてきてもいい？」

「ああ、構わん」

瞳を輝かせて言う蝶夏に、信長は短く答えた。

許可を貰った蝶夏はひよい、と手綱を握る信長の腕を持ち上げた。その下を潜り抜けるようにして茜丸から下りた。もうこの高さにも慣れてしまったから、安いものだ。

軽やかに地面に着地して小走りで海辺へと向かう。

毎年、親友のひよりと海に行っていたが、今年はまだ行っていない。ひよりの歴女検定やイベント（何のかは知らない）の予定が立て込んで時間が取れなかったのだ。

海の家もビーチパラソルも何も無い、冬の海のように殺風景な癖に空気は夏なのだ。まるでプライベートビーチだと蝶夏は興奮していた。

「蝶夏さま」

馬を下りて少女を追おうとする方輔を、信長が軽く手を上げて止めた。

茜丸の手綱を勝三郎に渡して、ゆっくりと蝶夏の後を追って行った。

その間に蝶夏は被衣を丸めて流木の上に置いた。履いていた草履を片方ずつひよいひよいと脱いで、その傍らに置いた。

日差して焼けた砂が少し熱い。

さらさらと滑る砂の上を再び小走りに進んで、打ち寄せる波に足先をつけた。少しひんやりとして気持ちがいい。

着物の裾を片手で持ち上げて、歩を進めた。足の甲くらいまで海水につかる。火照った足を冷やすように、ぱしゃぱしゃと水を揺らした。

白い足首に跳ねた水滴が掛かって、汗のように踝くるぶしまで流れていった。

「機嫌は直ったか？」

すぐ後ろに追いついて来ていた信長が、波打ち際で腕を組んで言

った。

きよとん、として蝶夏が振り向けば、にやりと笑っている。

「……海に来たのはあたしのご機嫌取りだとも言うの？」

首を傾げて聞けば、なんと、「そうだ」と答える。

思わず蝶夏は噴き出していた。

「似合わない！」

「では、熱田大神に何を言われた」

唐突な話の転換に蝶夏はぴたりと笑うのを止めた。

視線が足元に落ちる。

戯れるように足先で海水を跳ね上げる。

「うん。……元いたところに、帰る方法は知らないって。そういうこと出来る神様の知り合いもいないって」

「……………帰りたいのか？」

穏やかな口調で聞かれたから、蝶夏も素直に答えを返した。

「当たり前だよ。帰りたいよ」

二人の視線が絡む。だが、二人ともしばらく口を開かなかった。

ただ、波の音が耳に届く。

そのうち蝶夏は首を振った。

「だからっていつまでも凹んでもしょうがないしね！だから、これからも、あたしがやることは変わらない。勉強して、仕事貰って、帰る方法を探すの」

腰に手を当てて宣言してやった。

「まだそんなことを言っていたのか」

「んん？」

蝶夏の宣言に呟いた信長の台詞は蝶夏には聞き取れなかった。

「なに？なに言ったの？」

彼に歩み寄って尋ねる。

ところが、引き潮に足を取られて蝶夏は体勢を崩した。

「あっ」

「……………っ」

呻き声を漏らさなかったのは、流石と言つべきだろうか。

「ご、ごめん！今のはあたしが悪かった！！入った？鳩尾みそおち入ったよね？」

信長の胸にダイブした蝶夏の頭が見事に彼の鳩尾を捉えたのだ。

「お、お前はっ」

怒っているのと苦しんでいるのの中間くらいの心持ちで信長は言つた。

「ごめんってば！」

慌てた蝶夏が鳩尾を擦つてやろうと手を伸ばすと、信長は怪訝そうな顔で海を見た。

「？」

長い左手が蝶夏の肩を掴んで引き寄せる。
だが間に合わなかった。

ばしゃんっ

派手な音を立てて大きな波が二人に襲い掛かった。

引き寄せられたままの体勢で、蝶夏は瞬いた。潮の香りをさせた水が顔の横を流れてくる。

振り上げば、頭から海水を被った信長が渋い顔をしていた。

長い髪が水を吸って顔に張り付いている。

「ふっ……………」

自分も殆ど同じ姿なんだろうと思った瞬間、蝶夏は可笑しくて可笑しくて仕方なくなつた。

「ひつどい顔！」

笑いながら、信長の顔を手を伸ばす。

目元に垂れてきた海水に、片目を瞑った彼の前髪を顔の脇に流してやる。

「あゝあゝ。もう、着物も凄い水吸ってる！」

背後から海水に襲われた蝶夏はともかく、正面から襲われた信長は酷かつた。

蝶夏は自分の右袖をぎゅっと絞つた。だばだばと海水が流れ落ち

ていく。ある程度絞ってから右手で持ち直して、信長を見上げた。

彼は蝶夏が避けてやったのでは足りなかったのか、不快そうに髪を掻きあげ、沖の方を睨んでいた。

「んっ」

蝶夏が、声を掛けると、見下ろしてきた。

袖を持った右手を伸ばすが、身長差のせいで顔まで届かない。

「ちよつとかがんでよ。届かない」

そういえば、素直に屈んできた。

絞った袖で顔を拭いてやると、驚いた顔をした。

「なんで驚くのよ」

「……いや。そう来るとは思わなかった」

「じゃあ、なによ。殴ればよかったの？」

「何か違う」

不毛な会話しているうちに、唐突に襲ってきたあの波が気に掛かった。

「さっきの何？また来る？」

後ろを振り向きながら聞けば、信長は「どうだろうな」という。

その返答の曖昧さをいぶかしみながら蝶夏は海に目を凝らす。どう見ても風いだ海だ。あんな高波など起こりそうも無い。

「あれが見えるか？」

信長が指差した先には黒い塊が動いていた。

「……鯨？」

「違う。海神だ」
わだつみ

「わだつみ？」

「海の神と書いて『わだつみ』と読む」

「神様？」

「まあな。あれは子どもだ。沖の方に親がいる」

流石にそんな遠くまでは蝶夏には見えなかった。

「はあ。で、あの海神（子）があたしたちに海水をかけたの？なんで？あの子に恨まれるようなことしたの、信長」

「少なくとも海神の恨みを買った覚えは無いな」

「じゃあ、他ならあるんかい。蝶夏は内心で突っ込んだ。」

「あれは遊びたがっているんだ」

「遊ぶ？」

「海神の子は人懐っこいそうだな。誰かの受け売りだな」

「ほ。あの子って噛む？人とか食べる？」

「人の血肉なんぞあれらには穢^{けが}れだ」

「ふうん。じゃあいつか」

「ざばざばと海水の中を蝶夏は進んだ。」

「もうここまで濡れれば海に入ってもあまり変わらないだろう。」

「おい」

信長は蝶夏に声を掛けたが、大体彼女が何をしようとしているのか分かっていった。

「遊んでくるー」

膝の辺りまで水に浸かれば、あちらから近づいてきた。

黒い艶光りした身体は流線型を描き、まさしく鯨のようなフォルムだ。鰭^{ひれ}は身体の側面に二対と腹の辺りに一対ある。六対の鰭と大きな尾びれの先はいずれも薄く、羽衣のように揺らいでいた。

「さつき、水かけてきたのは君？急にやつちや駄目でしょ」

円らな、鯨より大きめの蒼い瞳がこちらを見上げてくる。

尻尾を振って「遊んで遊んで」という小型犬と同じ輝きだ。

「うっ。可愛い……」

子どもと小動物に弱い蝶夏のポイントをばっちりついていた。

「うっうっ。遊んで欲しい時は、いきなり水かけないところから覚えてよね。そしたら遊んであげるから」

蝶夏の台詞の前半を聞いていたのか怪しいが、遊んでくれると言うことは分かったのだろう。蝶夏の足の周りをくると泳ぎ始めた。

「しょうがないな、と蝶夏は苦笑した。」

「いいんですか、遊ばせといて」

「海に引きずり込んだりはしないだろう。流石に」

勝三郎の差し出した布でがしと頭を拭きながら、信長は蝶夏を見ていた。

方輔も波打ち際で「あんなに濡れて……」と心配そうにしている。内蔵助だけは波が絶対来ない安全圏に立ったままだった。

「あ」

浪打際の三人より高い位置にいた彼は、海神（子）が蝶夏の背後から彼女の裾を引っ張ったのが見えて、声を上げた。

「ばしゃんっ、と派手な飛沫^{しぶき}を上げて蝶夏がひっくり返ったのはその直ぐ後のことだった。

四十、お風呂は癒しの空間だったのに

「酷い目にあつた！」

濡れネズミと化した蝶夏が海から上がってきたのは、しばらく経つてのことだった。

方輔の手から被衣を奪い取った信長は、それで蝶夏を頭から包んだ。

「のわっ？」

奇妙な悲鳴を上げる蝶夏を抱え上げると、勝三郎に顔を向けた。

「この辺りで一番近いのは五郎佐の分家だったな」

「はい。そうですね」

「お前先に行つて風呂を借りるよう言つてこい。このまま帰ると茅乃がつるさいだろう」

その一言に勝三郎は僅かに顔色を青くした。

「あ、姉上に殺され……、いえいえっ。すぐ行つてきます！」

彼は素早く踵を返して立ち去った。

信長もさつさと茜丸に乗ると、彼を走らせた。蝶夏が信長に声を掛けあぐねている間に、茜丸はその歩みを止めてしまう。

信長は再び蝶夏を抱き上げて、家人の挨拶に頷きながら家にあがり、廊下を進む。

被衣かすきのせいで周囲のよく見えない蝶夏は状況が全くわからなかった。

「こちらが湯殿でございます」

年配の女性の声がして、どうやら蝶夏と信長はその部屋に入っらしい。

床に下ろされたかと思うと、被衣が取り払われる。

乱れた髪に手を伸ばしながら、蝶夏は目の前の男を見上げた。

びっしりと濡れそぼった姿の蝶夏を見下ろして、信長は聞いて来た。

「一人で風呂に入れるな？それとも誰かつけるか？」

「へつ。……いいいいいい！大丈夫、入れる！」

那古野城でも初めの頃は茅乃が一緒に入っていたが、やはり銭湯や温泉でも無いのに誰かと入るのは居心地が悪かった蝶夏は、全力で首を振った。

「では、入っている」

蝶夏の背後の引き戸を指差した信長は、廊下へと出て行った。

ひとつ、息を吐いて、蝶夏は信長に示された引き戸を開く。

急いで用意してくれたのか、まだ十分ではないが、蒸気が部屋の中に籠っている。いつも入っている湯殿程ではないが、中々広かった。

「むゝ。知らない人の家で入るのは、びみょゝ。でもなあ……」

そう言って我が身を見下ろせば、まだ海水がぼたぼたと落ちてくる程ずぶ濡れだった。

「よし。入る」

びたびたとくつついてくる着物に苦労しつつもなんとかして脱いだ。いつも風呂に入る時の様に下着の着物一枚になる。

脱いだ物をどうするかでしばし悩むが、ここまで濡れていれば、どうしようと迷惑を掛ける事に変わりはないだろう。傍にあった籠に軽く畳んで詰め込んだ。

引き戸を開いて中に入る。ひたひたと足音を立てながら進み、桶を掴んで湯船の横で膝をついた。

お風呂に入る前にこの塩水をどうにかしなくてはいけない。そう思っただけで頭から湯を何度も被った。

息を止めてやっていたがそのうち息継ぎが必要になって、ぷはつと口を開ける。すると、顔の横を流れてきたお湯が口に入ってしまった。

「しょっぱ、……くない」

あらかた海水が流れたのか、握って鼻に近づけた髪の間からも磯臭さはしないようだ。

もう湯船に入ってもいいだろうと蝶夏は立ち上がった。

しかし、ふと、今着ている薄物にも海水が染み付いていないか気になった。

「うーん。やっぱりこれ脱がないと洗った気がしないよなー……」

眉間に深く皺が寄る。

思い立ったが吉日！とばかりに蝶夏は脱いでしまふ事に決めた。

右見て、左見て。誰もいないいいない。

左の腹の上にある結び目、そこから足れる細い腰紐の端を掴んで引つ張った。湿っているせいで思う様にほどけない。

うんうん言いながら、くいつともう一度引つ張ると、意外な程あっさりと腰紐はほどけた。

「やった！」

蝶夏が小さく歓声を上げた瞬間、がらりと引き戸が開いた。

ぴたり、と動きを止めた蝶夏の手の中から腰紐が逃れて、べちゃりつと音を立てて床に落ちた。

ぎしぎし言いそうな動きで蝶夏が振り向けば、薄物一枚の信長が立っていた。

「××××□！！！！？」

言葉にならない叫び声を蝶夏が上げると、信長は素早く間合いを詰めて来た。

すかさず蝶夏の口を塞ぐと、囁いた。

「ここは那古野城ではない。あまり騒ぐな」

ふがふが言いながら抗議する蝶夏を見下ろして、「静かに話せよ」と念を押す。

蝶夏がこくこくと頷いて、ようやく彼女を解放してくれた。

「誰が騒がすようなことしてんのよ！っていうか、なんで入ってくるの！？」

言われた通り、比較的小さめの声で蝶夏は彼を責め立てる。

しかしそこは信長。なんら悪びれた様子も見せず返答する。

「共に入れば時間の短縮になる。護衛の数も少ないのだ、早いに越

した事は無い」

「うう。わかるけど、一緒にはいるって、どうよ、どうなのよ！」
睨みつける蝶夏にも彼は何処吹く風だ。

「ところでお前、一体何をしようとしていたんだ？」

腰紐を落とした状態を指してそう言った。

その言葉にはつと自分の状態を思い出した蝶夏は慌てて襟元を掴んで腰紐を拾った。

「あ、あたしのところではお風呂は裸で入るもんなの。それに海水が気持ち悪かったんだもん。誰か入ってくるなんて思わなかったし！」

「ほう。……じゃあ、脱ぐか？」

面白がっている声の上から振ってくる。

かっとして立ち上がった蝶夏は噛み付いた。

「誰があんたの前で脱ぐか！！」

そう言つて、手にした紐を腰に回す。幸い濡れた袴はそう簡単にははだけなかった。

嚴重に、嚴重にしばってやる！と思うが、緊張や焦りで、上手く結べない。

段々目尻に涙まで浮かんで来た。

「何をやっているんだ」

呆れ声と共に伸びて来た手があっさりと結び直してしまった。

「もう、体は流したのか？」

そう聞いてくるから、蝶夏は唇をへの字に曲げながらも頷いた。

「だったら湯につかっている。冷えるぞ」

信長はそれだけ言つて、彼女を湯船の方へと押し出した。

濡れた着物が少し冷たくなって来たのは事実だったので、蝶夏は素直に湯船に入った。

二人が入るにも少し大きめのその湯船の端つこで蝶夏は縁にかじりつく様にして浸かっていた。

視界の端では、先ほどの蝶夏のように信長が頭から湯を被ってい

た。薄い布地が肌に張り付いて、彼の立派な体軀が透けて見える。細身の癖にしっかりと筋肉のついた背中に、蝶夏はつい見入っていた。プールで見た同級生の背中などとは比べ物にならない程立派なものだ。

それだけじゃない。髪をよけた襟足だとか、腕を上げる時に躍動する筋肉だとかに、やたら色気があるのだ。

それに気づいた蝶夏は、頬を赤らめて顔を俯けてしまった。

あああああたしは、腐女子じゃないいいいいい！

内心でそう叫んでいると、蝶夏の浸かっている湯がざばりと揺らいだ。

振り向くと、信長が両腕を広げて、悠々と座っていた。

だが、蝶夏の顔を見て、片眉を上げる。

「顔が赤いぞ。のぼせたか？」

ぶんぶんと蝶夏は無言で首を振った。まさか当人に見蕩れてましたなんて言える訳も無い。

「もう上がる！」

「そうしろ。ただし、うるつかないでそこで待っているよ」

「うん」

頷いて立ち上がろうとするが、信長の視線がまだこちらにあることに気づく。

「あ、あ、あ、あっち向けえっ！」

出口と反対方向を指さして、蝶夏は悲鳴のように叫んだ。

彼の視線が外れたのを確認して、そそくさと湯殿を後にした。

一体全体、なんだって信長と一緒に入浴するはめになったのか。海で遊ぼうなんて思った自分が悪いのか、蝶夏に海水をぶっかけて遊んで来た海神の子どもが悪いのか……。

つらつらと考えながら、下着まではあっさりと着替え終わった。用意されていた萌葱色の着物を手に取って、蝶夏は固まった。

着方がよくわからない。

さすがに下着を人に着つけてもらうのはどうかと思い、こっちに
来て早々に茅乃に教えてもらったから、そこまでは着れる。

しかしその先は、と言うと、いつも茅乃が楽しそうに着つけてく
れたのだ。何でも季節や天候で色々と色の組み合わせや模様の組み
合わせがあると言う事で、あれを合わせて、これを合わせて、いや
やはりさっきの色にして、と着付けていくものだから、蝶夏は覚え
きれなかった。

とりあえず、色とか模様とかは考えなくていい。なぜならここに
ある物を着ればいいだけだからだ。

問題はその着方。

まず、羽織る。袖を通して腰元で合わせる。そこにすかさず腰紐
を、結わえられない……。紐が腰に回る前に、はらり、と合わせた
襟がはだけるのだ。

「うつつうつつ……」

無理矢理結んでみるが、どうにも裾は歪むし、襟は整わない。

もういいつ、と帯を手取るが、はっと気づく。細帯の結び方が
分らない。

完全にお手上げだった。

そこに、湯殿から信長が現れた。

何気なくそちらに顔を向けた蝶夏は、一瞬の間も置かず顔をも
とに戻した。

濡れた白い着物は、着ていないのとあまり変わらないと言いたく
なる程透けるのだ。幸い蝶夏は素早い行動のおかげで、胸元くらい
までしか見ないで済んだ。

あれ、ちよつと待てよ。と考える。

信長がそうなら、自分もそうだったのか、と。

自然と、ぶるぶる肩が震えてくる。

羞恥心で顔に血が集まってくる。

見られた。見られた？……絶対見られた！

呆然とする蝶夏の背後から声が掛かる。

「まだ着替えていないのか？」

「ひいゝゝゝっ」

思わず蝶夏は過剰反応してしまった。

「なんだ、その声は」

それから蝶夏の着方を見て、鼻で笑った。

「下手くそ」

「うるさいなっ。着方がわかんないんだからしょうがないでしょ！」
信長は何か意外な事を聞いた、という顔をした。

「茅乃は一体何をしている……」

乳兄弟への疑問を呈すも、軽く嘆息してから、蝶夏の体をくるりと回して自分に背中を向けさせた。

彼女の前から腕を伸ばして、すいすいと着物を整えていく。

細帯を器用に結び終わると、蝶夏を再び反転させた。

「うん。これでいい」

「……あのさ、なんで着せられるの？」

前にも被衣を奇麗に整えられたことを思い出して、蝶夏は聞いてみた。

「ああ。着た事があるからだ」

にやりと、楽しそうに笑って答える。

「着た事あるって、……女物の着物を！？」

目を見開く蝶夏の何が楽しかったのか、信長は更に笑みを深めながら言う。

「まあ、お遊びの一環だ。若気の至り、か？流石にもう似合わんだろっな」

絶対に今でも似合うに決まっている。蝶夏は確信していた。

那古野城への帰路、蝶夏はむっとり黙り込んでいた。

そして、帰ってくるや、出迎えに来た茅乃を見つけて駆け寄った。

戸惑いながら、「あら、蝶夏様、お召し物が……」そう言った茅乃に、着物の着方をきっちり教えてほしいと頼み込んだ。素早く、迅速に、付け入られる隙の無い程完璧に着られる様になりたいと。茅乃はにっこり微笑んで、「まあ。丁度良いです。明日からは私の授業で、その時にお教えしようと思っていたところです」と言ってくれた。

しかしその背後で、勝三郎と内蔵助が青い顔をしていたことに蝶夏が気づく事は無かった。

四十、お風呂は癒しの空間だったのに（後書き）

読了感謝致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0555p/>

乱世を駆ける牙と傍らに遊ぶ蝶と

2011年5月5日23時25分発行